岩屋遺跡·平床Ⅱ遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

2001年3月

i路公団中国支社 県教育委員会

岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡

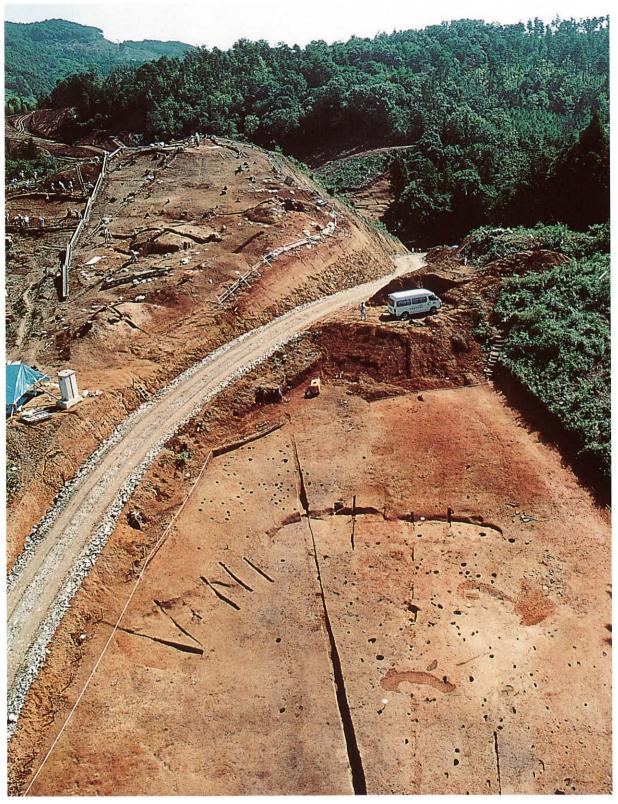
中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 6

2001年3月

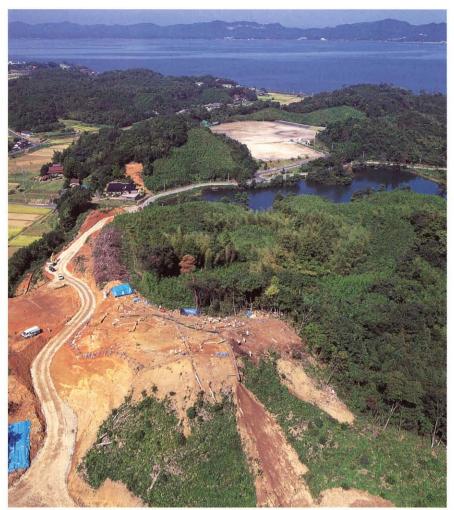
日本道路公団中国支社 島根県教育委員会



岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺、石棺内の状況



岩屋遺跡全景空中撮影



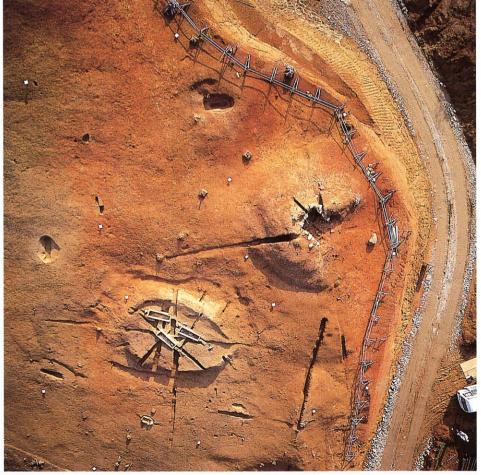
岩屋遺跡 遠景空中撮影



岩屋遺跡 I 区(古墳群) 全景空中撮影



岩屋遺跡 I 区 1·6号墳付近 空中撮影



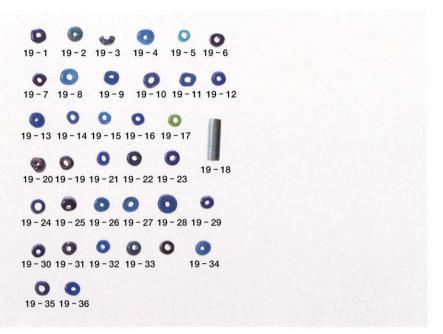
岩屋遺跡 I 区 2•5号墳付近 空中撮影



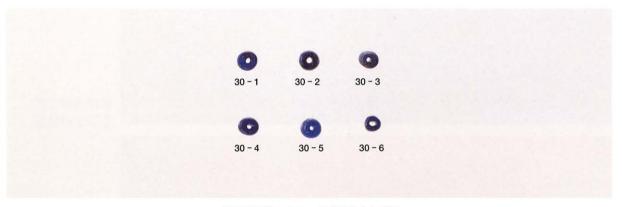
岩屋遺跡 I 区 全景空中撮影



岩屋遺跡 Ⅱ 区 全景空中撮影



岩屋遺跡 I 区 2 号墳出土玉類



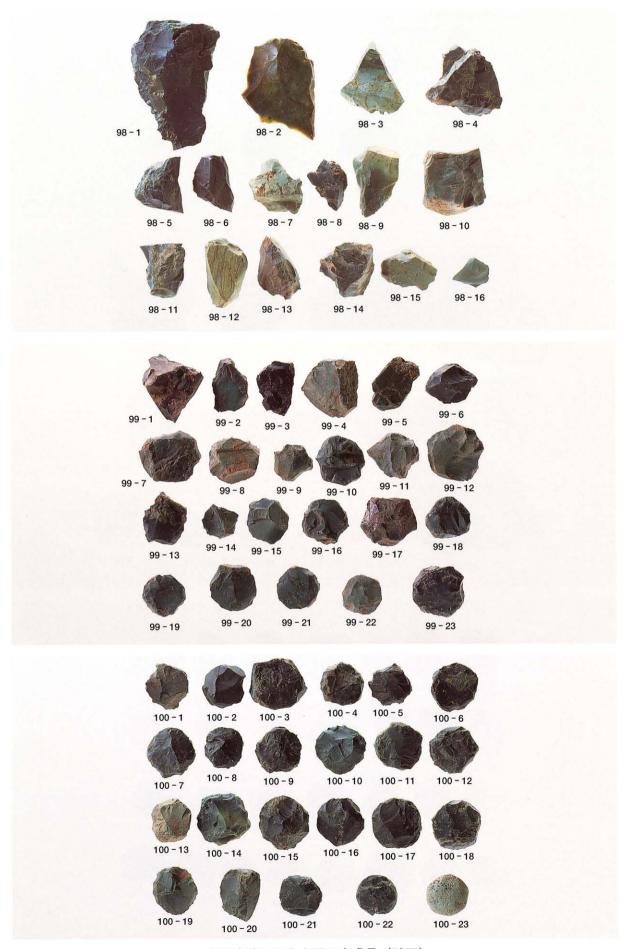
岩屋遺跡 I 区 4 号墳出土玉類



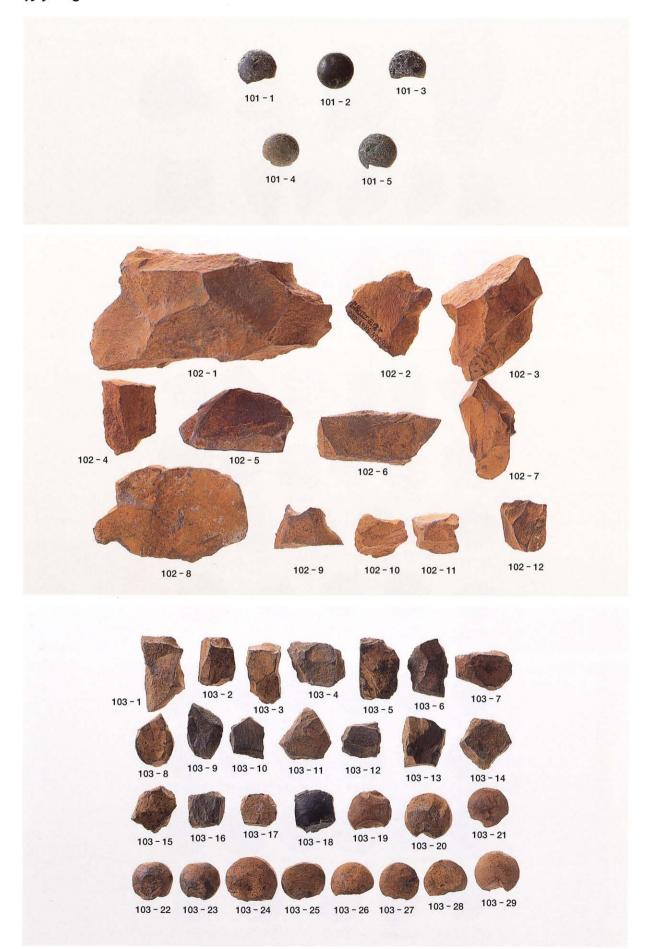
岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺出土玉類



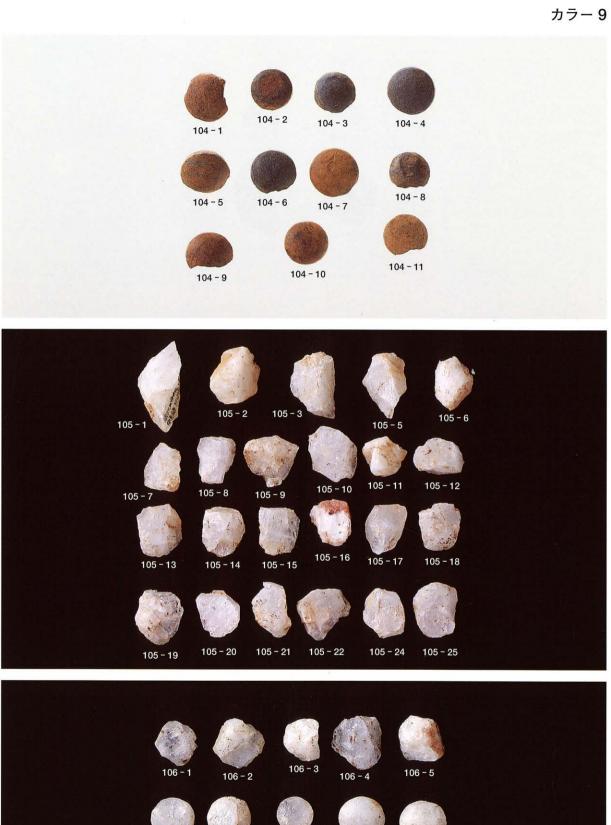
岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺出土玉類



岩屋遺跡 Ⅱ 区出土平玉未成品(碧玉)



岩屋遺跡Ⅱ区出土平玉未成品(碧玉・黒色泥岩)

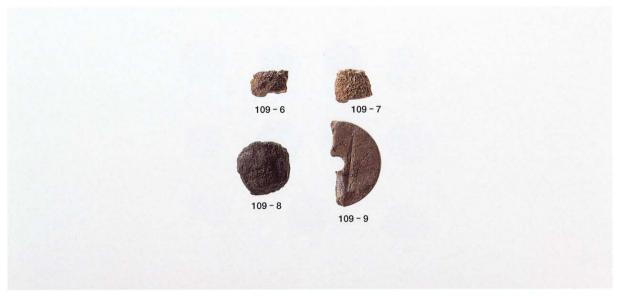


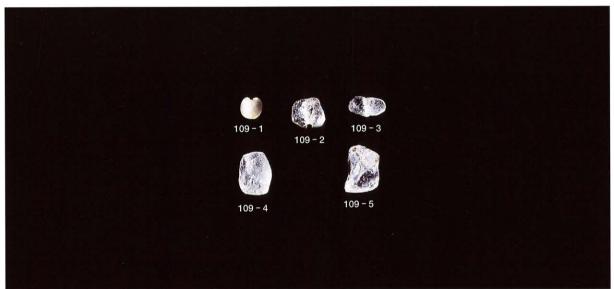
106-1 106-2 106-3 106-4 106-5

106-6 106-7 106-8 106-9 106-10

106-11 106-12 106-13 106-14

岩屋遺跡 Ⅱ 区出土平玉未成品 (黒色泥岩・石英)







岩屋遺跡Ⅱ区出土玉・石器類



平床Ⅱ遺跡遠景



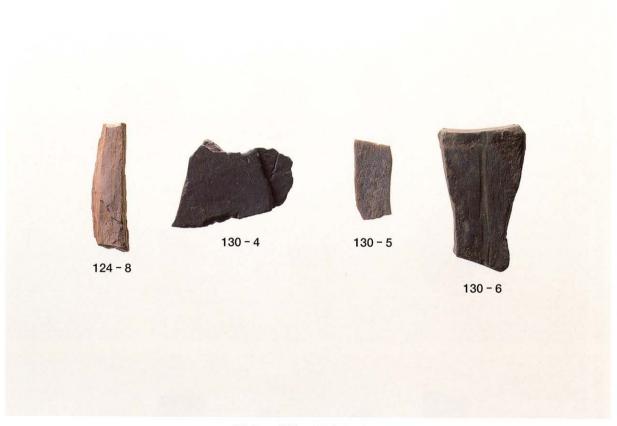
平床Ⅱ遺跡Ⅰ区出土めのう製玉未成品



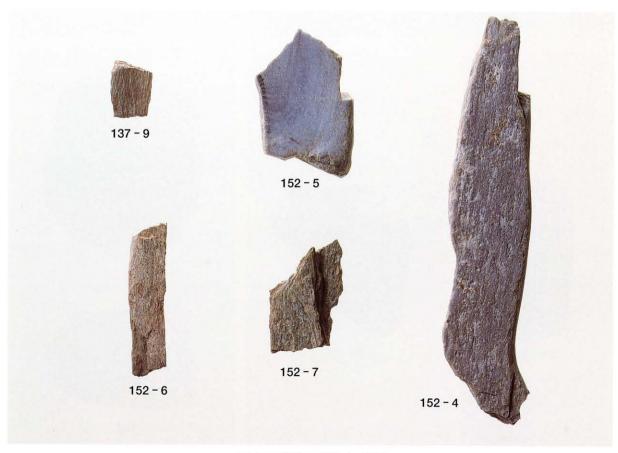
平床 Ⅱ 遺跡 Ⅰ 区出土碧玉・頁岩製玉未成品



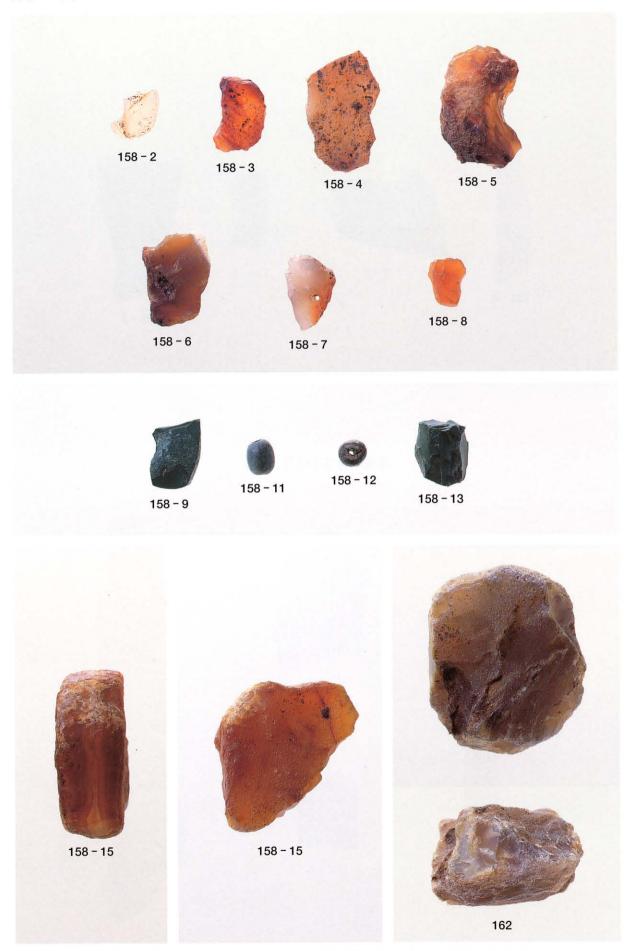
平床Ⅱ遺跡Ⅱ区出土碧玉・めのう製玉未成品



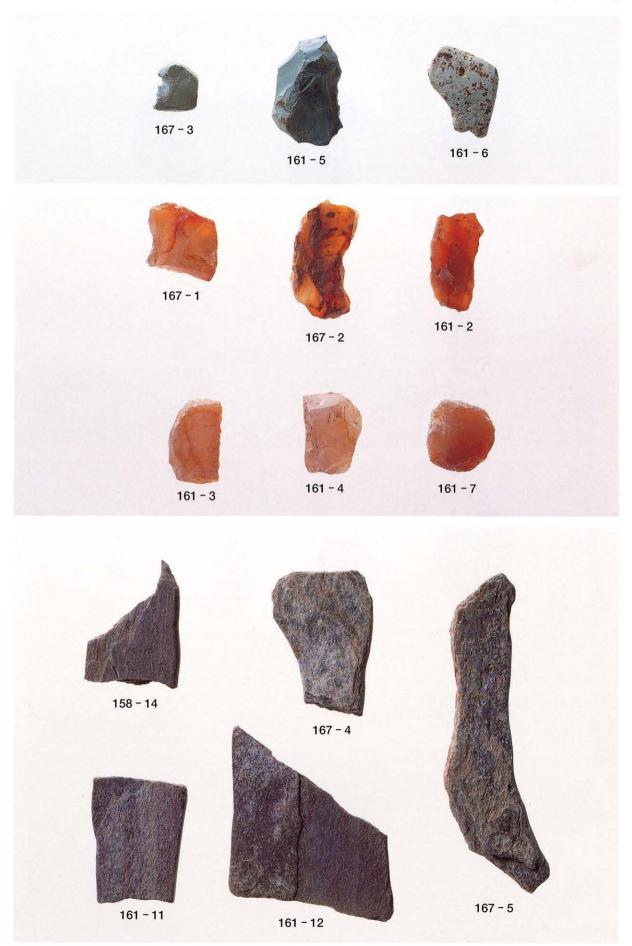
平床Ⅱ遺跡Ⅰ区出土砥石



平床Ⅱ遺跡Ⅱ区出土砥石



平床 II 遺跡 II 区SB-01出土めのう・碧玉製玉未成品、SI-01出土ハンマー



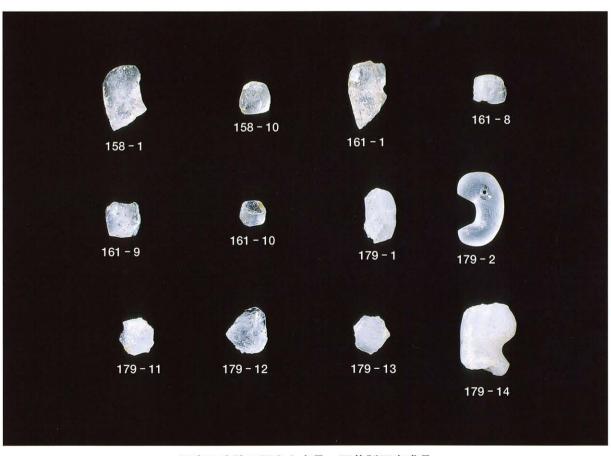
平床 II 遺跡 II 区SI-01、SB-02・04出土めのう・碧玉製玉未成品・砥石



平床Ⅱ遺跡Ⅲ区遺構外出土玉未成品・紡錘車



平床Ⅱ遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土水晶・石英製玉未成品



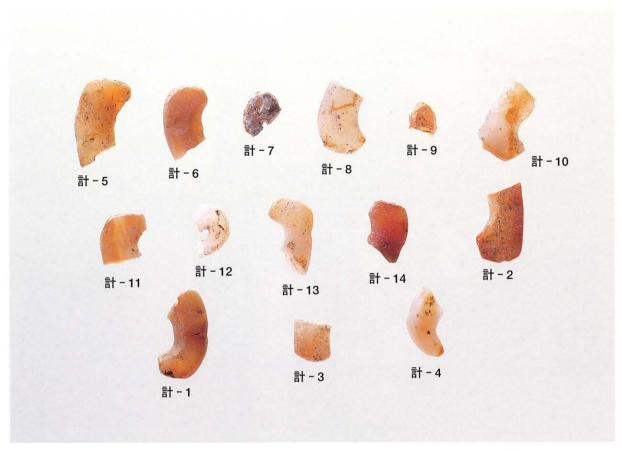
平床Ⅱ遺跡Ⅲ区出土水晶・石英製玉未成品



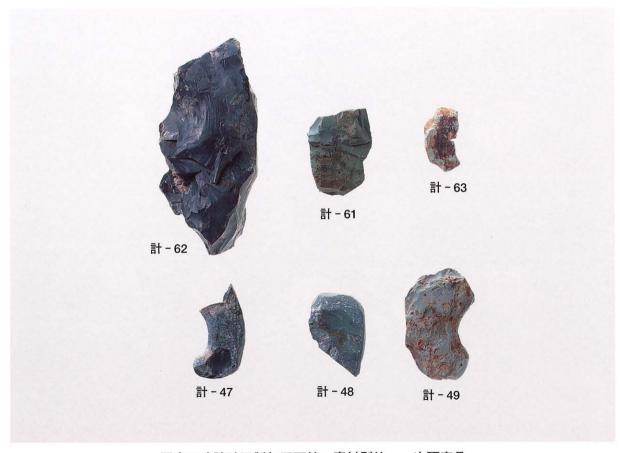
平床Ⅱ遺跡めのう製勾玉素材剥片



平床 II 遺跡めのう製勾玉調整剥片



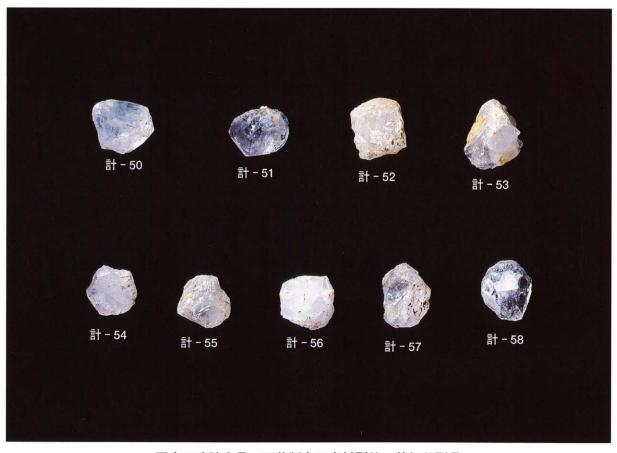
平床Ⅱ遺跡めのう製勾玉一次研磨品



平床Ⅱ遺跡碧玉製勾玉石核・素材剥片・一次研磨品



平床Ⅱ遺跡水晶・石英製勾玉・三輪玉素材剥片・敲打整形品



平床Ⅱ遺跡水晶・石英製丸玉素材剥片・敲打整形品

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均 衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三 刀屋~松江間につきましては、平成9年3月から鋭意建設を進めてまいりました。 その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存 のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である 玉湯町における岩屋遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この調査記録が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成13年3月

日本道路公団中国支社松江工事事務所 所長村田 一 廣

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成8年度から中国横断自動車道尾道・松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。本書は、平成9年に実施した、玉湯町の岩屋遺跡・平床 II 遺跡での発掘調査の記録です。

玉湯町は国指定史跡である出雲玉作跡に代表される古代玉生産の中心地で、出雲石と称される碧玉・瑪瑙の産地として知られる町です。玉湯町で作られた玉は、古墳時代には全国に広まったことで知られています。今回の調査では、玉作りに関わった可能性のある人々が葬られた県内最古級の横穴式石室や、精美な石棺の調査により被葬者の血縁関係を推定できる資料を得、古墳時代後期の家族の1例を知ることができました。また、隣接する玉作工房跡の調査では、奈良時代の手工業生産の一端を垣間見ることができました。

本報告書が宍道湖南岸地域の歴史を解明する契機となり、広く一般の方々の文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり、調査に御協力いただきま した地元の皆様をはじめ日本道路公団、玉湯町教育委員会ならびに関係の皆様に 厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会 教育長 山 **崎 悠 雄**

- 1. 本書は、日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9年度に実施した、中国横断自動車道尾道・松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県八東郡玉湯町大字玉造1443番地外 岩屋遺跡

大字平床1443番地外 平床Ⅱ遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

(平成9年度) 岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡現地調査

事 務 局 勝部 昭(島根県教育庁文化財課長) 宍道正年(埋蔵文化財調査センター長) 古崎蔵治(同課長補佐) 澁谷昌宏(同企画調整係主事)

調 査 員 宮本正保(同調査第1係主事) 田中史生(同主事) 安達和隆(同教諭兼主 事) 橘 弘章(同教諭兼主事) 中岡弘樹(同臨時職員) 池渕 茂(同臨 時職員) 大西憲和(同臨時職員) 原 和美(同臨時職員)

(平成12年度) 岩屋遺跡・平床 ∏遺跡報告書作成

事 務 局 宍道正年(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長) 内田 融(同総務課 長) 松本岩雄(同調査課長) 今岡 宏(同総務係長) 渡辺紀子(同主任) 川崎 崇(同主事)

調 査 員 林 健亮(同調査第1係文化財保護主事) 田中玲子(同臨時職員) 岡本育子(同臨時職員)

宮本正保(同第2係文化財保護主事) 名越顕秀(同教諭兼文化財保護主事) 田中史生(関東学院大学経済学部専任講師)

整理作業員 河野真由美、小豆沢美貴、野田清美、高橋啓子、錦織美千恵、渡部恵子、杉原みゆき

4. 平成9年度の発掘作業(発掘作業員雇用・重機借上げ・発掘用具調達等)については、日本道 路公団中国支社松江工事事務所、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づ き、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

平成9年度

〔現場担当〕布村幹夫(現場事務所長) 藤原 恒(技術員) 簾 俊治(技術員) 「事務担当〕与倉明子(事務員)

5. 現地調査及び資料整理に際しては、以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

赤坂正秀(島根大学総合理工学部教授)池田満雄(島根県文化財保護審議会委員)井上晃孝 (鳥取大学医学部助教授)井上多津男(島根県立工業技術センター所長)魚津知克(京都大学文 学部考古学研究室)大賀克彦(京都大学文学部考古学研究室)大谷晃二(島根県立松江北高校教 論)小田富士雄(福岡大学文学部教授)小高幸男(千葉県立君津郡市文化財センター技師)勝部 衛(玉湯町立出雲玉作資料館長)金宰賢(九州大学大学院助手)高橋進一(総社市教育委員会主 任主事)田中良之(九州大学大学院教授)中村唯史(株式会社日新技術コンサルタント)永島正 春(国立歴史民俗博物館教授)永島晴夫(島根県立工業技術センター資源課長)原田一敏(東京 国立博物館工芸課金工室長)米田克彦(岡山県古代吉備文化財センター主事)渡邊貞幸(島根大 学法文学部教授)

- 6. 挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。
- 7. 第2図は、建設省国土地理院発行の地形図を使用した。また、第 $5 \cdot 76 \cdot 77$ 図は(株) ジェクトが、第 $3 \cdot 4$ 図は(株) ワールドが作成したものを元にしている。
- 8. 本書に掲載した実測図は各調査員の他、丹羽野裕(第5係長)、中川寧(第1係主事)、田中強志(第1係臨時職員)、河野真由美、小豆沢美貴、野田清美、高橋啓子、千本真雄、伊藤純子、錦織美千恵、渡部恵子、杉原みゆき、松崎恵美子が作成し浄書した。
- 9. 本書に掲載した写真は各調査員が撮影した。
- 10. 本書の執筆は第5章を除き各調査員が分担して行い、目次にその分担を記した。また、本書の編集は林・宮本が行った。なお、第5章第1節は国立歴史民俗博物館教授 永島正春先生、第2節は元鳥取大学医学部助教授 井上晃孝先生、第3節は九州大学大学院教授 田中良之先生に御執筆いただいた。
- 11. 本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター (松江市打出町33番地) で保管している。

本 文 目 次

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	(林)1
第2章	遺跡の位置と環境	(名越)3
第3章	岩屋遺跡	(田中·林) ······ 12
第1節	調査の経過と概要	12
第2節	岩屋遺跡I区の調査	
第3節	岩屋遺跡Ⅱ区の調査	85
第4章	平床Ⅱ遺跡	(宮本)123
第1節	調査の経過と概要	123
第2節	Ⅰ区の調査	124
第3節	Ⅱ区の調査	137
第4節	Ⅲ区の調査	153
第5節	Ⅴ区の調査	
	自然科学的分析	
第6章	まとめにかえて	214
第1節	岩屋遺跡の古墳群について	(田中)
第2節	岩屋遺跡の玉作について	(田中・林)218
第3節	岩屋遺跡の旧石器について	(林)222
第4節	平床Ⅱ遺跡の玉作について	(宮本)
		\H 1 /
	揮 図 目 次	
第1図		
第1図第2図	挿 図 目 次	3
	挿図目次 玉湯町の位置	3
	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡	3 9
第2図	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡 岩屋遺跡調査前地形測量図	3 9
第2図 岩屋遺跡	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡	3 9
第2図 岩屋遺跡 第3図	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡 岩屋遺跡調査前地形測量図	
第2図 岩屋遺跡 第3図 第4図	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡	
第2図 岩屋遺跡 第3図 第4図 第5図	挿 図 目 次 玉湯町の位置	
第2図 岩屋遺跡 第3図 第4図 第5図 第6図	挿 図 目 次 玉湯町の位置 玉湯町とその周辺の遺跡	
第2図 岩屋遺跡 第3図 第4図 第5図 第6図 第7図	挿 図 目 次 玉湯町の位置	

第11図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘測量図 … 23
第12図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳覆土土層断面実測図 24
第13図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘土層断面図 … 25~26
第14図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室実測図 ····································
第15図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室基底石及び堀り方実測図 29
第16図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内遺物出土状況実測図 30
第17図	岩屋遺跡 ${\mathbb I}$ 区 ${\mathbb C}$ 号墳石室内出土須恵器実側図 ····································
第18図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内出土鉄器実測図 32
第19図	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内出土玉類実測図 33
第20図	岩屋遺跡 I 区SK01実測図 ······ 34
第21図	岩屋遺跡 I 区SK01出土遺物実測図 ·······35
第22図	岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺測量図及び遺物出土状況 ・・・・・・・・・36
第23図	岩屋遺跡 I 区 3 号墳墳丘土層断面実測図 37
第24図	岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺出土遺物実測図 38
第25図	岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺出土横瓶実測図 38
第26図	岩屋遺跡 I 区 4 号墳墳丘測量図及び遺物出土状況 ・・・・・・・・39
第27図	岩屋遺跡 I 区 4 号墳土層断面図 40
第28図	岩屋遺跡 I 区 4 号墳石室実測図 41
第29図	岩屋遺跡 I 区 4 号墳出土須恵器実測図 42
第30図	岩屋遺跡 I 区 4 号墳出土ガラス玉実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第31図	岩屋遺跡 I 区SX01出土遺物実測図 43
第32図	岩屋遺跡 I 区SX01出土玉類実測図 … 43
第33図	岩屋遺跡 I 区道路状遺構実測図 44
第34図	岩屋遺跡 I 区道路状遺構土層断面図 45
第35図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘測量図 46
第36図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘土層断面実測図 47
第37図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺検出状況実測図(墳丘盛土除去後)48
第38図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺土層断面実測図 49
第39図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳ピット土層断面実測図 50
第40図	岩屋遺跡 I 区SK10、SK11土層断面実測図 51
第41図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺配置図 52
第42図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺実測図54
第43図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺遺物出土状況実測図
第44図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺出土遺物実測図
第45図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺出土鉄器実測図
第46図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺出土玉類実測図
第47図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺実測図59
第48図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺遺物出土状況実測図60

第49図	岩屋遺跡 ${\mathbb I}$ 区 ${\mathbb S}$ 号墳 ${\mathbb S}$ 号石棺出土遺物実測図 ····································
第50図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺内出土耳環実測図 61
第51図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺実測図 ····································
第52図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺遺物出土状況実測図 63
第53図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺出土遺物実測図 64
第54図	岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺内出土ガラス玉実測図64
第55図	岩屋遺跡 I 区SK05遺物出土状況実測図 ······65
第56図	岩屋遺跡 I 区SK05出土須恵器実測図 65
第57図	岩屋遺跡 I 区SK02実測図 ····· 66
第58図	岩屋遺跡 I 区SK03実測図 ····· 66
第59図	岩屋遺跡 I 区SK03出土遺物実測図 … 67
第60図	岩屋遺跡 I 区SK05実測図 ····· 68
第61図	岩屋遺跡 I 区SK05出土須恵器実測図 … 69
第62図	岩屋遺跡 I 区SK05出土鉄器実測図 69
第63図	岩屋遺跡 I 区SK07実測図 ······ 70
第64図	岩屋遺跡 I 区SK07出土遺物実測図 … 71
第65図	岩屋遺跡 I 区SK08実測図 72
第66図	岩屋遺跡 I 区SK08出土遺物実測図 73
第67図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳墳丘測量図 · · · · · · · · · · · · 74
第68図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳土層断面実測図 · · · · · · · 75~76
第69図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳盛土除去後石棺配置図 77
第70図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳出土石棺実測図 78
第71図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳石棺遺物出土状況実測図 79
第72図	岩屋遺跡 I 区 6 号墳出土遺物実測図 · · · · · 80
第73図	岩屋遺跡 I 区SX02実測図
第74図	岩屋遺跡 I 区SX03実測図
第75図	岩屋遺跡 I 区SK06出土遺物実測図 ······83
第76図	岩屋遺跡 I 区墳丘盛土除去後地形測量図 84
第77図	岩屋遺跡 Ⅱ 区遺構配置図 86
第78図	岩屋遺跡Ⅱ区加工段1、2実測図87
第79図	岩屋遺跡 Ⅱ 区加工段 3 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第80図	岩屋遺跡 Ⅱ 区加工段 3 玉製品・剥片出土状況実測図88
第81図	岩屋遺跡 II 区加工段 4 実測図 89
第82図	岩屋遺跡 II 区SB01遺構実測図90
第83図	岩屋遺跡 II 区SK04実測図・玉未製品・剥片集中出土状況実測図 91
第84図	岩屋遺跡 II 区SK04出土遺物実測図 … 91
第85図	岩屋遺跡 II 区道状遺構 1 実測図92
第86図	岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構 1 土層断面図 92

	第87図	岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構2平面及び土層断面図92
	第88図	岩屋遺跡Ⅱ区出土弥生土器実測図93
	第89図	岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図(1)93
	第90図	岩屋遺跡Ⅱ区加工段3出土遺物実測図94
	第91図	岩屋遺跡Ⅱ区加工段4出土遺物実測図(1)94
	第92図	岩屋遺跡Ⅱ区加工段4出土遺物実測図(2)95
	第93図	岩屋遺跡Ⅱ区出土土師器実測図(1)96
	第94図	岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図(2)97
	第95図	岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図(3)98
	第96図	岩屋遺跡Ⅱ区出土土師器実測図(2)99
	第97図	岩屋遺跡Ⅱ区出土金属器実測図100
٠	第98図	岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未製品実測図(1)101
	第99図	岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未製品実測図(2)102
	第100図	岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未製品実測図(3)104
	第101図	岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未製品実測図(4)105
	第102図	岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未製品実測図(1)106
	第103図	岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未製品実測図(2)107
	第104図	岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未製品実測図(3)108
	第105図	岩屋遺跡Ⅱ区出土石英製平玉未製品実測図(1)109
	第106図	岩屋遺跡Ⅱ区出土石英製平玉未製品実測図(2)110
	第107図	岩屋遺跡Ⅱ区出土砥石実測図(1) 111
	第108図	岩屋遺跡Ⅱ区出土砥石実測図(2) 112
	第109図	岩屋遺跡Ⅱ区出土玉関係遺物実測図113
	第110図	岩屋遺跡Ⅱ区出土石器実測図114
	平床Ⅱ遺	Rix
	第111図	平床Ⅱ遺跡 調査区位置図 ·······123
	第112図	I 区遺構位置図
	第113図	I 区SI-01実測図····································
	第114図	I 区SI-01出土遺物実測図 126
	第115図	I 区SI-01遺物出土状況・・・・・・・・・・・・127
	第116図	I 区SB-01実測図 ····································
	第117図	I 区SB-01出土遺物実測図 129
	第118図	I 区SD-01実測図
	第119図	I 区SD-02実測図 ············129
	第120図	I 区SD-03周辺ピット検出状況 130
	第121図	I 区SD-03実測図 130
	第122図	I 区SD-03出土遺物実測図(1) … 131
	 	

第123図	I 区SD-03出土遺物実測図(2) ·······	• 132
第124図	I 区SI−01・SB−01・SD−02・03出土玉作遺物実測図	• 133
第125図	I 区SK-01実測図 ·····	• 134
第126図	I 区SK-02実測図 ·····	· 134
第127図	I 区SK-02出土遺物実測図 ·····	· 134
第128図	I 区SK-03実測図	• 134
第129図	I 区遺構外出土遺物実測図(1) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 135
第130図	I 区遺構外出土遺物実測図 (2) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 136
第131図	I 区遺構外出土遺物実測図(3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 136
第132図	Ⅱ・Ⅲ区遺構位置図	• 137
第133図	Ⅱ区SB-01実測図	· 138
第134図	Ⅱ区SB-01出土遺物実測図	• 139
第135図	Ⅱ 区SB-02実測図	• 140
第136図	Ⅱ区SB-02出土遺物実測図	• 141
第137図	Ⅱ区SB-01・02出土玉作遺物実測図	• 142
第138図	Ⅱ区SX-01実測図	• 143
第139図	Ⅱ区SX-01石出土状况 ······	• 144
第140図	Ⅱ区SX-01炭化物検出状況	• 144
第141図	Ⅱ区SX-01出土遺物実測図	• 145
第142図	Ⅱ区SX-01遺物出土状況	• 145
第143図	Ⅱ区SX-02実測図	• 146
第144図	Ⅱ区SD01~02·SK01~07検出状況 ······	• 146
第145図	Ⅱ区SD-01実測図 ······	• 147
第146図	Ⅱ区SD-02実測図	• 147
第147図	Ⅱ区SD-03実測図	• 147
第148図	Ⅱ区SK-01~07実測図	• 148
第149図	Ⅱ区SK-01出土遺物実測図	• 148
第150図	Ⅱ区遺構外出土遺物実測図(1)	• 149
第151図	Ⅱ区遺構外出土遺物実測図(2)	• 151
第152図	Ⅱ区遺構外出土遺物実測図(3)	• 151
第153図	Ⅱ区遺構外出土遺物実測図(4)	• 152
第154図	Ⅲ区SB-01実測図	• 154
第155図	Ⅲ区SB-01ピット実測図	• 155
第156図	Ⅲ区SB-01出土遺物実測図(1) ······	• 156
第157図	Ⅲ区SB-01出土遺物実測図(2) ·······	• 157
第158図	Ⅲ区SB-01出土遺物実測図(3) ······	• 159
第159図	Ⅲ区SI-01実測図	• 160
第160図	Ⅲ区SI-01出土遺物実測図(1) ······	· 161

第163凶	Ⅲ区SB-02·03美測図 ····································	164
第164図	Ⅲ区SB-02·03出土遺物実測図	164
第165図	Ⅲ区SB-04実測図	165
第166図	Ⅲ区SB-04出土遺物実測図	
第167図	Ⅲ区SB-02·04出土玉作関係遺物実測図	166
第168図	Ⅲ区SD-01実測図 ·····	167
第169図	Ⅲ区SK-01実測図 ·····	167
第170図	Ⅲ区SK-01出土遺物実測図	168
第171図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(1)	169
第172図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(2)	170
第173図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(3)	171
第174図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(4)	173
第175図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(5)	174
第176図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(6)	176
第177図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(7)	177
第178図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(8)	178
第179図	Ⅲ区遺構外出土遺物実測図(9)	179
第180図	V 区地形測量図 (調査後)·土層図	181
第181図	V 区出土遺物実測図	182
第182図	高広遺跡 I 区 3 号横穴墓出土状況	205
第183図	宮ノ峠横穴墓出土状況	206
第184図	林43号墳石室実測図	215
	表目次	
公 1 主	岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡の周辺の遺跡	. 10
第1表 第2表	岩屋遺跡土器観察表	
第3表	岩屋遺跡金属製品観察表	
第4表	岩屋遺跡玉類観察表	
第5表	平床Ⅱ遺跡玉未成品計測表	
	岩屋古墳群出土人骨一覧	
第 6 表 第 7 表	岩屋 5 号墳出土人骨歯冠計測值	
第8表	岩屋 5 号墳被葬者の歯冠計測値に基づくQモード相関数	
第9表	石崖 5 号項 枚 葬 名 め 困	
第10表	平床 II 遺跡玉未成品構成表	
知10次	/ 八	443

図 版 目 次

岩屋遺跡	
図版 1	岩屋遺跡遠景(1号墳から)
	岩屋遺跡I区1号墳発掘前(西から)
図版 2	岩屋遺跡I区1号墳表土層除去後(西から)
	岩屋遺跡I区1号墳主体部検出状況(西から)
図版 3	岩屋遺跡I区1号墳主体部土層堆積状況(南東から)
	岩屋遺跡I区1号墳主体部土層堆積状況(北東から)
図版 4	岩屋遺跡I区1号墳主体部完掘状況(北西から)
	岩屋遺跡 I 区SK06土層堆積状況(北西から)
図版 5	岩屋遺跡 I 区SK06遺物出土状況(東から)
	岩屋遺跡 I 区SK06完掘状況(北から)
図版 6	岩屋遺跡I区2号墳発掘前(西から)
	岩屋遺跡I区2号墳石室崩落状況(西から)
図版 7	岩屋遺跡I区2号墳表土層石室内堆積土除去後(西から
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内遺物出土状況(石室北東部)
図版 8	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内遺物出土状況(石室北東部)
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内遺物出土状況(石室北側)
図版 9	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内鉄器出土状況
	岩屋遺跡I区2号墳石室内石床検出状況(西から)
図版10	岩屋遺跡 I区 2 号墳玄室奥壁
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳玄室側壁(北側)
図版11	岩屋遺跡 I 区 2 号墳玄室側壁(南側)
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石床下土層堆積状況
図版12	岩屋遺跡 I 区 2 号墳石床除去後
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘盛土状況(南側)
図版13	岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘盛土状況(東側)
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘盛土状況(北側)
図版14	岩屋遺跡 I 区 2 号墳盛土除去後玄室側壁裏(南側)
	岩屋遺跡 I 区 2 号墳盛土除去後玄室奥壁裏
図版15	岩屋遺跡 I 区 2 号墳盛土除去後玄室側壁裏(北側)
	岩屋遺跡I区2号墳盛土除去後玄室側壁裏(上から)
図版16	岩屋遺跡I区2号墳玄室基底石検出状況(東から)
	岩屋遺跡I区2号墳玄室基底石除去後(東から)
図版17	岩屋遺跡 I 区 2 号墳完掘状況(東から)

岩屋遺跡 I 区 2 号墳第 1 次墳丘東側溝検出状況(南から)

図版18 岩屋遺跡 I 区SK01土層堆積状況(南西から) 岩屋遺跡 I 区SK01遺物出土状況(北東から) 図版19 岩屋遺跡 I 区 3 号墳発掘前 (西から) 岩屋遺跡 I 区 3 号墳盛土堆積状況 岩屋遺跡 [区4号墳発掘前(西から) 図版20 岩屋遺跡 I 区 4 号墳主体部石材崩落状況(西から) 図版21 岩屋遺跡I区4号墳主体部検出状況(西から) 岩屋遺跡 [区 4 号墳墳丘盛土状況(東側) 図版22 岩屋遺跡 I 区 4 号墳墳丘盛土状況(南側) 岩屋遺跡 I 区 4 号墳墳丘盛土状況 (第28図B-B'東側) 図版23 岩屋遺跡 I 区 4 号墳完掘状況(北西から) 岩屋遺跡 I 区 4 号墳SX01検出状況(北西から) 図版24 岩屋遺跡 I 区道路状遺構土層堆積状況(2号墳西側下方・南から) 岩屋遺跡I区道路状遺構完掘状況 図版25 岩屋遺跡 I 区 5 号墳発掘前 岩屋遺跡 I 区 5 号墳表土層除去後(南東から) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳表土層除去後(東から) 図版26 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土断面観察ベルト設定状況(西から) 図版27 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土状況 (第38図A-a) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土状況 (第38図F-F'南側・第38図B-B'南側) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土状況(第38図A-A'1号石棺付近) 図版28 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土状況(第38図C-C'南側) 図版29 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘盛土除去後石棺検出状況(西から) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺検出状況(南東から) 図版30 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺外遺物出土状況 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺内人骨検出状況(西から) 図版31 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺内遺物出土状況 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺検出状況 (東から) 図版32 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺蓋接合状況 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺蓋除去後(西から) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺内遺物・人骨出土状況(西から) 図版33 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺内遺物出土状況(頭部付近) 図版34 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺検出状況 (西から) 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺遺物・人骨検出状況(北から) 図版35 岩屋遺跡I区5号墳石棺内完掘状況(北西から) 岩屋遺跡I区5号墳石棺除去後(西から) 図版36 岩屋遺跡I区岩屋遺跡I区5号墳ピット検出状況(南西側)

岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺棺身展開状況

- 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺棺身展開状況 図版37 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺棺身展開状況 岩屋遺跡 I 区SX05遺物出土状況 図版38 岩屋遺跡 I 区SK02検出状況(南東から) 岩屋遺跡 I 区SK03遺物出土状況(西から) 図版39 岩屋遺跡 I 区SK05(西から) 岩屋遺跡 I 区SK07(東から) 図版40 岩屋遺跡 I 区SK08(南東から) 図版41 岩屋遺跡I区6号墳発掘前(南西から) 岩屋遺跡 I 区 6 号墳表土層除去後(北から) 図版42 岩屋遺跡 [区6号墳墳丘盛土状況(北から) 岩屋遺跡 I 区 6 号墳墳丘盛土状況(北側) 図版43 岩屋遺跡 I 区 6 号墳墳丘盛土状況(南側) 岩屋遺跡 [区 6 号墳墳丘盛土除去後(北から) 図版44 岩屋遺跡 I 区 6 号墳石棺検出状況(南から) 岩屋遺跡 I 区 6 号墳石棺内遺物・人骨検出状況(北から) 岩屋遺跡I区6号墳石棺内完掘状況(西から) 図版45 岩屋遺跡 I 区 6 号墳石棺棺身展開状況 岩屋遺跡I区SX02(北西から) 図版46 岩屋遺跡 I 区SX03土層堆積状況 図版47 岩屋遺跡Ⅱ区加工段3土層堆積状況 岩屋遺跡Ⅱ区加工段1・2土層堆積状況 岩屋遺跡Ⅱ区加工段1 · 2、SB01完掘状況 図版48 岩屋遺跡Ⅱ区加工段3玉製品・剥片出土状況 岩屋遺跡Ⅱ区加工段3完掘状況 図版49 岩屋遺跡Ⅱ区加工段4完掘状況 岩屋遺跡Ⅱ区加工段4遺物出土状況 図版50 岩屋遺跡Ⅱ区SK04北東部玉製品·剥片集中地区発掘風景 岩屋遺跡Ⅱ区SK04北東部玉未製品·剥片検出状況 図版51 岩屋遺跡Ⅱ区SK04土層堆積状況 岩屋遺跡 II 区SK04遺物出土状況(北東から) 図版52 岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構1検出状況(北から)
- 図版54~図版72 岩屋遺跡出土遺物

図版53 岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構土層堆積状況(北から)

岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺棺蓋除去風景

平床Ⅱ遺跡

図版73 I区全景

 $I \boxtimes SI-01$, SB-01, $SK-01 \cdot 02$

図版74 I区SI-01

I⊠SB-01

図版75 I区SD-01 · 02、SK-01

I区SD−03周辺

図版76 I区SD-03

I⊠SK-01

I ⊠SK-03

図版77 Ⅱ区全景

 $II \boxtimes SB-01$, $SX-01 \cdot 02$

図版78 Ⅱ区SB-02

 $II \boxtimes SB-01$, $SX-01 \cdot 02$

図版79 Ⅱ区SX-01

 $II \boxtimes SK - 01 \sim 07, SD - 01 \cdot 02$

図版80 Ⅱ区SB-01、SX-01 · 02検出状況

 $II \boxtimes SD - 01 \cdot 02$

II ⊠SD-03

図版81 Ⅱ区SX-01検出状況

Ⅱ区SX-01炭化物検出状況

Ⅱ区SX-02完掘

図版82 Ⅱ区SK-01

Ⅱ 区SK-02

I I I S K − 03

図版83 Ⅱ区SK-04

Ⅱ 区SK-05

I ⊠SK−06

図版84 Ⅲ区全景

Ⅲ区SB-01

図版85 Ⅲ区SI-01

Ⅲ区SI-01周辺

図版86 Ⅲ区SI-01検出状況

II **⊠**SB−02 ⋅ 03

Ⅲ区SD-01

図版87 V区全景

図版88 I区SI-01出土遺物

図版89 I区SB-01出土遺物

I区SD-03出土須恵器

I区SD-03出土土師質土器

図版90 I区SD-03出土土師質土器

図版91 I区SD-03出土磁器

I区SK-02出土土器

I区遺構外出土土器

I区出土石器

図版93 Ⅱ区SB-01出土土器

図版94 Ⅱ区SB-02出土土器

Ⅱ区SX-01出土土器

Ⅱ区SK-01出土石器

Ⅱ区遺構外出土土器

図版95 Ⅱ区遺構外出土土器・石器

図版96 Ⅲ区SB-01出土土器

図版97 Ⅲ区SB-01出土土器

Ⅲ区SI-01、SK-01出土土器

図版98 Ⅲ区SI-01出土土器

Ⅲ区SB-02~04出土土器

Ⅲ区遺構外出土土器

図版99 Ⅲ区遺構外出土土器

図版100 Ⅲ区遺構外出土土器

図版101 Ⅲ区遺構外出土土器

図版102 Ⅲ区遺構外出土土器

図版103 Ⅲ区遺構外出土土器

図版104 Ⅲ区遺構外出土土器

図版105 Ⅲ区遺構外出土土器・土製品

図版106 Ⅲ区遺構外出土土製品

V区出土土器

.

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国縦貫自動車道と接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の発掘調査は、平成4年1月に建設省道路局長から日本道路公団に三刀屋・松江間について調査開始の指示があり、同年4月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成5年9月には工事実施計画が認可された。この様な状況を受け、県教育委員会では平成6年3月から500m幅を対象に分布調査を実施し、三刀屋・松江間の9割あまりについて踏査した。

県教育委員会では、この調査結果をもとに、同年6月と8月に道路公団と調査の打ち合わせを行ったが、500m幅での分布調査であったことから、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を公団に要望した。翌平成7年4月には残りの分布調査を終え、公団に回答した。

平成7年4月には、日本道路公団、島根県教育委員会、島根県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、第1回の連絡会を8月に行った。この会議では平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査に入ることを前提に用地買収等の調査環境整備について協議を行い、さらに2回に及ぶ連絡会で調整し、平成8年度から発掘調査に入ることが決定した。これを受けて、発掘調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根支部に委託するため、平成8年3月26日に日本道路公団、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を交わし、本格的に調査に入ることとなった。

本格的な発掘調査は平成8年度から開始している。同年の調査は主に宍道町内の遺跡が対象となっており、試掘調査を含め、白石大谷 I 遺跡など 7 遺跡について実施した。平成 9 年度には調査対象地を玉湯町内にも広げている。試掘調査を含め22遺跡について発掘調査を行い、本書に掲載した岩屋遺跡・平床 II 遺跡も同年の調査である。平成10年度も玉湯町・宍道町の遺跡を対象に、試掘調査を含め22遺跡の調査を実施し、玉湯町内での調査は同年に終了した。平成11年には宍道インターチェンジ以南の宍道町、加茂町、三刀屋町の遺跡を対象に試掘調査を含め15遺跡の調査を実施した。平成12年には、三刀屋町馬場遺跡 1 か所の発掘調査を実施している。本報告書にかかる遺物整理は平成10年 1 月以来断続的に行っていたが、同年になって本格的に行っている。

本書で報告する遺跡は玉湯町内に所在する岩屋遺跡、平床 II 遺跡である。岩屋遺跡は平成9年4月10日に現地調査を開始した。調査は I 区とした東側の古墳群から開始し、5月末には玉作遺跡と考えられる II 区の調査も開始している。 II 区については、同年10月6日に調査を終了し、 I 区については翌平成10年1月6日まで調査を行った。

平床Ⅱ遺跡は平成9年4月14日から同12月16日まで調査を行った。

岩屋遺跡は玉湯町玉造に所在する古墳群と玉作遺跡からなる遺跡で、中国横断道本線と工事用道

路に掛かった。岩屋遺跡 II 区にあたる工事用道路部分は、工事終了後は町道となるため、平成8年度に玉湯町教育委員会と協議し、現地調査を玉湯町教育委員会の協力を受けて調査することとなった。ただし、玉湯町教育委員会は多くの別事業を抱えており、遺物整理・報告書編集作業への協力は困難であるとの要望を受け、玉湯町教育委員会が中心となって行った岩屋遺跡 II 区の成果についても県埋蔵文化財調査センターが整理を行った。

また、岩屋遺跡発掘調査の主担当者であった田中史生は、現地調査終了後の平成10年3月31日に島根県教育委員会を退職し、関東学院大学経済学部専任講師となった。そのため、岩屋遺跡のその後の整理作業は林健亮が引き継ぐ事となり、岩屋遺跡 II 区を中心とする遺物整理・写真撮影及び本書の編集業務を行った。その間、田中は平成10年7月、平成11年7月、平成12年3・7・8・12月に来県し遺物整理、原稿執筆を行っている。



小学生の発掘体験(岩屋遺跡)

第2章 遺跡の位置と環境

岩屋遺跡(八東郡玉湯町玉造・林村)と平床Ⅱ遺跡(玉湯町玉湯)は、宍道湖岸から1kmあまり 内陸に入った、標高およそ40~60mの丘陵に位置する。平床Ⅱ遺跡は玉造温泉街からすぐ北西にあ り、小さな谷を挟んで、岩屋遺跡はその西側に隣接している。両遺跡とも宍道湖を望む丘陵の北斜 面に所在する。

玉湯町は宍道湖の南東岸に位置し、東は松江市、南は大原郡大東町、西は宍道町と境界を接して いる。人口約6000人、言わずと知れた温泉の町であり、伝統工芸の布志名焼や瑪瑙細工などが特産 である。奈良時代の天平五年(733)に編纂された『出雲国風土記』(以下『風土記』と略す)によ れば、現在の玉湯町の町域は意宇郡拝志郷の東部と意宇郡忌部神戸の西半分にあたる。町の北部に は国道9号とIR山陰線が東西に通っているが、これらは古代山陰道のルートにほぼ沿っていると思 われる。町の中央部分を玉湯川(『風土記』では玉作川)が北流するが、この川を遡って山間に分 け入る県道は、意宇郡家から大原郡家、飯石郡家を経由して、やがて備後国に通ずる通道(当時の 官道) に相当するものと考えられる。

『風土記』は、拝志郷には正倉が置かれたと記す。所在地は玉湯町林村本郷に比定されている。 また、『風土記』によれば、その編纂当時の意宇郡の郡役人は、大領の出雲臣広嶋以下ほとんどが 出雲臣であるが、主政(三等官)は林臣であった。林臣は拝志郷の豪族で、皇族に連なる一族とし て付近一帯に隠然たる勢力を誇っていたようである。後述するが、林村には前方後円墳を含む50基 から構成される林古墳群があり、林臣との関わりが連想されるところである。

『風土記』の忌部神戸の条にも興味深い記述がある。「忌部神戸。郡家の正西二十一里二百六十歩、 なり。國造、神吉詞奏しに、朝廷に参向ふ時の御沐の忌玉作る。故、忌部と云ふ。即ち川の邊に湯

を出す。出湯の在る所は、 海陸を兼ねたり。仍りて男 も女も、老いたるも少きも、 或るは道路を駱驛ひ、或る は海中を洲に沿い、日に集 ひて市を成し、繽紛燕樂ぶ。 一たび濯げば形容端正し く、再び浴すれば、萬病悉 に除こる。古より今に至る まで驗を得ずといふことな し。故、俗人、神湯と曰ふ なり」というもので、この 記述から、この時代既に玉 造温泉には老若男女が集い 賑わう歓楽地であったこと が分かる。さらにはここか



第1図 玉湯町の位置

ら、この地では出雲国造家がその地位に就く際に禊ぎが行われ、また天皇に献上するための玉の製 作が行われていたことも明らかにされている。

このような形態における玉の献上がいつ頃まで行われたものかははっきりしない。しかし、延長五年(927)に編纂された『延喜式』には、「出雲国造神寿詞を奏す。玉六十八枚。赤水精八枚、白水精十六枚、青石玉四十四枚…」とあることから、少なくともこの頃までは行われていたようである。また『延喜式』には、「凡そ出雲国の進る所の御富岐玉六十連。三時大殿祭料卅六連、臨時廿四連。毎年十月以前、意宇郡神戸玉作氏をして造り備へしめ、使いを差して進上す」ともあり、大殿祭等の儀式のため、出雲の玉が毎年進上されていたことが分かる。さらに、『正倉院文書』の「出雲国計会帳」によれば、天平五年(733)の8月19日に、真珠などとともに「水精」が進上されていることが分かる。あるいは、九条家本『延喜式』巻十の裏文書にある「主税寮出雲国正税返却帳」によれば、長保二年(1000)や同四年に、「水精」の進上に応じて税稲が返却された事実が確認できる。

一般に玉作は、弥生時代から広い地域で行われるが、律令時代になると廃れる。ところが出雲の 玉作は、古墳時代後期に最盛期を迎え、少なくとも11世紀初頭までは続いていたことが文献から明 らかである。そして、その出雲における玉作の中心は、玉湯川の流域と、東に隣接する松江市の忌 部川流域である。これは両河川の間に、玉の原石になる良質の瑪瑙や碧玉の産出地である花仙山 (『風土記』には玉作山と記載)があるためで、この辺りは全国でも例を見ない玉作遺跡の集中地域 である。

このように玉湯町とその周辺は、玉作を中心に歴史的に興味深い地域である。ここでは、主な遺跡の紹介を通じて、この地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代

島根県内ではこの時代にまで遡ることのできる遺跡は多くはないが、近年、宍道湖・中海沿岸地域を中心に、少しずつ資料が集まってきている。そのうち林村の鳥ヶ崎遺跡からは、中期旧石器時代まで遡る可能性を持つ剥片や石核などが採集されている。また、松江市乃木福富町の廻田遺跡からは、後期のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

玉湯町内にはこれと言った資料がないが、周辺地域では遺跡が増加してくる。松江市の乃木湖岸遺跡や、宍道町の野津原Ⅱ遺跡で発見された有茎尖頭器は、縄文時代草創期のものと推定される。 土器が見つかっていないため時期の限定が難しいが、縄文時代も後半と推定される遺跡に、宍道町東来待の弘長寺遺跡がある。この遺跡は、狭い範囲から豊富な種類の石器を大量に出土したことで知られる。特に石錘の出土量が多いことから、漁労が活発に行われたことがうかがえる。その他、縄文後期から晩期の深鉢が出土した、東来待の三成遺跡などがある。

旧石器時代に深い谷であったと推定される宍道湖・中海沿岸地域は、気候が温暖化し縄文時代になると海水面が上昇し、水道状を呈するようになったと考えられる。このためこの地域は、全面に湖水、背後には低丘陵が控え、漁労や狩猟に適していた住みやすい環境だったと思われる。従って玉湯町内においても、今後この時代の遺跡が発見される可能性は充分にある。

弥生時代

島根県教育委員会が1986年に行った玉作遺跡分布調査では、53の遺跡が報告されている。その大部分は古墳時代以降のものであるが、弥生時代のものもいくつか確認できる。

出雲での玉作は、弥生時代前期にまで遡ることができる。現在のところ、島根県下で最古の玉作遺跡は松江市の西川津遺跡で、緑色凝灰岩を使って管玉が生産されていた。中期の遺跡としては、松江市竹矢町の布田遺跡がある。後期の遺跡としては、松江市矢田町の平所遺跡があり、ここでは水晶製の算盤玉や丸玉を生産していた工房跡が発見された。玉湯町域での玉作の開始は、古墳時代まで下るものと従来は考えられてきた。しかし、1983~84年、出雲玉作跡宮ノ上地区で実施された発掘調査では、工房跡は検出されなかったが、弥生末期~古墳時代前期の土器とともに玉類未成品が出土しており、玉作開始が弥生時代にまで遡る可能性が出てきた。

玉作に直接は関わらないが、そのほか重要な遺跡には、松江市乃木福富町・乃白町・浜乃木町にまたがる田和山遺跡群がある。ここでは以前から、全長約20mの後期の前方後円墳である田和山1号墳をはじめとする古墳群の存在が知られていたが、それに加えて、3重の環壕を巡らせ、物見櫓のような役割を担ったと思われる建物を備えたと推定される遺構などが検出された。時期的には弥生時代前期~中期とされる。田和山遺跡群から北東約250mのところには、友田遺跡がある。この遺跡は前期~中期の土壙墓26基、中期の墳丘墓6基、後期の四隅突出形墳丘墓1基などから構成される墳墓群で、土壙墓群からは勾玉や管玉のほか大量の石鏃が出土したため、「戦士の墓」などと呼ばれる。

玉湯町内では、布志名大谷Ⅲ遺跡が弥生時代の墳墓群である。ここでは四隅突出形墳丘墓3基のほか、特殊な貼石構造を持つ墳丘墓1基(四隅突出形の可能性もある)をはじめ、弥生時代~古墳時代の多種多様の墓制を示す遺構が検出されている。同じく布志名の大堤Ⅱ遺跡では、後期古墳7基のほか、弥生時代~平安時代にかけての住居跡や加工段が検出された。弥生時代中期の竪穴住居跡は3棟見つかり、うち1棟からは、時期が確定できるものとしては県内で最も古い鉄製のキリが出土している。

宍道町東来待の三成遺跡からは3基の墳墓が発見されている。当初、これらは中期の古墳と報告されていたが、近年になって弥生時代の墳丘墓の可能性が指摘されている。特に2号墓には貼石が認められるもので、注目される。弥生時代中期~後期の来待地区に、有力な集団が存在していた可能性をうかがわせるものである。白石から佐々布にかけての丘陵地帯では、山守免遺跡、野津原Ⅱ遺跡、上野遺跡、上野川遺跡など、高地性集落が次々と発見されている。

古墳時代

玉作関係の遺跡が数多く出現し、特に玉湯川と忌部川の流域に集中して営まれる。

玉湯川の流域では、宮垣地区、玉ノ宮地区、宮ノ上地区の3箇所が国指定の史跡となっている。宮垣地区は記加羅志神社跡を中心に立地しており、古墳時代前期末~平安時代の工房跡が約30棟検出されたほか、玉の原石や玉類の未成品、砥石、穿孔用の鉄製錐など、大量の玉作関係の遺物が出土した。また、同一の遺構から玉作関連と生活関連の遺物が同時に出土していることから、玉作工房と住居が一体になっていたことが明らかになった。宮ノ上地区は玉作湯神社境内に位置する。玉作湯神社は『風土記』や『延喜式』に記載のある古社で、大穴持命、少彦名命に加えて、玉の神で

ある櫛明玉命を祭神としている。この地区は、玉作開始が玉湯町内では最も早く、弥生時代まで遡ると推定されるが、古墳時代前期と後期の玉作の舞台でもあった。玉ノ宮地区には、櫛明玉命を祭る玉ノ宮という神社が、大正年間まで存在した。ここでは玉作に関わる明確な遺構は確認されていないが、古墳時代~奈良時代にかけての玉作関連の遺物はまとまって出土している。また、この地区からは、鉄滓や炉壁をともなって7世紀と9世紀と推定される精錬炉が2基検出され、製鉄が行われていたことも明らかになっている。この製鉄遺跡で生産された鉄製品が、玉作の工具として使われたものなのか、製鉄と玉作の関連が興味深い。このほか玉湯川の流域には、平床遺跡、日焼廻遺跡、狐廻遺跡など多数の玉作遺跡が存在している。玉湯川の流域からは離れるが、林村の堂床遺跡は、6世紀後半~7世紀前半という短い期間に、25棟という数多くの工房が営まれた遺跡として注目される。

忌部川流域は、玉湯川流域に次いで玉作遺跡が集中して存在する。このうち後原玉作跡からは、石釧の未成品が出土しており、古墳時代前期に遡るものと考えられる。また中島遺跡では、中期の工房跡が確認されている。大角山遺跡は、竪穴住居跡 5 棟から構成される中期の玉作遺跡である。出土した土師器に形式差がほとんどなく、住居跡相互の切り合い関係もないことから、ごく短期間営まれた集落と考えられる。

古墳や横穴墓は、やはり玉湯川流域に多く分布している。このうち徳連場古墳は、5世紀末頃の 築造と考えられる小型の円墳である。玉造築山古墳もほぼ同時期の築造と思われ、墳形が明確では ないが、やはり円墳と推定される。双方とも、地元では白粉石または白来待と呼ばれる石英安山岩 質凝灰岩を石材とする舟形石棺を用いているという特徴がある。宍道町西来待の横田古墳でも同じ 石材を利用した舟形石棺を持つなど、舟形石棺は中海・宍道湖岸に濃く分布している。報恩寺古墳 群は6基のうち5基までが小型の円墳だが、1基は全長約50mの前方後円墳で、玉湯町では扇廻古 墳と並ぶ最大の古墳である。 $5\sim6$ 世紀の築造と考えられる。 $6\sim7$ 世紀になると、この地にも多 くの横穴墓が出現するようになる。花立横穴群は5穴で構成される。調査段階で現状をとどめてい たのは2穴のみだが、もともとは全ての横穴で、白粉石(石英安山岩質凝灰岩)を石材とする、切 り石を組み合わせた箱式石棺を収めていたと考えられる。副葬品のほとんどは須恵器で、頭部と足 元に分けて置かれている。岩屋寺跡横穴群は国指定史跡で、来待石(凝灰質砂岩)の岩盤を掘り込 んでつくられている。2穴で構成され、2穴とも4隅を柱状に陽刻するなど、極めて入念な構造で ある。なお、本書で報告する岩屋遺跡は、岩屋寺跡横穴群の西側の尾根続きにあり、I区に存在す る古墳群は後期のものである。玉湯川が形成した平野は狭小で、この地域の農業生産力も高くはな かったであろう。それにも関わらず、不相応に思えるほどの数や規模の古墳が築造された背景とし ては、玉作との関連性を考慮すべきであろう。

林村にも古墳や横穴墓は多く存在する。中でも林古墳群は、宍道湖に突出する低丘陵上に約50基が密集する、玉湯町内では最大規模の古墳群である。前述のように、この古墳群は林臣と密接な関わりがあると考えられる。古墳の分布が5群に分けられることから、大部分が小型の円墳だが、方墳1基、前方後円墳4基も含まれる。このうち43号墳は全長約18mの小型の前方後円墳で、横穴式石室を持つ。6世紀中期~後期の築造と思われ、出雲における横穴式石室の出現期のものとして重要である。また、多くの副葬品が認められたが、そのうち、玄室内から出土した須恵器坏の出土状況にも注目が必要である。それは、2つの坏を並べたもので、奥壁の近くに2セット、玄門付近に

1セットの、計3セットが存在した。これは、坏を枕に転用したものと考えられる。

布志名地区にも、古墳がある程度まとまって存在している。このうち布志名大谷1号墳は前期、 樅の木古墳群は中期、大堤Ⅱ遺跡の古墳群は後期のものである。

忌部川流域では、二名留古墳群、大角山古墳群、向原古墳群、田和山古墳群、松本古墳群、菅沢 谷横穴群、弥陀原横穴群などが知られ、何れも中期以降のものである。このうち大角山 1 号墳は、全長60m余りの大規模な前方後円墳である。田和山 1 号墳は、全長約20mの小型の前方後円墳であるが、前方後円墳の築造が減り横穴墓が主流になる6世紀後半になって、あえて前方後円墳を築造しているところが興味深い。また、二名留 2 号墳からは、5 世紀後葉のものと比定される子持勾玉が出土している。

奈良・平安時代

律令時代になると全国的に玉の生産は行われなくなり、玉作遺跡の発見例は花仙山の周辺だけにほとんど限定される。製作された玉類がどのような性格のものであったかは、前述の通りである。本書で報告する岩屋遺跡Ⅱ区の玉作工房跡はおおむねこの時期のものであり、平床Ⅱ遺跡も古墳時代から平安初期にかけて操業された玉作工房跡である。ほかには蛇喰遺跡があり、8世紀後半~9世紀の玉作関係遺跡である。

蛇喰遺跡は出雲玉作跡宮垣地区の西に隣接する遺跡で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。ここで注目されるのは、第一にヘラ書き文字のある須恵器が500点以上出土したことで、これは一遺跡としては全国的にも類を見ないほどの出土量と言える。文字には「白田」、「由」、「有」、「林」などが多く見られた。「由」や「有」が、「湯」に通ずるなど、地名を連想させるものが多い。またこれらの須恵器は、松江市東忌部町の湯峠窯跡で生産されたものと考えられる。因みに湯峠窯跡は、花仙山の南麓、玉造と忌部を結ぶ道筋に存在した遺跡で、出雲国庁もここから須恵器の供給を受けていた。また、一般に、寺院や官衙からの出土が多いとされる円面硯、緑釉、製塩土器が多く出土している。玉類の未成品は平玉を中心に大量に出土しているが、完成品に近いものが多くを占めた。

その他の遺跡としては、林村に、瓦類や礎石が出土した松ノ前廃寺があり、林臣一族が建立した 私寺と考えられている。

鎌倉・室町時代

全国的に山城が多く出現する時期であり、玉湯町周辺地域も例外ではない。特に玉湯川に沿って山間に分け入る谷筋には、古代から奥出雲に通じる重要な街道が設けられており、付近には山城が密集している。玉作湯神社の西側には、玉造要害山城跡がある。標高約108mの小山塊にあり、規模は大きくないが、奥出雲への街道と湯峠を越えて忌部に抜ける間道を押さえる交通の要衝に立地している。毛利氏による改修も想定できるが、築城は鎌倉時代末期にまで遡り、湯氏の居城であったと考えられている。

江戸時代

その創設については諸説あるが、18世紀の中頃までには、布志名の地で布志名焼が始まった。一

説には、富士名義綱(後醍醐天皇の船上山での挙兵に、塩冶高貞とともに真っ先に馳せ参じたという)の家臣船木与兵衛次政の末裔を名乗る与次兵衛村政が、明和年間(1764~1772)に開窯したと伝えられる。真偽のほどはもう一つ定かではないが、この船木一族や、土屋氏、永原氏らによって布志名焼は発展し、松江藩主松平治郷の手厚い保護などもあり大いに繁栄した。宍道湖南岸の若山付近を中心に多くの窯跡が存在しており、現在もなお、4つの窯元が操業している。

【参考文献】

加藤義成 『修訂 出雲国風土記参究』 1957 松江今井書店

『玉湯町史 上巻』 1961 玉湯町

『新修島根県史 史料篇1』 1966 島根県

『新修島根県史 通史篇1』 1968 島根県

『玉造 烏坊遺跡群 ―古墳群・集落跡・古墓群の記録―』 1970 玉湯町教育委員会

『史跡出雲玉作跡 — 発掘調査概報—』 1972 玉湯町教育委員会

加藤義成 「文献に見る玉作りについて ―出雲国風土記を中心として―|『松江考古 第2号』 1979 松江考古学談話会

『玉湯町史 下巻 (一)』 1982 玉湯町

『松汀圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1983 松江市教育委員会

『史跡出雲玉作跡―宮ノ上地区 ―第1次発掘調査概報―』 1984 玉湯町教育委員会

『史跡出雲玉作跡一宮ノ上地区 一第2次発掘調査概報―』 1985 玉湯町教育委員会

『島根県生産遺跡分布調査報告書IV 玉作関係遺跡』 1987 島根県教育委員会

『史跡出雲玉作跡―玉ノ宮地区 ―第1次・2次発掘調査概報―』 1988 玉湯町教育委員会

勝部 衛 「玉造·花立横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第XV集』 1989 島根県教育委員会

『田和山古墳群発掘調査概報』 1991 松江市教育委員会

『二名留古墳群発掘調査報告書』 1992 松江市教育委員会

『菅沢谷横穴群』 1994 (財) 松江市教育文化振興事業団

加藤義成 『古代文化叢書1 出雲国風土記論究』 1995 島根県古代文化センター

『二名留遺跡発掘調査報告書』 1995 (財)松江市教育文化振興事業団

『福富 I 遺跡・屋形 1 号墳 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 2 』 1997 島根県教育委員会

『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書3』 1997 島根県教育委員会

『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡 一般国道 9 号松江道路(西地区)建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書4』 1997 島根県教育委員会

『古代出雲文化展 ―神々の国 悠久の遺産―』 1997 島根県教育委員会 朝日新聞社

『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報 V』 1997 島根県教育委員会

『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報 W. 』 1998 島根県教育委員会

「田和山遺跡群発掘調査現地説明会資料」 1998 松江市教育委員会 (財)松江市教育文化振興事業団

『島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報 Ⅶ』 1999 島根県教育委員会

「一般国道9号(松江道路連結部)建設予定地内 布志名大谷Ⅲ遺跡 ~現地説明会資料~」

1999 島根県埋蔵文化財調査センター

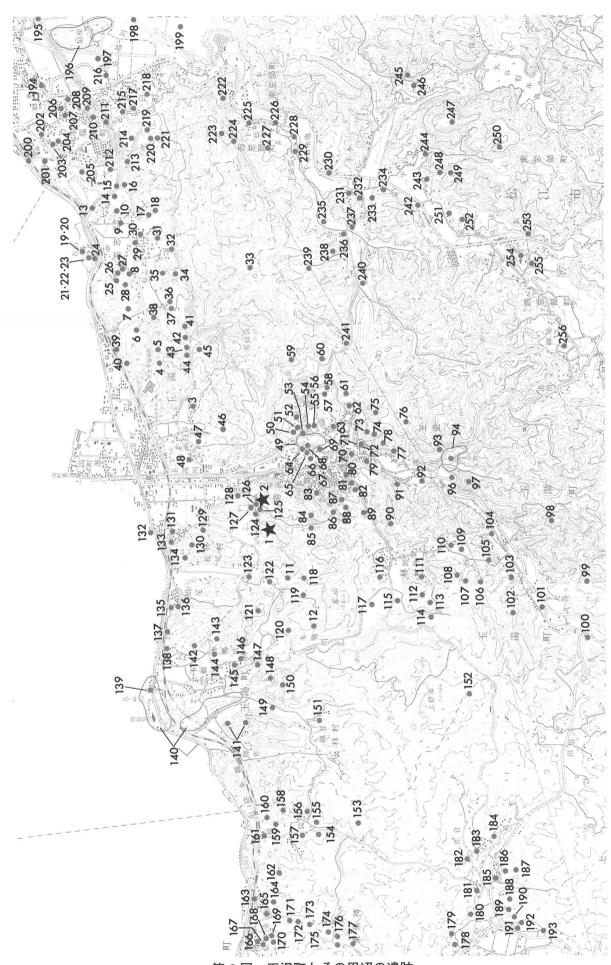
『宍道町史 史料編』 1999 宍道町

『蛇喰遺跡発掘調査報告書』 1999 玉湯町教育委員会

「玉造築山古墳」(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会

「報恩寺古墳群」(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会

「林古墳群第43号古墳」(玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会第3章 岩屋遺跡



第2図 玉湯町とその周辺の遺跡

也図番号	遺跡名	種別	地図番号	遺跡名	種 別
1	岩屋遺跡	古墳・玉作跡	65	小丸山遺跡	玉作跡
2	平床Ⅱ遺跡	玉作跡	66	小丸山古墳	古墳
3	杉谷遺跡	住居跡	67	記加羅志神社跡古墳	古墳
4	真野谷遺跡	古墳	68	記加羅志神社跡土壙	土壙墓
5	樅ノ木古墳群	古墳	69	蛇喰遺跡	玉作跡
6	大堤Ⅰ遺跡	古墳	70	お茶屋跡	住居跡
7	大堤Ⅱ遺跡	古墳・住居跡	71	出雲玉作跡(宮ノ上地区)	玉作跡
8	布志名遺跡	建物跡	72	玉作湯神社境内古墳	古墳
				玉造要害山城跡	城跡
9	茂芳目遺跡	散布地	73		
10	布志名大谷Ⅲ遺跡	古墳・四隅突出型墳	74	伝湯家綱墓	古墓
11	堂床遺跡	玉作跡	75	鈩谷鈩跡	製鉄遺跡
12	室山遺跡	住居跡	76	高支城跡	城跡
13	布志名大谷Ⅱ遺跡	古墳・炭窯	77	古宝古墳	古墳
14	布志名大谷 I 遺跡	古墳・建物跡	78	サイゲ寺跡	寺院跡
15	布志名才の神遺跡	祭祀遺跡	79	玉造古墓	古墓
16	足立窯跡	窯跡	80	玉造築山古墳	古墳
18	伝富士名判官義綱古	古墓	81	伝佐々木伊予守古墓	古墓
19	灘舟木窯跡	窯跡	82	大門小路横穴群	横穴
20	後福島窯跡	窯跡	83	波止遺跡	玉作跡
21	永原窯跡	<u> </u>	84	平床遺跡	玉作跡
22	利平窯跡	<u> </u>	85	日焼廻遺跡	玉作跡
					古墳
23	沢窯跡	窯跡	86	波止古墳	
24	空福島窯跡	窯跡	87	花立古墳群	古墳
25	鍛冶山窯跡	窯跡	88	花立横穴群	横穴
26	舟木藤平窯跡	窯跡	89	高尾古墳群	古墳
27	鍛冶畑遺跡	散布地	90	滝岩古墓	古墓
28	二斗垣古墳群	古墳	91	延木谷遺跡	玉作跡
29	永保山窯跡	窯跡	92	廻原遺跡	玉作跡
30	下山窯跡	窯跡	93	高畦谷鈩跡	製鉄遺跡
31	布志名城山城跡	城跡	94	出雲玉作跡(宮ノ上地区)	玉作跡
32	小川古墳	古墳	95	大連塚古墳	古墳
		製鉄遺跡	96	大野田遺跡	<u> </u>
33	カナクソ谷鈩跡				
34	後迫古墳	古墳	97	段山城跡	城跡
35	宮田古墳群	古墳	98	小谷要害山城跡	城跡
36	中河原古墳	古墳	99	要害山古墳	古墳
37	布田遺跡群	玉作跡	100	田仏遺跡	玉作跡
38	山崎横穴群	横穴	101	大田遺跡	玉作跡
39	大堤古墳	古墳	102	いもの廻鈩跡	製鉄遺跡
40	助次郎古墳群	古墳	103	正福寺跡	寺院跡
41	岩屋口遺跡	玉作跡	104	西遺跡	玉作跡
41	判官山古墳群	古墳	105	大口遺跡	玉作跡
42	永丁部遺跡	玉作跡	106	寺ノ空横穴群	横穴
43	狐廻遺跡	玉作跡 玉作跡	107	宮ノ奥横穴群	横穴

44	狐廻墳墓群	墳墓	108	神田遺跡	玉作跡
45	柿田古墳群	古墳	109	塚ヤブ古墳	古墳
46	半坂古墳群	古墳	110	松ノ前廃寺	寺院跡
47	面白谷遺跡	玉作跡	111	ソリ田遺跡	玉作跡
48	小丸子山古墳	古墳	112	穴薬師横穴群	横穴
49	出雲玉作跡(宮垣地区)	玉作跡	113	大槇谷横穴群	横穴
50	青木原横穴群	横穴	114	砂子谷鈩跡	製鉄遺跡
51	青木原古墳群	古墳	115	有ノ木遺跡	製鉄遺跡
52	徳連場古墳	古墳	116	長畑古墳群	古墳
53	徳連場横穴	横穴	117	川原田遺跡	散布地
	鳥場古墳群	古墳	118	根尾高尾古墳群	古墳
54					
55	鳥坊集落跡	住居跡	119	カツザキ遺跡	玉作跡
56	鳥坊古墓群	古墓	120	野武士田遺跡	散布地
57	金屋廻玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	121	林城山城跡	城跡
58	梅加原古墳群	古墳	122	宮畑遺跡	玉作跡
59	横屋堀玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	123	根尾築山古墳群	古墳
60	蔵ラ廻玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	124	岩屋寺跡裏横穴群	横穴
61	向新宮遺跡	玉作跡	125	岩屋寺跡横穴群	横穴
62	新宮横穴群	横穴	126	岩屋寺跡	寺院跡
63	元稲荷古墳	古墳	127	岩屋寺跡裏古墳	古墳
UU	青木原土壙墓	土壙墓	128	岩屋石切場	石切場

第1表 周辺の遺跡一覧(1)

也図番号	遺 跡 名	種別	地図番号	遺跡名	種別
129	扇廻古墳	古墳	193	金子遺跡	散布地
130	極楽寺古墳	古墳	194	福富Ⅱ遺跡	散布地
131	向市遺跡	玉作跡	195	友田遺跡	墳墓
132	報恩寺Ⅱ窯跡	窯跡	196	田和山遺跡群	弥生環壕・古墳
133	報恩寺Ⅰ窯跡	窯跡	197	薬師前遺跡	散布地
134	報恩寺古墳群	古墳	198	野向古墳	古墳
135	小金松横穴	横穴	199	菅沢横穴群	横穴
136	小金松古墳	古墳	200	福富湖岸遺跡	散布地
137			200	二名留古墳群	古墳
	小畑古墳群	古墳		一石田口県H	
138			202		散布地
139	鳥ヶ崎遺跡	散布地	203	廻田遺跡	散布地
140	林古墳群	古墳	204	廻田古墳	古墳
141	雷古墳群	古墳	205	大角山遺跡	集落跡他
142	中倉古墳群	古墳	206	蓮花垣遺跡	散布地
143	椎ノ木谷古墓	古墓	207	屋形遺跡	散布地
144	椎ノ木谷古墳群	古墳	208	松本遺跡	散布地
145	六反田遺跡	玉作跡	209	福富Ⅰ遺跡	散布地
146	脇田遺跡	玉作跡	210	乃白玉作跡	玉作跡
147	頼清寺裏古墳群	古墳	211	屋形古墳群	古墳
148	マコモ谷古墳群	古墳	212	大角山古墳群	古墳
149	稗田遺跡	散布地	213	すべりざこ横穴墓群	横穴
150	マコモ谷石切場	石切場	214	松本古墳	古墳
151	殿山石切場	石切場	215	松本修法壇跡	修法壇跡
152	穂束城跡	城跡	216	乃白遺跡	散布地
153	物三場遺跡	火葬墓	217	天場古墳	古墳
		散布地			
154	草の上遺跡		218	乃白権現遺跡	玉作跡
155	草の上東遺跡	散布地	219	弥陀原横穴群	横穴
156	庄廻遺跡	散布地	220	松本横穴群	横穴
157	岩穴遺跡	散布地	221	岩屋口古墳	古墳
158	鏡北廻古墳	古墳	222	清水尻遺跡	散布地
159	大門遺跡	散布地	223	中垣古墳	古墳
160	大紋古墳	古墳	224	下鍛冶古墳	古墳
161	塚畑遺跡	散布地	225	平松遺跡	玉作跡
162	荒神谷遺跡	散布地	226	小城口遺跡	玉作跡
163	松石横穴	横穴	227	宮の上遺跡	散布地
164	松石遺跡	散布地	228	垣ヶ尻遺跡	玉作跡
165	松石古墳群	古墳	229	下忌部玉作跡	玉作跡
166	弘長寺遺跡	散布地	230	千本玉作跡	玉作跡
167	弘長寺古墳	古墳	231	一崎遺跡	玉作跡
168	明寿廻遺跡	散布地	232	C 26遺跡	
169	明寿廻古墳群	古墳	233	C21遺跡	散布地
170	弘長寺横穴群	横穴	234	C22遺跡	散布地
171	水行遺跡	散布地	235	砂子原遺跡	玉作跡
172	高狭遺跡	散布地	236	一崎玉作跡	玉作跡
173	家の下遺跡	散布地	237	C19遺跡	散布地
174	多井北遺跡	散布地	238	C23遺跡	散布地
175	立平遺跡	散布地	239	C18遺跡	散布地
176	下多井遺跡	散布地	240	片田遺跡	玉作跡
177	多井遺跡	散布地	241	湯峠窯跡	窯跡
178	蔵敷遺跡	散布地	242	堂廻遺跡	玉作跡
179	西廻遺跡	散布地	243	一丁田遺跡	玉作跡
180	大坊遺跡	散布地	243	玉神谷遺跡	工作跡 玉作跡
	清水尻遺跡	散布地	245	下忌部遺跡	散布地
181					
182	常命壽遺跡	散布地	246	水源地土製勾玉出土	散布地
183	柴木田遺跡	散布地 #4-4-14	247	久多美山城跡	城跡
184	岩屋遺跡	散布地	248	平口横穴群	横穴
185	戸構遺跡	散布地	249	C36遺跡	散布地
186	佐倉横穴群	横穴	250	桑迫城跡	. 城跡
187	佐倉末の廻横穴群	横穴	251	中島遺跡	玉作跡
188	佐久多神社裏古墳群	古墳	252	後原玉作跡	玉作跡
189	栗屋山横穴群	横穴	253	C 24遺跡	散布地
190	角田古墳群	古墳	254	客古墳	古墳
191	紺屋田遺跡	散布地	255	忌部神社神宮寺跡	寺院跡
101	角田横穴群	横穴	256	塚田遺跡	散布地

第2表 周辺の遺跡一覧(2)

第3章 岩屋遺跡

第1節 調査の経過と概要

岩屋遺跡は、島根県八東町の玉造温泉街から約700m西側、低い丘陵上に位置し、遺跡からは宍 道湖を望むことができる。

本調査は第1章に記した経緯によって、平成9年4月10日から開始した。調査区は、近年まで使用されていた古墳群を大きく削平して南北に走る道を軸に、その東側の古墳群をI区、西側の緩斜面をⅡ区とした。ただしⅢ区の本格的な調査は、立木の伐採・搬出が遅れたこともあって、5月までずれ込んだ。しかも薄く堆積した表土を剥いだ段階で、試掘調査では確認できなかった石英・水晶・碧玉などのチップの散乱が認められ、道路公団・玉湯町とも協議して、玉作工房跡の可能性を想定した遺跡の範囲確認を行った。その結果、Ⅲ区については当初想定していたよりも調査区が西へ拡大することになった。その後は作業も順調にすすみ、Ⅲ区が10月6日、Ⅱ区が1月6日に調査を終了した。なお調査に際しては玉湯町教育委員会の全面的な協力を得た。特にⅢ区の調査は、本調査の開始から終了まで玉湯町教育委員会より調査員の派遣協力を受けている。

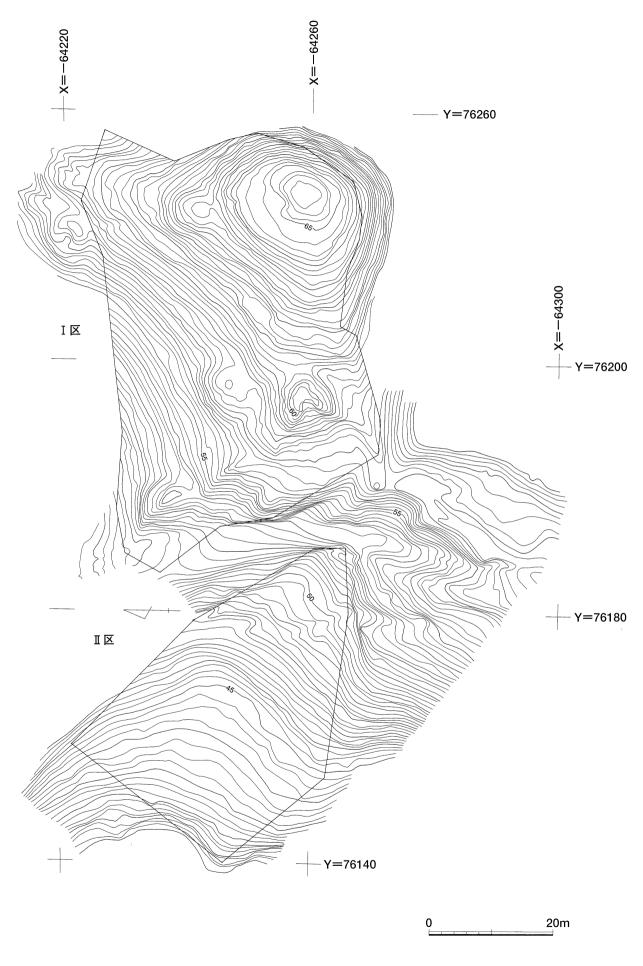
調査の結果、I区は丘陵頂上部から尾根沿に広がる古墳時代後期の古墳群であること、II区は玉作工房址などを含む奈良時代を中心とする遺跡であることが確認された。すなわち、6世紀後半に古墳が集中して造られたこの丘陵は、古墳時代が終わり律令国家が成立すると、その下の緩斜面が玉作工房として使用されるようになったと考えられる。

I区の主な遺構は墳丘を持つ古墳 6 基と土壙墓 6 基である。また、古墳群は中国横断自動車道建設予定地外で調査区外となった北側の尾根にも展開しており、調査対象となったのはその一部である。しかし、調査区は尾根が分かれる丘陵頂部を含んでおり、この辺りが当古墳群の中心であったことが想定される。墳丘を持つ古墳は後世の道などによって大きく破壊されていたものもあるが、いずれも10m前後の小規模な方墳であったと推定される。古墳の埋葬施設は、1号墳が土壙状の主体部、2号墳が割石を積み上げた横穴式石室、3号墳が全壊により不明、4号墳が推定で切石を積み上げた横穴式石室、5号墳が蓋の形態がそれぞれ異なる3つの箱式石棺の直葬、6号墳が箱式石棺の直葬であった。なお、2号墳の横穴式石室は、埋葬されていた須恵器より、出雲最古級のものであることが判明した。また、5号墳・6号墳から出土した4つの石棺からは合計で7体分の人骨が確認され、そのほとんどは状態の良好なまま遺存していた。

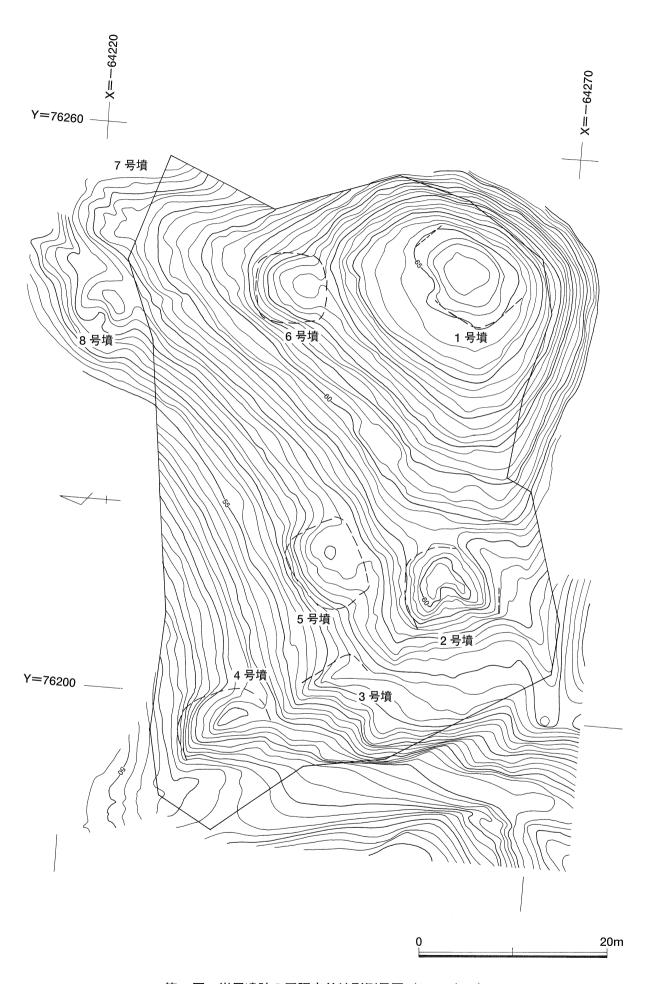
Ⅱ区からは、斜面を段状に加工した遺構が4棟検出され、その1棟は玉作工房として使用されていたようである。また、包含層などからも奈良時代の土器や玉の未製品や制作途中に生じた大量の水晶や碧玉のチップ、砥石などが出土した。玉の未製品は、その大半が碁石状の形をした平玉と呼ばれるものである。石材は碧玉・水晶・石英・黒色泥岩を使用し、めのうが使用されていた形跡は認められない。出雲の玉作は史料や表採遺物などから奈良時代以降も続けられていたことが知られていたが、当遺跡はその時期の玉作工房跡が発掘調査によって確認された初例となる。

第2節 岩屋遺跡 I 区の調査

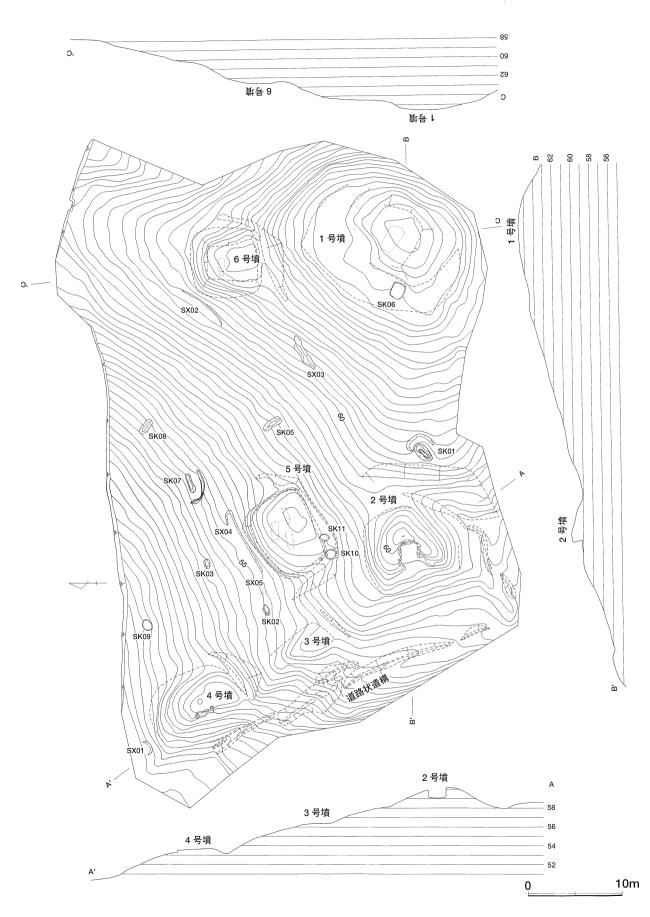
標高約65.5mの丘陵最高所から51mの間に設定した調査 I 区には、1号墳のある丘陵頂部から西



第3図 岩屋遺跡調査前地形測量図 (S=1/600)



第4図 岩屋遺跡 I 区調査前地形測量図 (S=1/400)



第5図 岩屋遺跡 I 区遺構配置図・墳丘盛土面検出時地形測量図 (S=1/400)

側にのびる尾根上に 2 号墳・3 号墳・4 号墳が、北側にのびる尾根上に 6 号墳・7 号墳・8 号墳が それぞれ位置する。また、 5 号墳は尾根上からは離れた 3 号墳東側にある。なお、 7 号墳・8 号墳は中国横断自動車道建設予定地外で調査対象外となった(第 4 図)。古墳の周囲には計 6 基の土壙墓が確認され(SK01・02・03・05・07・08)、比較的新しい時期のものと思われる小規模な炭窯も検出されている(SK09・10・11)。また、 1 号墳の裾部平坦面には土抗SK06があり、出土遺物から9世紀末頃のものと判断された。

1. 1号墳

土壙状の主体部を持つ1号墳は、古墳群の中で最も高い丘陵頂部の標高65m付近にあり、ここから古墳群の広がる二つの尾根がはじまる。すなわち、1号墳は岩屋古墳群の、いわば扇の要のような位置に立地する。

墳丘(第6・7図) 墳丘は北側の一部が後世の攪乱を受けているが、地形測量と残存する墳裾の状況から方墳と推定される。北西側の辺は推定で約11m、南西の辺は約6mで、北西の辺も6m程であっただろう。ただし、南東側は崖状の急斜面で墳裾が検出できず、墳裾を明確に設けていないか、墳丘が一部崩落・流出している可能性もある。また、北西斜面と1号墳の間に幅4mの平坦面が設けられ、それが南東側の急斜面に向かって幅を狭めながら古墳を囲むようにのびている。

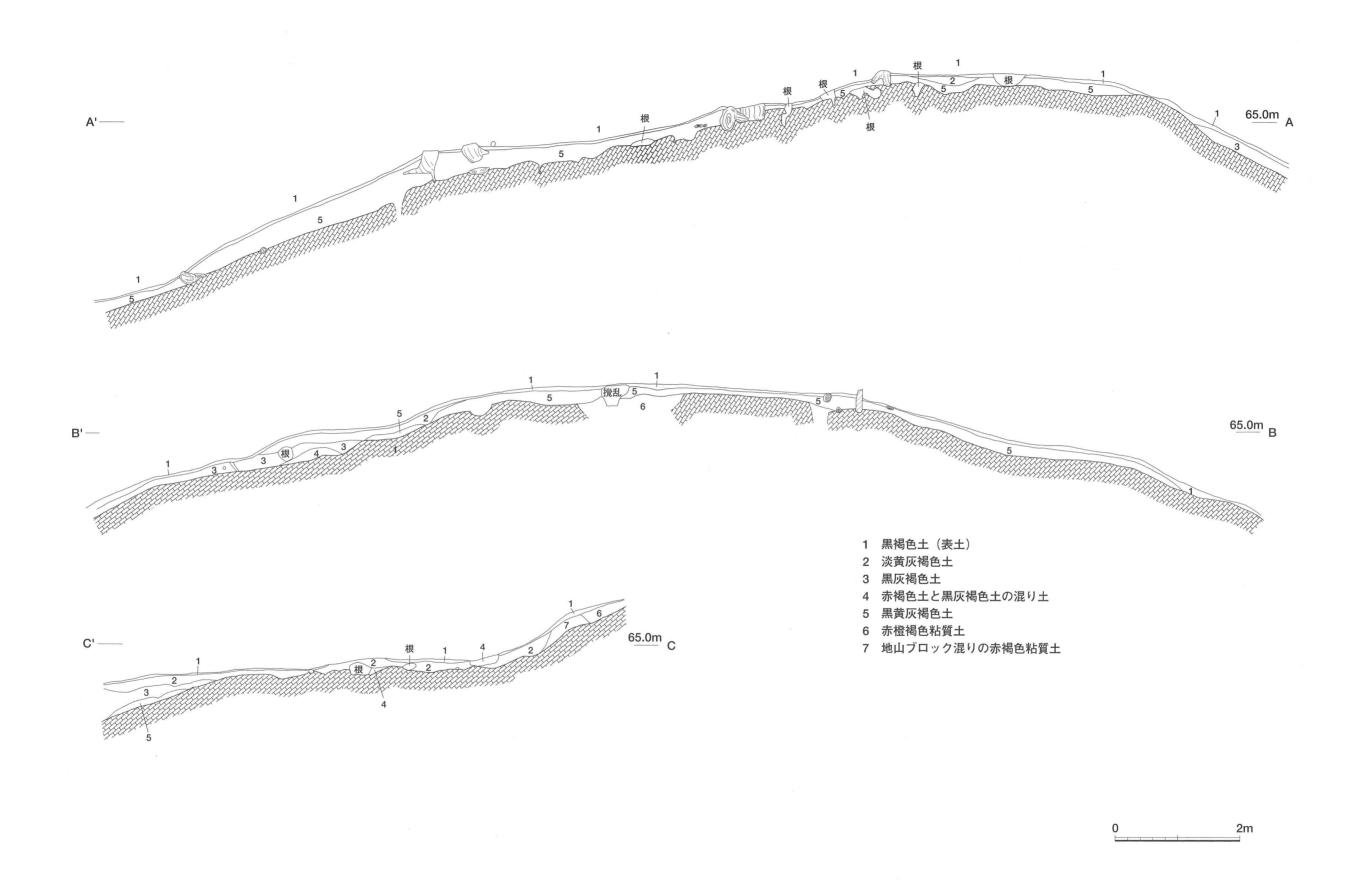
墳丘の土層観察からは、表土下から地山まで20cm以内で地山の土と類似した5層が堆積し、これが墳丘盛土であったと思われる。したがって、墳丘の流出を考えても、墳丘の多くは地山によって構成されていたと想定されよう。また、5層は西斜面にも平坦面を広げるように堆積しており(第6図A-A)、1号墳は基本的に丘陵頂部の地山を削り出し、その土を墳丘や平坦面の築成にも利用しているようだ。また、1号墳主体部の6層が5層の下からはじまるので、墳丘上の5層は主体部埋納終了後にかぶせられたことになる。1号墳とかかわる遺物は墳丘周辺から検出されなかった。

主体部(第8図) 1号墳の主体部は、長方形の土壙状の主体部が墳丘の中央部に設けられていた。主軸はW -30° -Nで、規模は長辺2.95m、短辺1.6m、深さ0.5mである。北西辺は後世の攪乱によって削平されている。床は北東側の辺が $5\,\mathrm{cm}$ ほど長く、床面も $5\,\mathrm{cm}$ 高い。したがって、頭は北東へ向けていたと想定される。床面から木棺の痕跡等は検出されなかった。

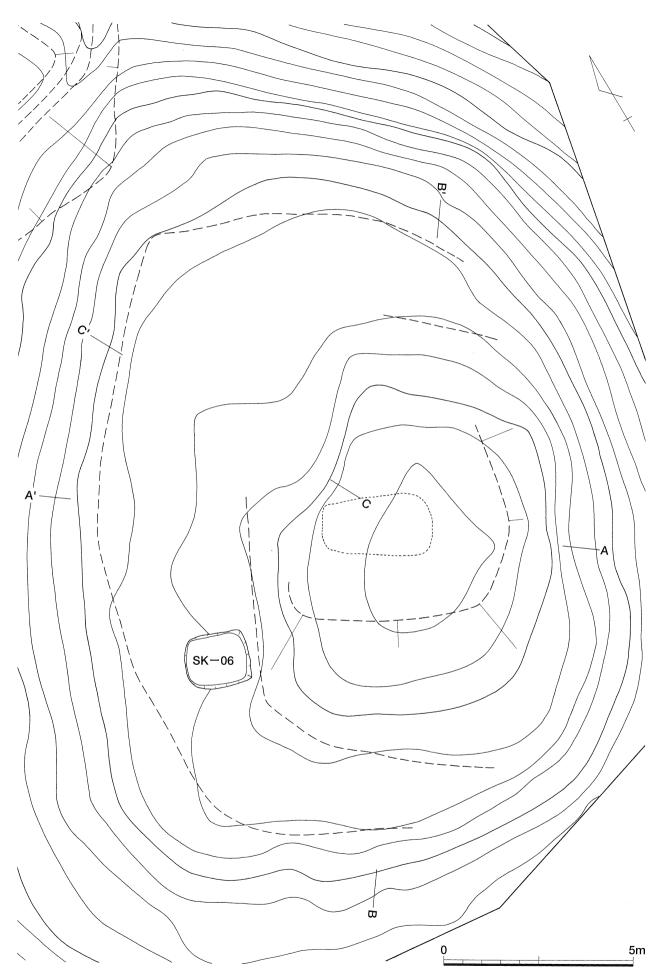
土壙内の土層の観察でも棺の明確な痕跡は確認できないが、北東辺で床面から立ち上がる2層が棺を設置した時の裏込めの土であった可能性もある。その場合、棺は南西に寄せられていたことになるが、A-A'、D-D'で棺の立ち上がりが確認できないばかりか、主体部中央のB-B'でも2層が床面でわずかに検出されるのみで、明確なことはわからない。主体部から遺物は検出されなかった。

2. SK06 (第9図)

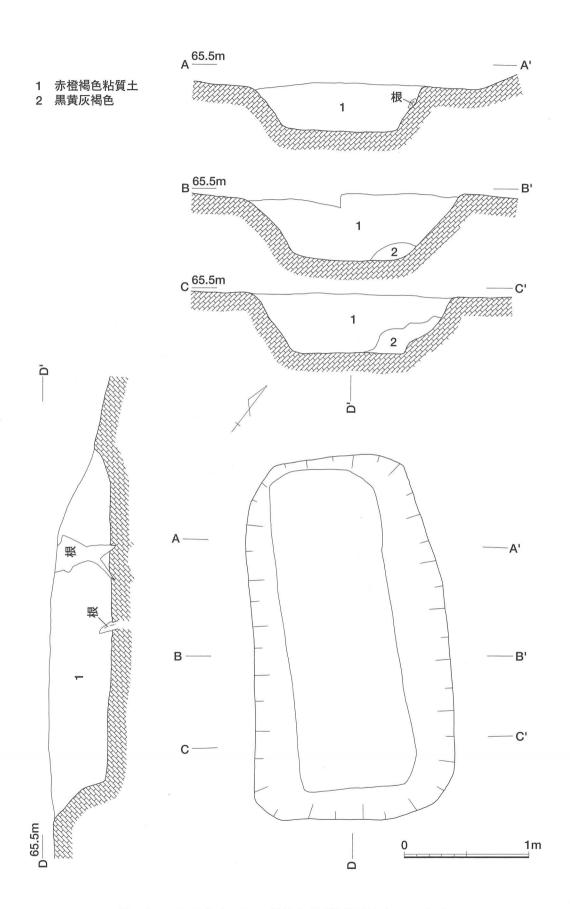
1号 墳の北東側に展開する平坦面の北側で長辺1.65m、短辺1.45m、深さ0.4mの土抗が検出された。底は平たく整形され、炭と焼土が広がるが(9層)、その層に須恵器の甕片数十点と須恵器の皿が混じっていた。後述するように須恵器は9世紀末のものとみられ、1号墳との直接的関係は考え難いが、火を使って何らかの行為をした形跡は祭祀的様相を窺わせる。その上には6~8層が堆積するが、1~5層がそれを切るように堆積しており、再び土抗が穿たれたようである。なお、1・2層も3・4層を切って載っており、SK06は何度か掘り返されたようだ。SK06周辺ではやはり須恵器の甕片が表採され、これが土抗内の甕片とも接合したことから、土抗内の甕片は掘り返し



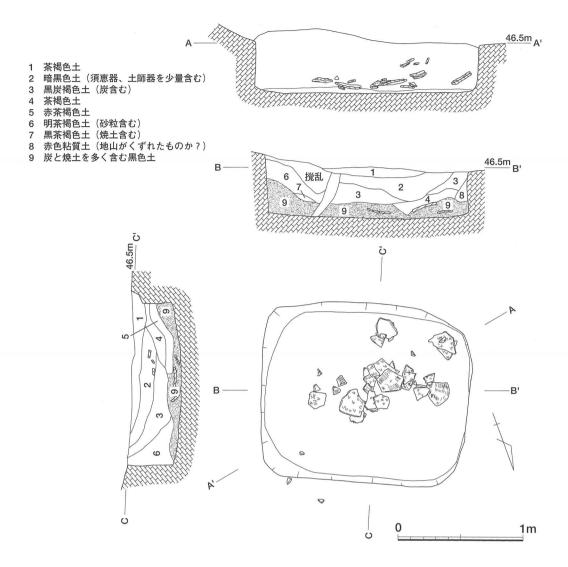
第6図 岩屋遺跡 I 区 1 号墳墳丘土層断面実測図 (S=1/60)



第7図 岩屋遺跡 I 区 1 号墳墳丘測量図 (S=1/100)



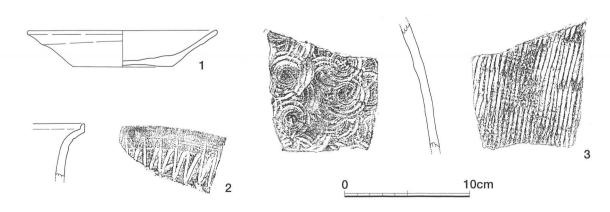
第8図 岩屋遺跡 I 区 1 号墳主体部測量図 (S=1/30)



第9図 岩屋遺跡 I 区SK06実測図 (S=1/30)

によってかき出されたとみられる。

出土遺物(第10・75図) 1はSK06内から出土した須恵器の皿である。口径は15cm、底部径は8cmで、器高は2.9cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で底面には回転糸切り痕が残る。焼きはあまい。2は須恵器の甕の口縁部付近の破片で頸部に8条の波条文が認められる。3は須恵器の甕の体



第10図 岩屋遺跡 I 区SK06出土遺物実測図 (S=1/30)

部で外面は並行叩き、内面は同心円叩きを施す。 2 と 3 は同一個体と想定され、同様の破片は 2 ・ 3 以外にもSK06内やその周辺から出土し、一部接合したが(第75図)、復元にはいたらなかった。 (離1) これらの遺物の時期は、1 とよく似たものが松江市の古曽志平廻田窯跡群で出土し、2 ・ 3 と同器種は宍道町の小松古窯跡群にみられるので、9世紀末から10世紀初頭頃のものとしてよいだろう。

3. 2号墳の調査

2号墳は、1号墳のある丘陵頂部から北へのびる尾根上にあり、標高58m付近に築かれている。 割石を積んだ横穴式石室を持つが、後世の攪乱によって調査前から石室石材の一部が露出し、墳丘 も削り取られるなど残存状況は良くない。

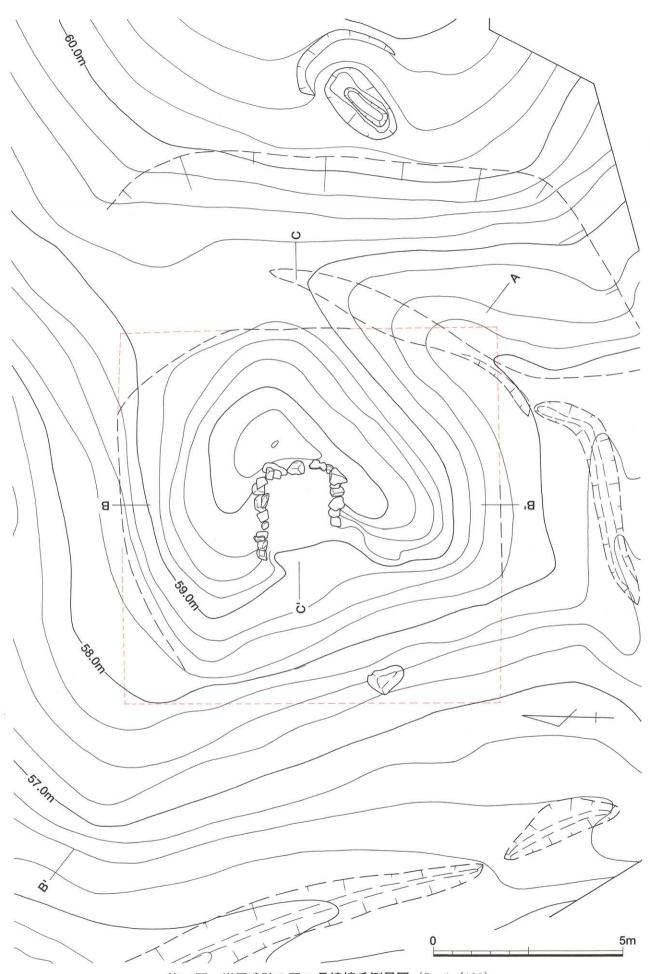
墳丘 (第11・12・13図) 後世の攪乱で墳形は明瞭でないが、2号墳の南北と東の裾に方形の辺にあたる直線のラインがみえ、これが玄室の中心からいずれも約5mの等位置にあること、またこれらに後世の削平を受けた痕跡が確認できないことから、一辺10mのプランを持つ方墳と判断した。 土層観察の結果、遺存した墳丘の築造方法は以下のようであったと考えられる。

- ①地山を整地し、石室を構築する面を削り出す。
- ②石室の基底石を据えるための堀り方を、石室プランを意識して溝状に地山に掘り込む(第15図)。
- ③基底石を据えて、基底石と溝の間に土を裏込めする(第13図 1-1~1-7層)。
- ④基底石の上に、石室の石を積み上げ、要所に裏込めをしながら盛土で壁体を押さえるように小墳 丘を築く(第13図 $2-1\sim4-20$ 層)。
- ⑤石室と、それを包む小墳丘〔第 1 次墳丘〕が完成した後、さらに盛土をかぶせて墳丘〔第 2 次墳丘〕を築成する(第13図 $5-1\sim5-35$ 層)。

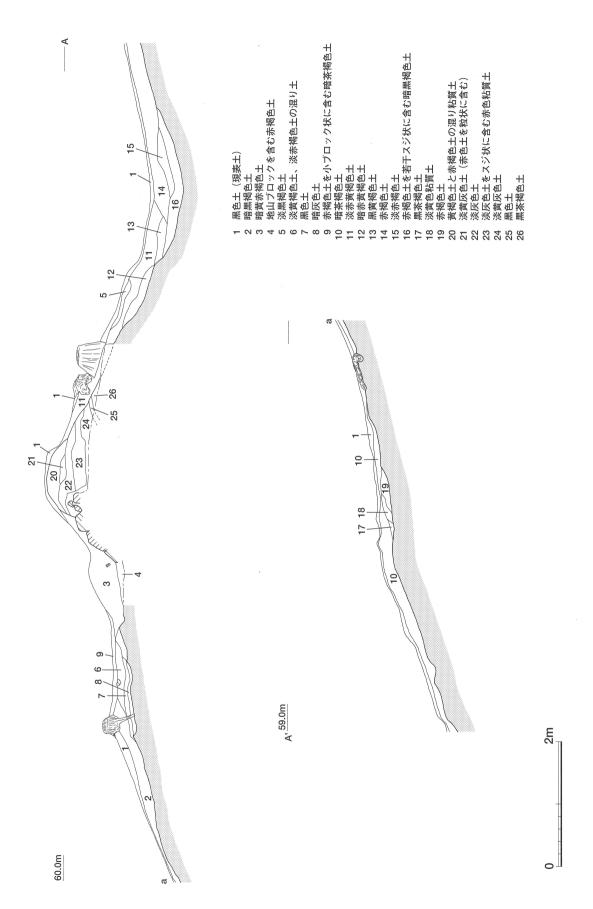
なお、第1次墳丘の盛土断面は、土が版築状に細かく重なる様相をみせながら、石室の石が1~2個ずつの高さのところで、いったん水平に近い堆積のラインを描く。これは、1~2個の石を積み上げてはその背後に土を盛る行為が重ねられて墳丘が形成されていった状況を示していよう。第1次墳丘の墳裾は石室内面から1.7m前後外側の位置にある。

また、第一次墳丘の東側に幅1.8m、深さ0.4mの規模で溝状に地山が掘りこまれ、その上には第2次墳丘の土が載っている。さらにその盛土断面には、5-28層を5-25層が、5-25・22層を5-20層が、それぞれ溝状に切るように堆積した痕跡が認められ、第一次墳丘の外縁部の堆積土を何度か溝状に掘り返した様子も観察される。石室の北側・南側も、第1次墳丘外側の地山がやはり一段低く削られていたが、その底のレベルは、東側の溝状に削られた地山の底よりも40cm低い。したがって、こうした第一次墳丘外側の地山の加工は、それによって生じた土が盛土に利用されながら、第1次墳丘を保護する水切りの役目も果たしていたと考えられる。すなわち、尾根の上方から流れ落ちる雨水は、第1次墳丘東側の溝によって切られ、それが南北の側面から尾根の下方に向かって流れ落ちる構造となっていたのだろう。こうした構造持つことは第1次墳丘の露出した状態が一定期間続くことを想定しているためと理解され、東側の盛土断面にいくつかの溝の痕跡が切り合って認められることもこのことと関連しているであろう。

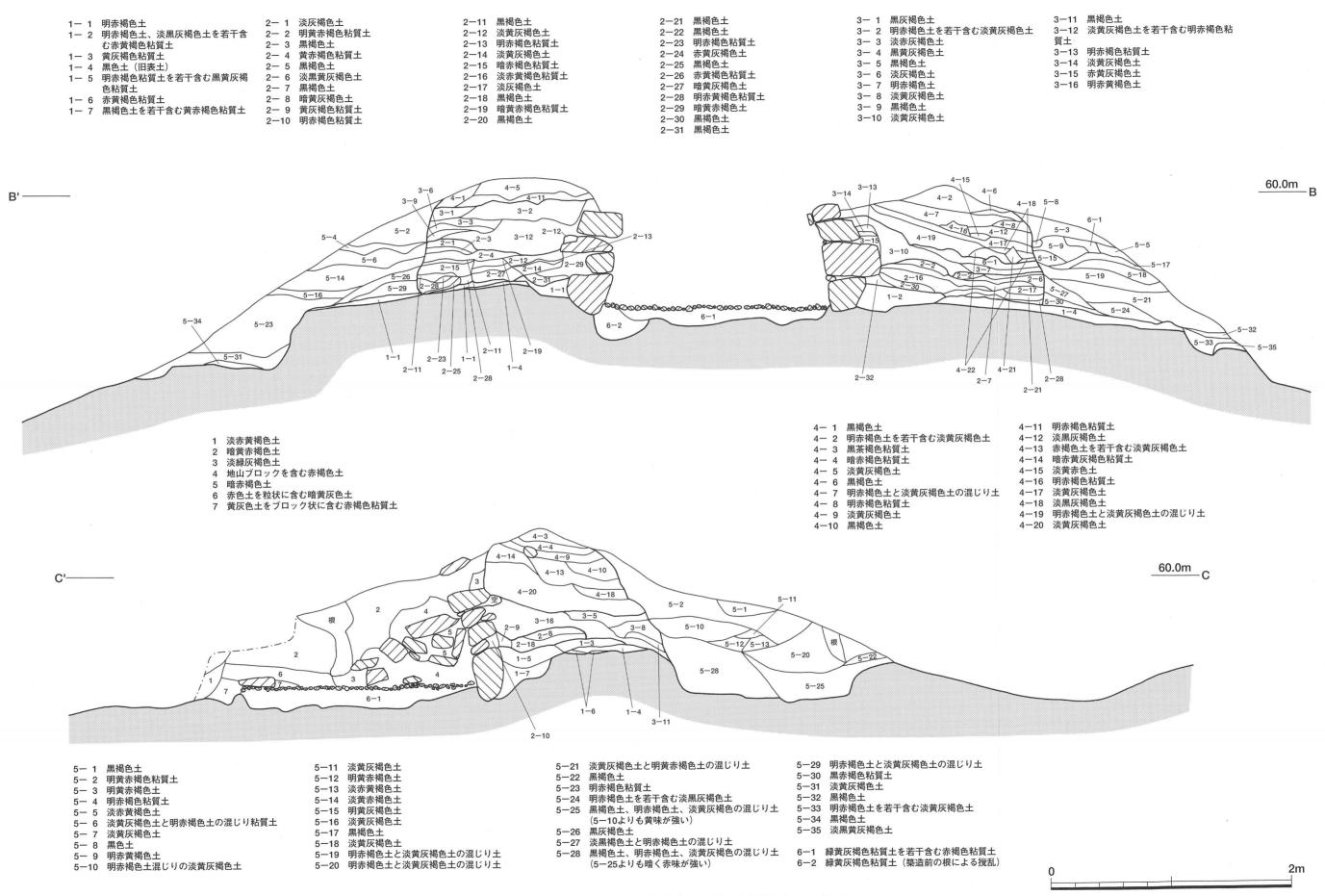
石室床面(第14・15図) 2号墳石室の開口方向は真西である。天井部分は崩落し、羨道部・前庭部にいたってはすでに地山まで削り取られ、その痕跡さえ検出できない。しかし玄室は0.8~1.2mの高さで残り、袖石も地山にそれの置かれていた痕跡が認められるから、玄室床面は大半が残っていると考えられる。ただし、袖石の痕跡と思われる石材の圧痕は北側は明瞭だが、南側が地山



第11図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳墳丘測量図 (S=1/100)



第12図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳覆土土層断面実測図 (S=1/60)



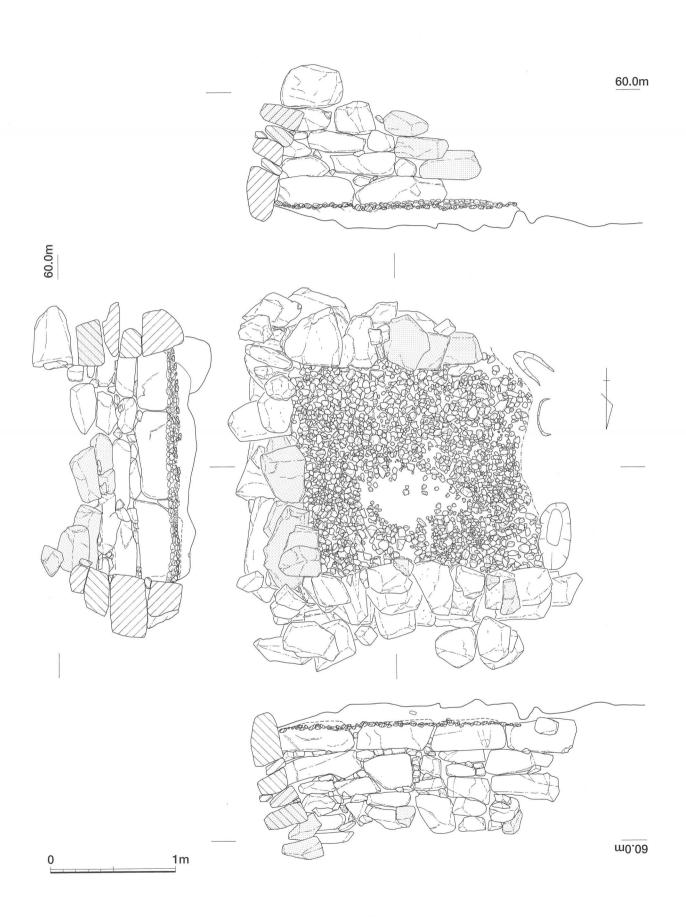
まで削り取られているため明確とはいえない。したがって両袖式と片袖式の両者の可能性が残される。玄室床面は幅1.85m、奥行き約2mで、奥行きがやや長めながら、正方形に近いプランである。玄室内は地山を10~20cm程度掘り込み、粘土を詰め、その上に拳大からそれよりやや小さめの礫石を敷いた石床を設けていた。石材は安山岩・流紋岩・花崗班岩などが主流で、近辺の川原石と推定される。一部に碧玉も使用していたが、角がとれて丸みを帯びていたので、これらも川原で採取したものだろう。玄室奥の石床は、奥壁に平行して60cmの幅で礫石が3cmほど高く敷かれ、棺は長軸を南北方向に向けて玄室の奥に設置されていたと考えられる。ちょうどこの部分の上に腐植土らしき黒色土も載っており(第16図)、木棺などの棺の痕跡の可能性もある。なお、玄室中央部やや北側の礫石が楕円形状に外れて窪んでいたが、その原因は定かでない。

石床下の掘り込まれた地山面は凹凸が激しく、極めて粗い整形である。その底は石室の壁の基底石の堀り方よりもさらに5cmほど低かった。掘り込まれた地山面に対し玄室内面の基定石底部のラインが浮いたような状態となるところもあり、基底石の堀り方を壊して床面が造成された部分もある。したがって、石室の築成と平行して床も造られたとすれば、壁面は不安定とならざるを得ず、石床は石室が完成して安定した後に設けられたと考えるべきだろう。しかし、床面を整形するために地山をわざわざ粗く深く掘り込んだ積極的理由は不明で、石床敷設用の地山掘り込みの中に石床で使用されていない直径15cm程度の大きめの礫石が混入していたことを考えると、残されていた石床は追葬などで二次的に整形されたもので、先の大きめの礫はそれ以前の段階の石床材の一部であった可能性がある。後述するように、石床の下の粘質土のフルイ土中から玉類が検出されており、これが現存していた石床からこぼれ落ちた可能性を否定しないが、それより前の段階の埋葬とかかわるとも考えられる。

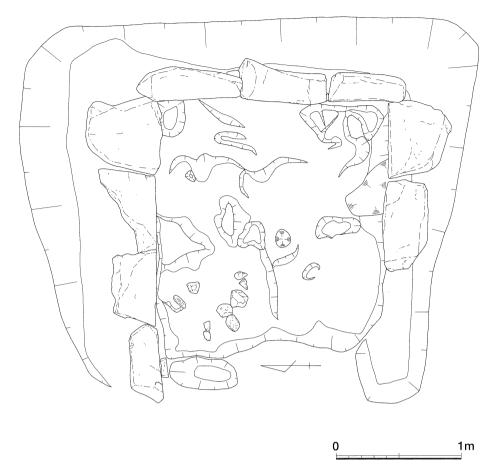
玄室壁面(第14・15図) 玄室壁面は割石を小口積状に積んで構築している。石材は花崗岩で玉湯町南方山地で産出するものと類似する。基底部の石材はやや大きめの石を使用し、地山に堀り方を10~15㎝程度の深さで溝状に設け、上面がほぼ水平になるように据え付ける。基底石は「コ」の字に置かれているが、側壁の基底石の方が奥壁のものより玄室内側に入り込んでいる。奥壁の基底石は、高さ30㎝前後(床面からは25㎝)、横の長さ70㎝前後、奥行15㎝前後の厚みを持つ3個のやや柱状の板石を腰石状に立て並べる。側壁の基底石は両側にそれぞれ4個ずつもち、奥の3個は奥壁と異なり板石を寝かせて据えている。その高さはいずれも25㎝(床面からは18㎝)、長さ60㎝前後のものだが、奥壁に接して角を構成する部分は奥行きを持つものを使用しており、いずれも50㎝~55㎝を測る。基底石の上はやや小形の板石を小口積状に積み、その隙間には細かい割石が詰められている。なお、側壁の中心付近と奥壁の真中心よりやや南側付近に比較的小さい石が使用されているので、大きな石材は各コーナー角に寄せるように積んで、真ん中付近の空いた部分に小さめの石を詰めたようだ。また、壁面は基底石からほぽ30㎝の高さのところで、石の上面の水平ラインがそろうので、基底石を据え付けた後、いずれの壁面もいったんこの高さまで石を積み上げる作業をしたものと推定される。これは、先の墳丘断面の観察結果と矛盾しない。

石室の残されている奥壁、左右の側壁は、床からいずれも約80度の傾斜で立ち上がる。ただし、 床面から45cm以上の現存する奥壁の上2列の石と南の側壁の西側の石、北の側壁の上端部は後世の 削平で盛土の被りが薄く、二次的に石が移動し、本来の位置より前にせり出して傾斜している。

天井部の構造などは不明であるが、石室内に崩落していた石室石材が幅40cm以内、厚さ15cm以内



第14図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室実測図 (S=1/30) ※網掛けの石は後世の削平によって若干移動したもの



第15図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室基底石及び掘り方実測図 (S=1/30)

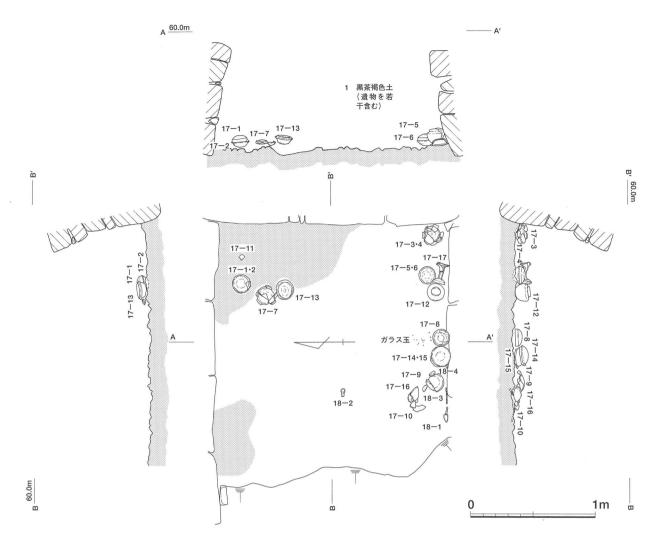
程度の比較的小さな板状の割石で、奥壁・側壁はおそらくこれらを使用して持ち送りで天井に達していたと推察される。なお、奥壁付近には、厚さ10cm、幅30cmほどの碧玉の原石 1 点が、石室中軸線より南によった位置で出土しており、奥壁の石室石材として碧玉原石も使用されていたことを知ることができる。

遺物出土状況(第16図) 遺物は玄室内の床面から須恵器の坏蓋7点、坏身7点、高坏1点、小型短頸壺1点と、器種不明の須恵器片1点、鉄鏃5点、刀子2点、ガラス製小玉23点が出土した。また、石床と地山の間に詰められた粘質土からも碧玉製管玉を含む玉類が検出された。玄室南西隅の外側表土付近からは須恵器の広口壺1点も採取したが、検出地点が玄室に極めて近い削平面であったことから、後世の削平によって石室内からこぼれ落ちたものと判断した。

玄室床面は、南の側壁中央付近の須恵器の坏身のなかに裏返しにして重ねたものがあるなど片づけられた痕跡が認められる。また、玄室北東角に外面に平行タタキを施した器種不明の須恵器の破片 1 片があったが、玄室内に同種のものが存在しない。したがって、玄室内の須恵器の中には追葬などで二次的に移動しているものがあるとみられる。

鉄器は、南側壁沿いの中央付近で鏃2点と刀子1点が、玄室の中央部で刀子1点が出土した。ガラス玉は南の側壁側中央付近で集中的に出土している。

石床をとり除き、その下の粘土層の土をフルイにかけたところ、フルイ土中からガラス玉 2 点と 碧玉製管玉 1 点が出土した。これらは石床からこぼれ落ちたものの可能性があるが、先述のように、



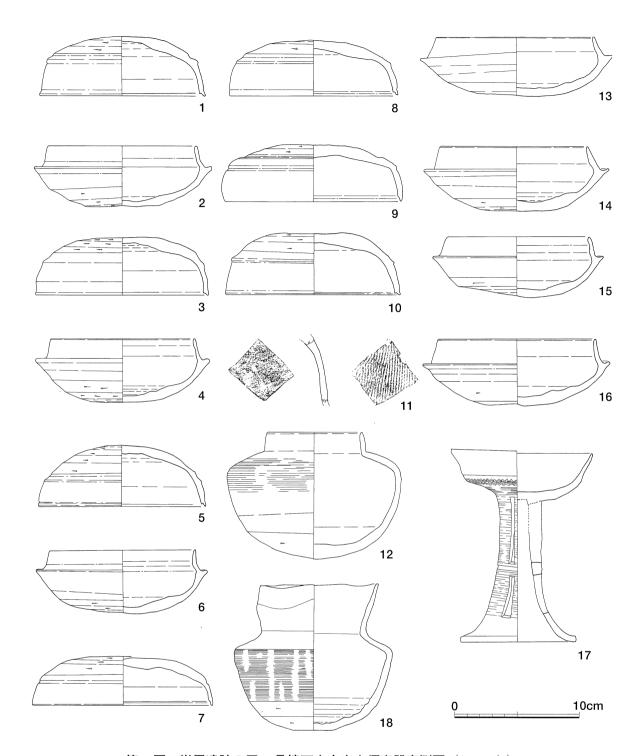
第16図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内遺物出土状況実測図 (S=1/30)

現存の玄室床面が整形される時に削られた、それ以前の玄室内の埋葬面とかかわる遺物である可能 性も残しておきたい。

玄室内出土須恵器(第17図) 2号墳出土の須恵器については、大谷晃二氏より多くの教示を受けた。以下、蓋坏の型式に関しては、基本的に大谷氏の見解をふまえたものである。

2・4・6・13・14・15・16は坏身である。2は口径12cm、最大径14.4cm、受部径13.4cm、器高4.9cm。4は口径11.6cm、最大径14.4cm、受部径13cm、器高5.1cm。6は口径11.8cm、最大径14cm、受部径13cm、器高5 cm。13は口径12.9cm、最大径15.6cm、受部径14.6cm、器高4.8cm。14は口径12cm、最大径15.1cm、受部径14cm、器高5.2cm。15は口径11.5cm、最大径13.9cm、受部径13.2cm、器高4.8cm。16は口径12.8cm、最大径15.2cm、受部径14.3cm、器高5.4cm。受部に坏蓋の口縁端部が溶着するが対応する坏蓋はない。いずれも底部に丁寧な回転ヘラ削りを施し、口縁部は受部から1.5cm~1.9cmの高さでやや内傾しながら立ち上がる。大きさに個体差があるが、調整などに顕著な差異は認められない。

一方、坏蓋の場合は大きく3つに大別される。坏身2とセットとなる坏蓋1は口径13.5cm、器高4.8cmで、天井部に丁寧な回転へラ削りを施し、肩部は沈線とナデによって突帯状に稜線を表現する。口縁は端部を外面にそらせた面をつくり、その面に沈線を施している。端部だけみれば、その

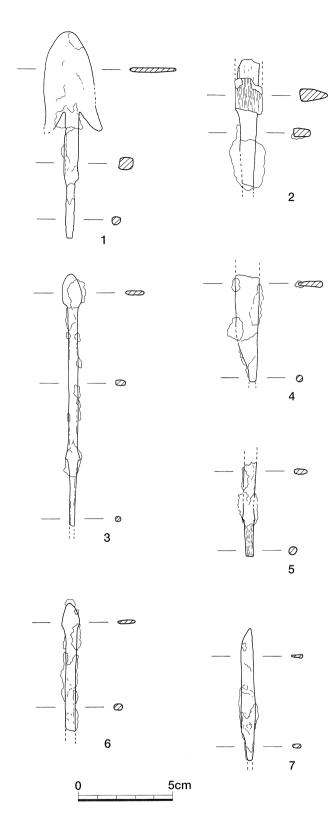


第17図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内出土須恵器実測図 (S=1/3)

そりは強くシャープで、大谷編年のA1型でみられる $\alpha1$ 類に属す。大谷氏より、出雲二期でも形式的には $A2a\cdot A2b$ 型に先行する型式のものとみるべきとの指摘を受けた。

 $3\cdot 5\cdot 8\cdot 10$ は同類型の坏蓋である。 3 は坏身 4 と、 5 は坏身 6 とセットになる。 1 は口径 13.5cm、器高4.8cm、 3 は口径14cm、器高4.8cm、 5 は口径が13.5cm、器高4.9cm、 8 は口径13.6cm、器高4.5cm、10は口径14.1cm、器高5 cmを測る。調整は 1 のものに類似するが、口縁端部は 1 ほど外面へのそりが強くなく、沈線断面もまるい α 2 類のものである。大谷編年のA2b型に該当する。

9の口径は14.5cm、器高4.6cmと、大きな口径に比して器高は若干低い、扁平な形をしている。ま



第18図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内出土鉄器実測図 (No.5~7はふるい土中) (S=1/2)

た、天井部の削りはやや浅いが丁寧で、肩部は沈線を利用して稜を作りだすA2b型の様相をみせる。ただし、口縁部はやや肥厚させた端部に沈線を施してゆるい段状に仕上げた α 3 類に近いもので、A2b型でも比較的新しい時期のものと考えられる。

坏蓋 7 は口径14.6cm、器高3.9cmで器形は 9 に類似するが、口縁端部から肩部稜線までが短く、7 よりは新しい様相をみせる。また口縁端部内面の沈線より上位は 9 よりやや膨らみを持たせている。大谷編年では $A4 \sim 6$ 型でみられる β 類に該当するとみられるが、口径の大きさなどから A3 型に併行する時期の、やや早い段階のものと考えられよう。なお、坏蓋 7 は坏身13と並び出土するが、蓋と身は合わない。

焼成は、 $1 \sim 6 \cdot 10 \cdot 14$ が淡灰白色・あるいは淡灰色でやや不良、その他は良好である。

11の器種不明の須恵器片は、体部外面の 平行タタキ痕が明瞭だが、内面はアテ具痕 をナデ消しており、横瓶であろうか。

12は短頸壺である。口径7.7cm、胴部最大径14cm、器高10.1cmと小型で、肩部にカキ目、底部に回転へラ削りを施す。なお、回転へラ削りは、その痕跡は明瞭だが、一部削り残しもみられるやや雑なものである。

17は高坏で、口径11.3cm、底径9.3cm、器高15.5cmと、脚が長い。坏部外面に櫛描波状文、坏底部から脚部にかけてカキメ調整を施す。また、脚部は台形の3方2段透しを持ち、脚端部はやや丸くおさめる。

これらの遺物の時期は、蓋坏を参考にす

れば、いずれも大谷編年で出雲2期を中心に7のように一部3期に入る様相をみせるものもある。 こうした型式差が追葬などによる時期差をある程度反映している可能性はあるが、遺物出土状況か らそれらを明確にすることはできないため、残された課題も多い。

玄室外出土須恵器(第17図) 18は須恵器の広口壺である。基本的に頸部から口縁にかけて広が

るが、一部大きく歪んでいる。肩部ははり、体部外面にカキ目を施した後、底部に回転へラ削りを施す。また、底部のカキ目はヘラ削りによって削りとられている。口径は推定で9.2cm、器高は11.8cmで、胴部最大径は12.8cmを測る。

なお、18の出土地点は玄室外だが、前述のように、少な くとも石室内に副葬されていた可能性が高い。

玄室内出土鉄器(第18図) 1・3・5・6・7は鉄鏃である。1は平根式鉄鏃で、その鏃身は柳葉形、鏃身関部は逆刺となる。また錆で不明瞭ながら棘状に突出しない直角関を有すると判断される。ほぼ完形で、全長10.9cm、頸部長は3.5cm、茎部長は3.2cmを測る。その他はいずれも長頸式だが、鏃身は3が長さ1.8cm、6が長さ1.4cmのいずれも柳葉形、7が長さ5.7cmの片側のみに刃部を持つ刀子状を呈す。関は3・5とも直角関である。

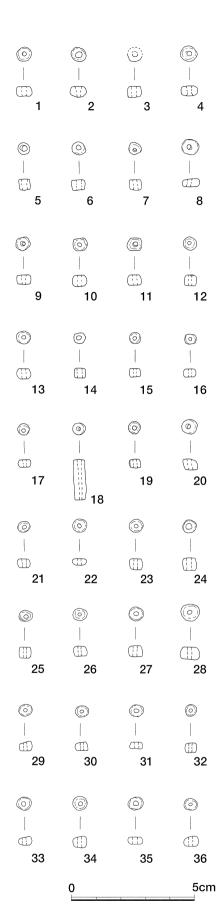
2・4は刀子で、2には鞘木が付着している。いずれも 遺存状態が悪い。

玄室内出土玉類(第19図) 18は碧玉制管玉で、その他はいずれもガラス製小玉である。碧玉製管玉は直径 5 mm、高さ16mmの円柱状に整形した碧玉に、直径 2 mm以下の穿孔を行う。表面はなめらかに研磨されている。またガラス製小玉は、5 が透明度の高い明るい水色、17が不透明な黄緑色を呈すが、以外は濃淡・透明度にばらつきがあるものの、基本的には藍色である。なお、石床下層から出土したのは、18の碧玉製管玉と16・17のガラス製小玉である。

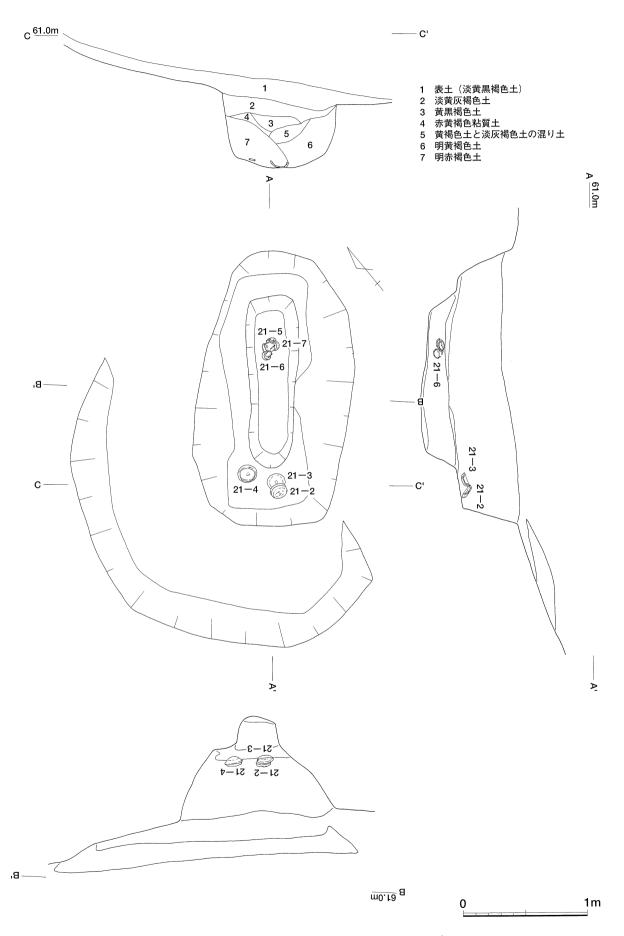
3. SK01 (第20図)

SK01は、尾根のラインを垂直に切るようにはしる 2 号墳東側の溝に接するように、その外側に掘り込まれた土壙墓である。墓壙は加工段状に整地した面に二段堀りで設けられており、平面は長方形を意識したような楕円状を呈す。上段上面の長径は2.2m、短径は1.2m、下段上面の長径は1.4m、短径は0.4mで、上段上面から底面までの深さは0.7mほどである。また、長径ラインの方向はW-48°-Sである。

調査時に土壙の平面を捉える際、加工段状の掘り込みも 土壙の一部と理解していたため、適切な位置で土層を観察 することができなかった。しかし、墓壙下段の掘り込み内 の遺物は底面からやや浮いており、そこが棺の底面付近で あったと考えられるから、下段の掘り込みには木棺などが



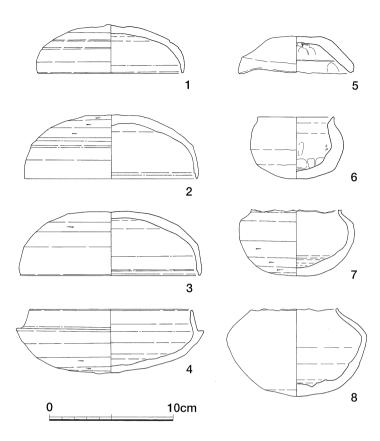
第19図 岩屋遺跡 I 区 2 号墳石室内 出土玉類実測図 (No.16~36 はふるい土中) (S=2/3)



第20図 岩屋遺跡 I 区SK01実測図 (S=1/30)

据えられていた可能性が高い。下段の掘り込みを取り囲むように間に設けられた平坦面の北東側にも、須恵器の蓋坏が置かれていたが、これは棺外副葬品であろう。したがって、墓壙底面を基準とすれば、設置された棺の長さは1.2m以下と、小さなものであったと推定される。出土した遺物の時期からSK01は2号墳に近い時期ののものと考えられるが、2号墳の溝のすぐ外側に位置することを考えると、2号墳とは何らかの関係を有しているとみられる。

出土土器(第21図) 1~3は 須恵器の坏蓋である。1は口径11.9 cm、器高3.9cmと小型で、肩部は沈 線を利用して稜線を表現する。口 縁部はやや内湾し、内面に沈線が



第21図 岩屋遺跡 I 区SK01出土遺物実測図 (S=1/3)

まわる。天井部の調整はヘラ切り後ヘラと指で不定方向にナデを施す雑なものである。焼成は良好。 大谷編年のA6型・A7型に該当する要素を持つ。

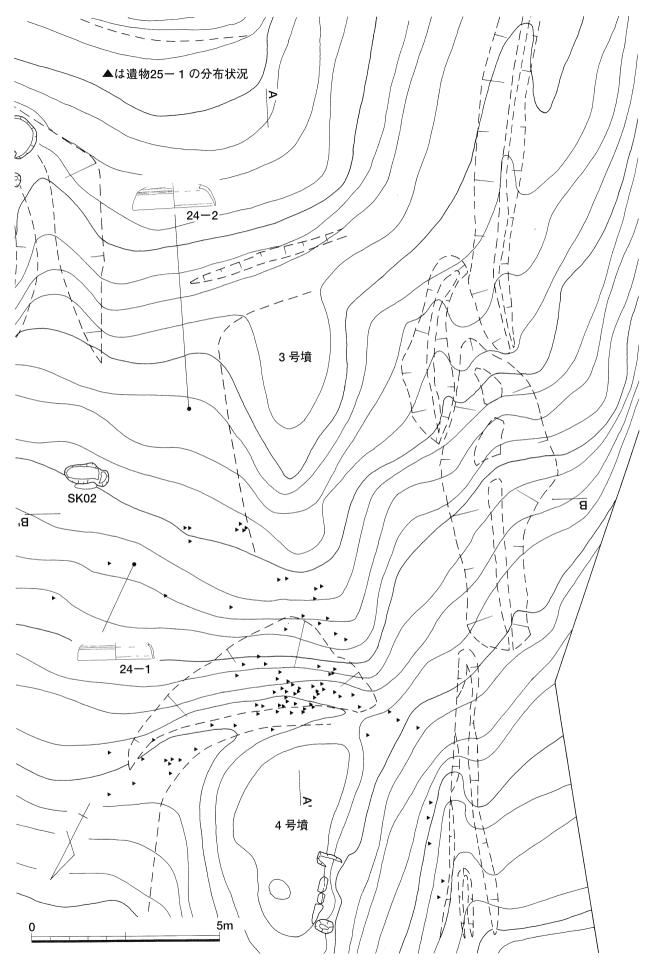
2 は 口径14cm、器高5.1cmで、肥厚させた口縁部内面には浅く沈線を入れてゆるい段状に仕上げる。肩部は沈線とナデによって突帯状に稜線を作り出し、天井部は丁寧な回転へラ削りを施している。焼成は良好である。3 は焼成不良で、内外面の調整が明瞭でない。基本的には2 と同様のものと判断されるが、口縁端部内面の沈線は2 より深い。口径は14.6cm、器高は5.2cmを測る。いずれも大谷編年のA2型からA3型に属する。

4 は須恵器の坏身で口径13.1cm、最大径15.2cm、受部径14.5cm、器高5.2cmを測る。受部径と焼成から、坏蓋3と対応する可能性が高い。受け部から口縁端部までの高さは1.6cmを測る。

5 は鉢状の手づくねの土師器で、口径9.2cm、器高 4 cmと小型である。口縁部は段がつく。伏せた状態で出土したことから、6 か 7 の蓋として使用されていたものだろう。6 も手づくねの土師器で壺。口径は6.2cm、器高は5 cmで、やは9 小型である。胴部は丸みを帯び口縁端部を外反させる。

7は須恵器の壺で、口縁部を欠くが、これは意図的なものであろう。肩部がはり、短頸壺であろか。ただし、肩部の径が9.2cmと非常に小型である。内面と外面胴部は回転ナデ、外面底部は丁寧な回転へラ削りを施す。8も須恵器の壺だが、胴部の半分と頸部を欠き、詳細は不明である。胴部最大径は11.3cmを測り、内面と外面胴部は回転ナデ、底部は不定方向のナデを施す。

遺物の時期は、大谷編年によると1が出雲4期から5期の間、8も新しい様相をみせるが、これらは土壙内堆積土の上層やその周辺部出土のものが接合したものである。それ以外の土壙内の副葬品は基本的に出雲2期かあるいは3期に入る時期のものと理解できよう。



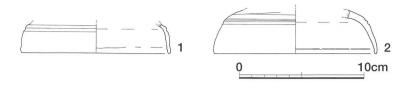
第22図 岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺測量図及び遺物出土状況 (S=1/100)



第23図 岩屋遺跡 I 区 3 号墳墳丘土層断面実測図 (S=1/60)

4. 3号墳

1号墳から西側にのびる尾根は、2号墳付近からやや北西に方位を変える。2号墳からその尾根上に6m程下った標高56m付近に、3号墳は位置する。墳



第24図 岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺出土遺物実測図 (S=1/3)

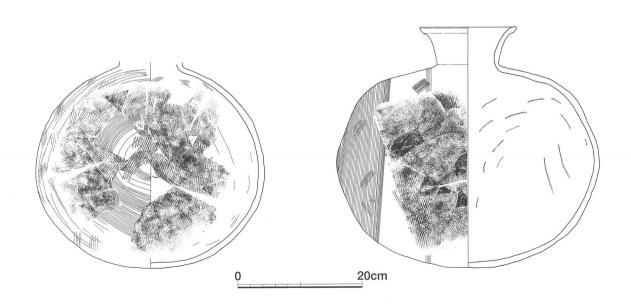
丘や遺物はほとんど残されておらず、主体部の構造も不明である。

墳丘 (第22・23図) 後世の攪乱で墳丘はその大半を失い、地山の加工痕と僅かに残された盛土が、ここに古墳があったことを示している。墳裾は、南東側が尾根を溝状に切って整形されているため、その痕跡が明瞭で、北東側も地山を若干削り出した痕跡が認められた。いずれも、直線状に辺をなしているので、方墳であったと判断される。規模は不明だが、北東側は墳裾が約6mほどの長さで確認でき、その先1.8mからは4号墳用の溝で尾根が切られているので、7m前後のものが想定できる。

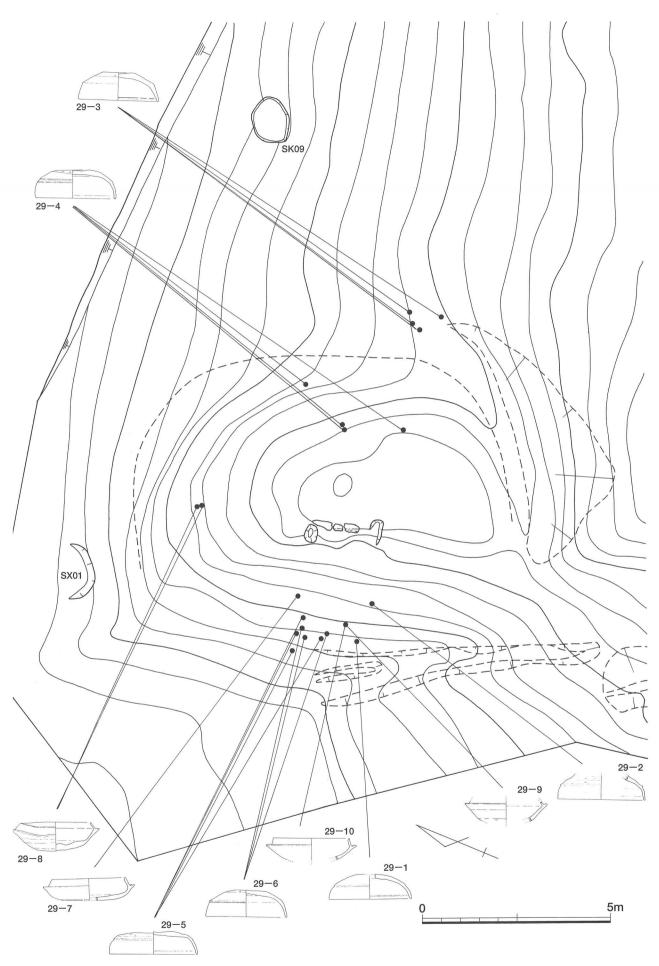
遺物出土状況(第22図) 墳丘上にのる遺物は検出されず、須恵器の破片がその周辺に散乱していた。特に横瓶(第25図)の破片は、3号墳北側の墳裾付近から、その下の4号墳の溝に向かって流れ落ちており、4号墳とかかわる遺物の可能性もあるが、時期が他の古墳と比べて新しく、やや不自然である。また、須恵器の坏蓋も墳裾付近から2点出土しているが、4号墳のものと判断できる積極的材料はない。

3号墳周辺出土遺物(第24・25図) 第24図の1・2は須恵器の坏蓋である。1は口径11.9cmで、肩部を沈線で作り出し、口縁端部はまるく仕上げる。また、内面は口縁端部の上方に沈線を1条めぐらすが、とぎれる。天井部を欠き、その調整は不明。2は口径12.9cmで、やはり肩部を沈線で作り出す。また、口縁端部はまるく、その内面上方に沈線をめぐらす。天井部は欠けているものの、ヘラ削り痕がみえる。いずれも、大谷編年の $A4\sim A6$ 型で出雲4期に該当する。

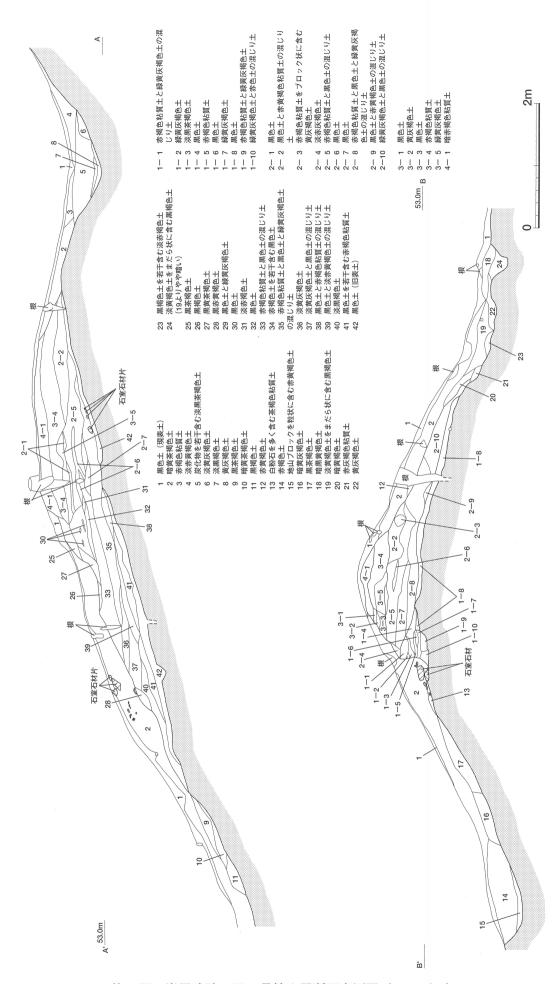
第25図のものは横瓶で、口径14.8cm、胴径40.2cm、器高38.5cmを測る。胴部外面には平行タタキ



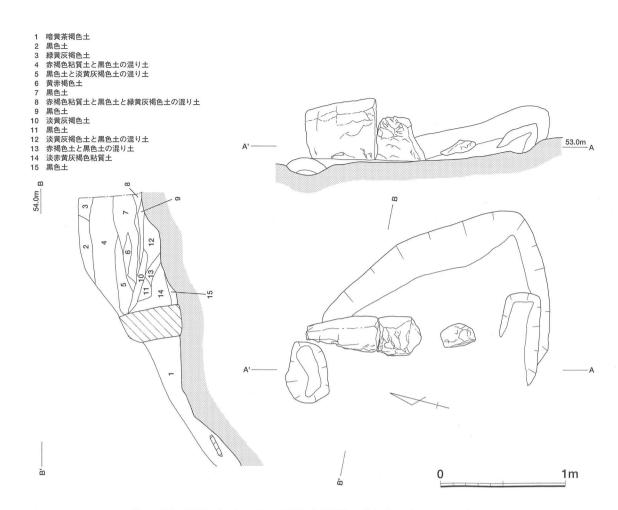
第25図 岩屋遺跡 I 区 3 号墳周辺出土横瓶実測図 (S=1/6)



第26図 岩屋遺跡 I 区 4 号墳墳丘測量図及び遺物出土状況 (S=1/100)



第27図 岩屋遺跡 I 区 4 号墳土層断面実測図 (S=1/60)



第28図 岩屋遺跡 I 区 4 号墳土層断面実測図 (S=1/30)

の後カキメを施し、内面はアテ具痕を丁寧にナデ消す。また、口縁部には段がつくがまるい。出雲 5期以降か。

5. 4号墳

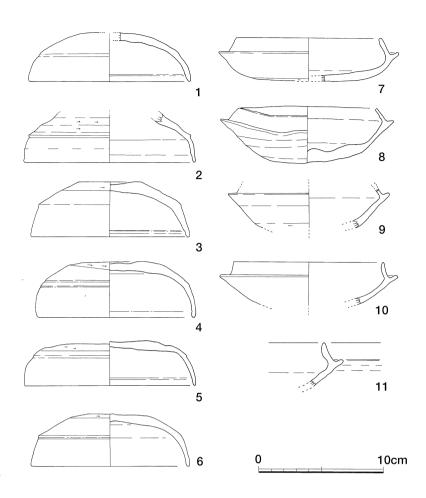
4号墳は2号墳・3号墳と同じ尾根上の、標高52m付近に築かれ、調査した古墳の中では最も低い位置にある。検出時、墳丘はすでに上部と西側が大きく削り取られ、破壊の激しい西側の斜面に、主体部のものと思われる石材が大量に流れ落ちていた。したがって、主体部もそのほとんどを失っている。主体部は切石積の横穴式石室か石棺直葬と推定されるが、後述するように横穴式石室の可能性が高いであろう。

墳丘(第26図・27図) 墳裾は東側で比較的明瞭に確認でき、それによると、現状では隅部がかなり丸みを帯びているが、一辺10mほどの方墳を想定できる。主体部は石室と石棺の両方の可能性が考えられるが、後述するように、石室の可能性が高い。第27図にしたがい、墳丘の築造過程を示すと以下のようになる。

- ①尾根の地山を削り、あるいは斜面に土を盛る(36~41層)などして、主体部を設置するための面を整地する。
- ②主体部の石材を据えるための堀り方を掘り込む。
- ③石材を据えて土を裏込めする(1-1-1-10層)。
- ④盛り土で押さえるように主体部を構築しながら、さらにその上に土を被せて墳丘を築く。

なお、墳丘断面は、2-1~ 2-10層、3-1~3-5層の 単位でそれぞれ、ほぼ水平の堆 積ラインが確認できる。これは 2号墳と同様で、1個前後の石 を積み上げてはその背後に土を 盛る行為が何度も重ねられていったと考えれば理解し易い。こ の点から、主体部は石室の可能 性が高いといえる。

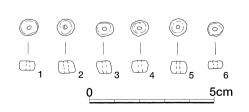
主体部(第28図) 主体部は 一直線の列をなす三片の石材を 遺してほぼ全壊の状態で、床面 の地山さえも削り取られてい た。遺存する石材はいずれも 「来待石」と呼ばれる明灰色の 凝灰質砂岩で(以下、来待石と 称する)、その厚さは最大25cm を測る。これを石棺の石材とす るには、やはり厚すぎよう。来 待石は玉湯町・宍道町周辺の古



第29図 岩屋遺跡 I 区 4 号墳出土須恵器実測図 (S=1/3)

墳で石棺や石室の石材などによく利用されている。一方、前述した西側に流れ落ちている石材の多くはそれとは異なる「白粉石」とも呼ばれる乳白色の石英安山岩質凝灰岩で(以下、白粉石と称する)、この辺りでも玉湯町玉造の玉造築山古墳、徳連場古墳の石棺に利用されている例などが知られている。しかし、石室への利用は確認されていないので、これらも石棺のものの可能性はある。ただし、旧表土と想定される第27図42層上面でこの石の破片が多く散乱していたことから、盛り土以前の段階で白粉石の加工は行われていたとみられ、主体部が石室であれば白粉石も使用されていたと理解せざるを得ない。なお、西側に流れ落ちている石材は、比較的大きなものもあったが、風雨にさらされ摩耗していたり砕けていて、それらを接合して使用状態を復元することはできなかった。

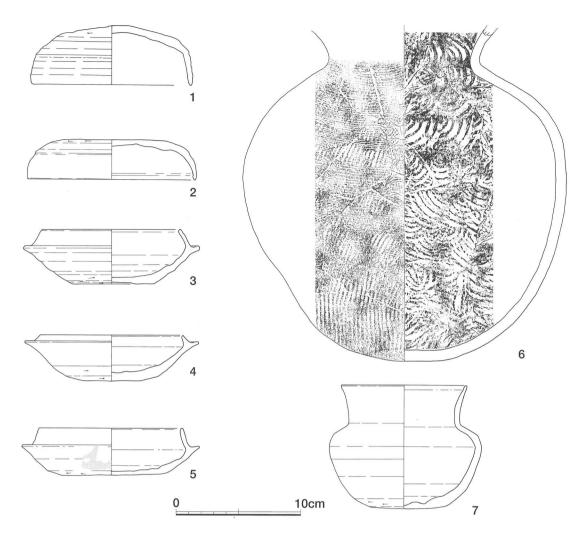
主体部に残された石材のうち、比較的残りの良い北側のものは、地山から50cmの高さで若干西側



第30図 岩屋遺跡 I 区 4 号墳出土 ガラス玉実測図 (S=2/3)

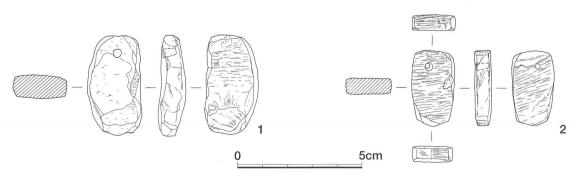
に傾斜しながら垂直に立ち上がる。調査前から上面が地上に露出していたらしく、一部摩滅していたが、切石であることは確認できる。

また、地山には遺存する石列を挟むように、その南北の端で石の圧痕が確認され、北側のものは来待石の剥離片が付着し、南側のものは白粉石の砕片が付着していた。その痕跡からみるに、それらの石は長辺が東西を指向し



第31図 岩屋遺跡 I 区SX01出土遺物実測図 (S=1/3)

ていたようである。主体部を切石積みの石室と考えると、開口部は南・北・西のいずれかとなるが、南は山側で水切りの溝がめぐるから、南側開口は可能性が低い。また、西側開口とすると、現存する石列は奥壁にあたり、その場合、石の圧痕は、南側が現存する石列をはさむようにその外側に位置するのに対し、北側は石列よりも石室内側に入り込んでいて、両者で奥壁との関係が異なることになる。したがって、石室を $N-14^\circ$ -Wの角度で北側に開口すると捉えて、北側の石の圧痕を袖石の痕跡、南側の石の圧痕を奥壁の痕跡とみるのが最も矛盾のない解釈であろう。この推測が正しいとすれば、石室の長さは1.3m程度のものが想定できる。



第32図 岩屋遺跡 I 区SX01出土玉類実測図 (S=2/3)

В В 4m

第33図 岩屋遺跡 I 区道路状遺構 実測図 (S=1/100)

床面は、地山をきれいに整地した水平面が奥壁から西へ40cm ほど残存していたが、さらにその西側は後世の攪乱で大きく削られ、落ち込んでいる。床への石床などの敷設物は確認できなかった。

遺物出土状況(第26図) 4号墳の遺物は破片となって墳丘上に散乱し、元位置を保っているものは一点もない。またその多くは、破壊された主体部の石材が散らばる墳丘西側中央部に集中している。さらに、墳丘北側の裾部には非常に浅く掘り込みをしたSX01があり、そこからもまとまって遺物が出土した。ただし、そこの遺物も土と混じって破片状にバラバラな状態で検出され、すでに割れた土器などを集めて、かるく土をかぶせたような状態であった。したがって、4号墳にかかわる何らかの祭祀を窺わせるものではなく、おそらく古墳の破壊によって落ちた遺物を集めて浅く埋めたものではなかろうか。

出土須恵器(第29図・31図) SX01のものも含め、4号墳からは須恵器の蓋坏・直口壺・甕などが出土している。

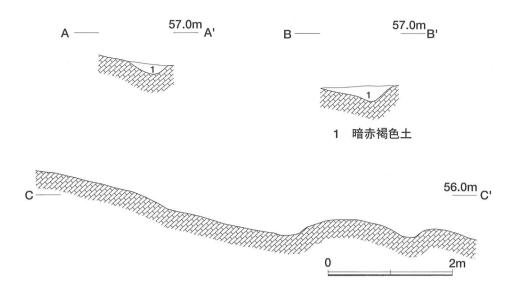
坏蓋は、いずれも肩部稜線を沈線を利用して作り出し、口縁端部をまるく仕上げる。内面は口縁端部上方に沈線を入れ、大谷編年の β 類に該当する。また、天井部はやや削り残しがあるものもあるが、基本的には丁寧に回転へラ削りを施している。ただし、口径は12.5cm ~13 cmのものと(第29図 $-1\sim4\cdot6$ 、第31図-1)、13.5cm以上のものがあり(第29図-5、第31図-2)、口径の大きいものは器高が3.5cm前後と低く扁平である。また、口径の小さい方のもので、口縁端部がやや内湾するものがある(第29図-4)。

坏身は受部径が13cmの8のと(第29図-7・9・10、第31図-3・5)、13.5cm程度の8のがあり(第29図-8、第31図-4)、受部径の小さい方の口縁部が受部から1.2cm前後の高さでやや内傾して立ち上がるのに対し、受部の大きい方は口縁部が受部から0.5~0.9cmの高さで大きく内傾して立ち上がる。

第31図-6の甕は口縁部を欠き、頸部最小径で12cm、胴部最大径で26cm、現高26cmを測る。胴部は平行タタキの後カキメを施し、内面には同心円のアテ具痕が残る。

第31図-7の直口壺は口径10cm、器高10cmで、内面から外面にかけて回転ナデ、底部外面に回転へラ削りを施す。また、口縁端部内側に沈線を1条まわす。

遺物の時期は、坏蓋を参考にすれば大谷編年の出雲4期に該 当する。



第34図 岩屋遺跡 I 区道路状遺構土層断面実測図 (S=1/60)

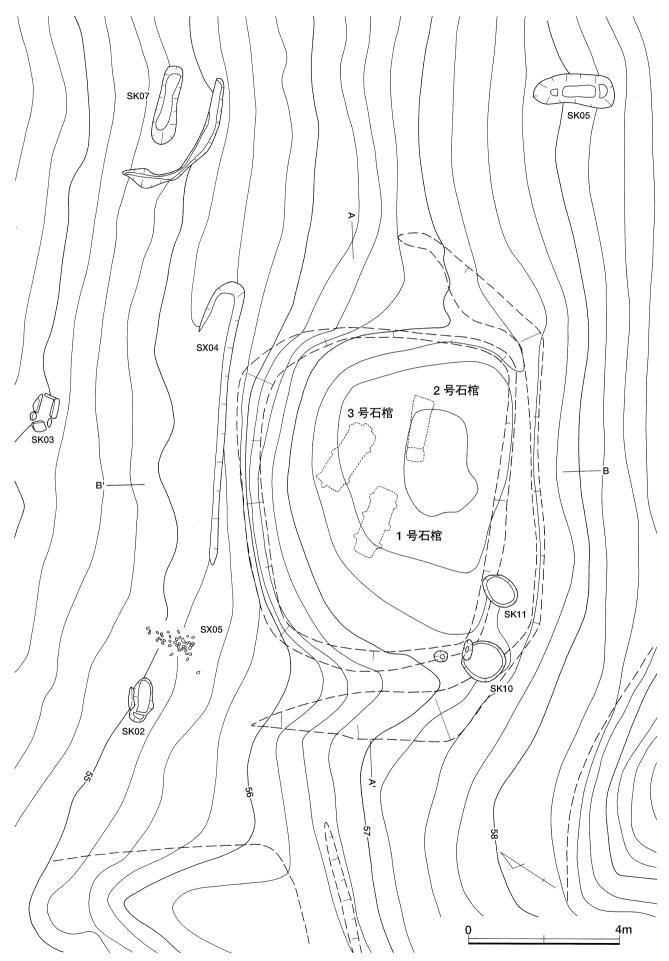
出土玉類(第30図・32図) 4号墳からはガラスの小玉と、碧玉製の種別不明の玉未成品が出土 した。ガラスの小玉(第30図)はいずれも4号墳西側中央部の石室前面崩落土からの出土で、最大 径は6㎜前後、濃い青色をしている。

碧玉製の種別不明の玉未成品 2 点はSX01から出土している(第32図)。 1 は縦 4 cm、横1.5cm、厚さ 1 cmの長方形の板状を呈すが、長辺の片側だけが外側にふくらみ、玉の中央部分の最大幅は 2 cm を計る。一方、反対側の長辺はほぼ直線で、全体に粗ミガキがなされているが、そこだけはミガキが入らない。また、玉上部の穿孔は貫通していない。勾玉の未成品であろうか。 2 も厚さ0.5cmの長方形の板状の玉だが、縦は 3 cm、横は穿孔のある上端部が1.6cm、下端部が1.2cmと、やや台形状である。穿孔は貫通し、全体に粗いミガキがなされている。また、上端面や両側面はやや丸みを帯びたミガキがなされているのに対し、下端面は僅かに三角形状の面取りをしたミガキを行う。他に玉作とかかわる遺物・遺構は確認できず、また 4 号墳に副葬されていた須恵器とともに出土していることから、これらも未成品ながら 4 号墳の副葬品であった可能性が高い。

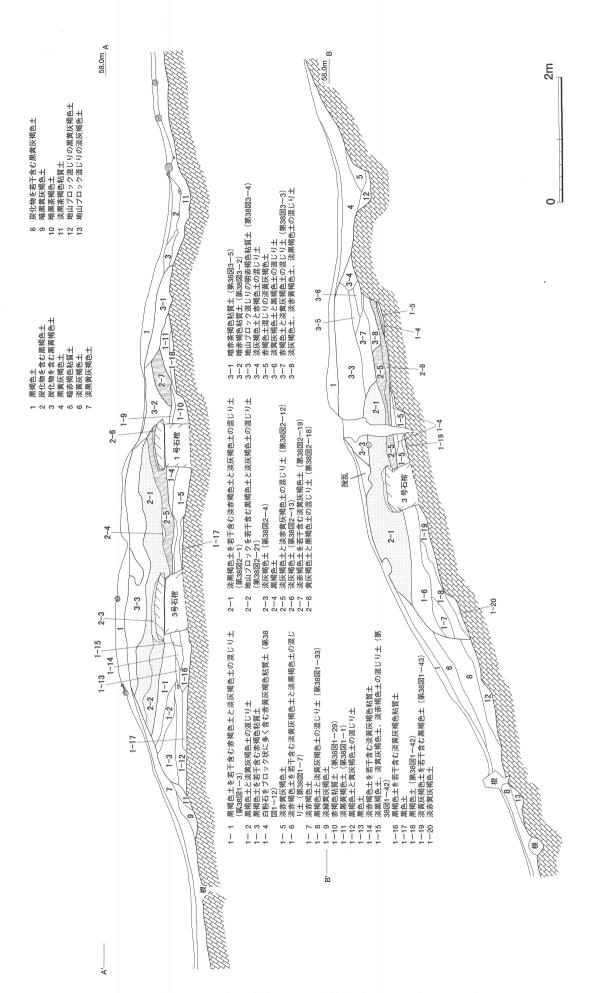
6. **道路状遺構** (第5図·33図·34図)

調査 I 区西側で、2号墳・3号墳・4号墳が展開する尾根に平行してその西側を南東一北西方向にのびる、溝状に掘りこまれた道路状遺構を検出した。その全長は約32.5mにもおよび、それら古墳の墳丘西側を貫いている。4号墳土層断面を示した第27図でも、17層を溝状に切る16層と、それをさらに溝状に切って堆積する14層・15層が確認できるが、少なくとも14層・15層はこの道路状遺構の堆積土だから、4号墳西側ではこれが何度か掘り直されながら維持されていた様子が窺われる。したがって、この道路状遺構が2号墳・3号墳・4号墳を破壊する最初の契機となっていたかどうかはわからないが、少なくとも一定期間の使用を前提とした掘り直しによって、古墳破壊とも関連がありそうである。

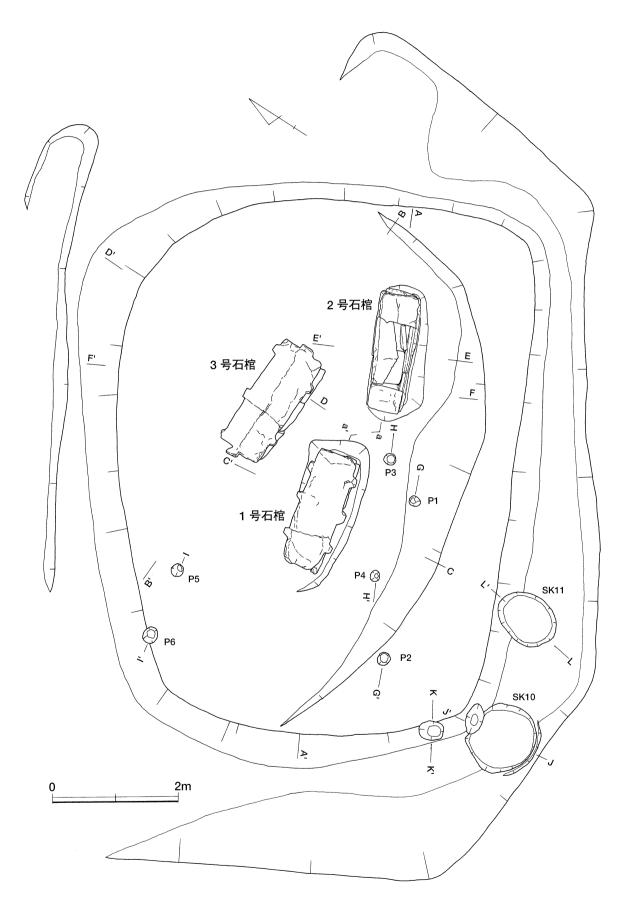
遺存する道路状遺構は、掘り込み上面が0.5m以下から2.7m程度、深さは0.2m前後で底面にむかい腕状に狭まる、浅く細長い溝状となっている。また斜面のきついところでは、一部ステップ状になっていた。遺物は含まれず、いつから使用され始めたか明確でないが、それに平行してすぐ西側の重機道に設定したルートは、最近まで谷と谷を結ぶ峠越えの道として利用されていたらしく、ルー



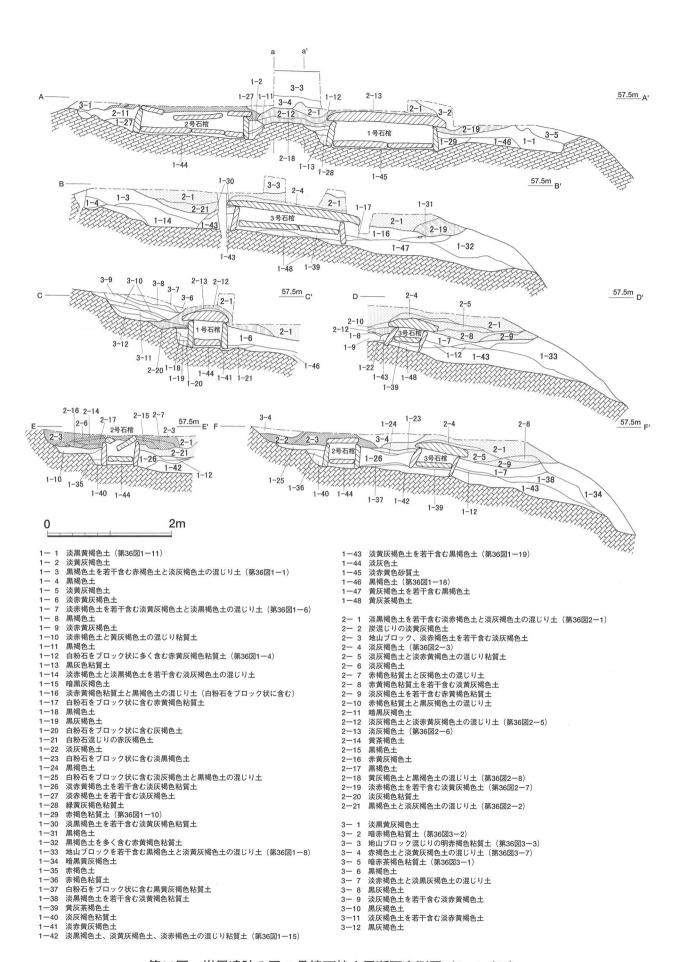
第35図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘測量図 (S=1/100)



第36図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳墳丘測量図 (S=1/60)



第37図 岩屋遺跡 I 区 S 号墳石棺検出状況実測図〔墳丘盛土除去後〕(S=1/60)



第38図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺土層断面実測図 (S=1/60)

トをやや変えながら長い期間利用されていたことが想定される。

7. 5号墳

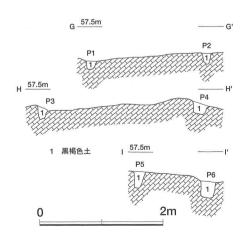
2号墳の北側、3号墳の東側に近接して5号墳が展開する。その築かれた地点の標高も57m前後と、2号墳と3号墳の間の高さを持つ。ただし、2号墳から4号墳までがのる尾根のラインからは東へ外れる。墳丘南側では墳裾を切る直径1m前後の円形の土抗SK10・SK11が検出されたが、多くの炭と焼土が含まれており(第40図)、比較的新しい時期の炭窯であろう。それ以外は、盗掘や破壊を受けた様子もほとんどなく、残存状況は良好で、3つの石棺が直葬されていた。ここでは、3つの石棺のうち、西よりのものを1号石棺、東よりのものを2号石棺、北よりのものを3号石棺と呼称することにする。

墳丘 (第35図~40図) 墳形は隅部が僅かに丸みを帯びた方墳で、一辺が9.2m×7.2mと東西方向にやや長い。また、長辺は等高線に対し平行を保ち、墳丘の築成が地形に規制されていたことがわかる。検出時の墳丘の高さは、山側の墳裾から0.6m、谷側の墳裾からは2.2mを測る。

調査時、墳丘上に設けた十字のトレンチによって、主体部が石棺を直葬したものであることは確認していた(第36図)。しかし、トレンチに1号石棺と3号石棺が掛かったものの、この狭い範囲にもう一つの石棺が埋納されていることは全く想定外のことであった。2号石棺は墳丘盛り土を除去しながら面的に下げていく作業を続けているうち、作業員の一人が蓋の一部を踏み抜いて始めてその存在に気づいたものである。そのため、3つの石棺の先後関係をあらためて確認する土層断面は盛土を石棺蓋付近まで下げた段階で設けざるを得なかった(第38図)。それでも、これらの土層断面の観察の結果から、墳丘が以下のような手順で築造されたとの結論を得ることはできた。

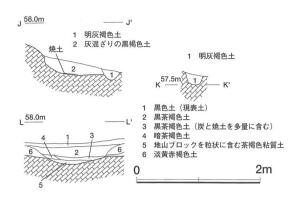
- ①山側に古墳の周溝となる溝を掘るなどして、墳丘をのせるための方形の地山を削り出す。
- ②削り出した方形の地山内側を、山側はさらに削り窪め、谷側には土を盛り(第36図 $1-7\cdot8\cdot$ 19層、第38図 $1-38\cdot39\cdot42\cdot43\cdot47$ 層)、平坦な面をつくる。
- ③石棺を据えるため、整地した面をさらに掘り窪め、そこに石棺の身となる石材をたてて裏込めを し、あるいは平坦面にそのまま石材をたてて裏込めを施した後、さらに上から土を被せるなどして、 石棺の身を固定する。
- ④蓋のされた 1 号石棺の上に、それを覆うように土を被せる(第36図 2 5 \sim 8 層、第38図 2 12・13・18・19・20層)。
- ⑤蓋のされた 2 号石棺にも同様に土を被せる(第38 図 $2-2\cdot 3\cdot 6\cdot 7\cdot 14\cdot 15\cdot 16\cdot 17\cdot 20$ 層)。
- ⑥最後に、蓋のされた 3 号石棺の上にも土を被せ (第36図 $2-1\sim3$ 層、第38図 $2-1\cdot4\cdot5\cdot21$ 層)、さらに 3 つの石棺を覆うように土を盛って、 墳丘を完成させる。

以上のように、当古墳は墳丘の基礎となる部分を築き、石棺の身を据えた後、1号石棺・2号石棺・3号石棺の順に蓋の上に土が被せられて築成されていったことがわかる。各石棺の蓋を覆う盛り土については、第36図、第38図の土層にそれぞれ異なるス



第39図 岩屋遺跡 I 区 5 号ピット土層断面 実測図 (S=1/60)

クリントーンを掛けてその関係を示しておいた。 それによると、特に1号石棺と2号石棺は、蓋の上に被せられた土がそれぞれの石棺のみを覆うような状態で、いわば個々の石棺を覆う「小墳丘」の如き様相を呈している。それに対し、3号石棺の上の盛り土は、蓋を覆うことが意識されながらも、その土は1号石棺や2号石棺の「小墳丘」上にも大きく被さる。「小墳丘」を棺の最終埋葬が終了した後、蓋を閉めた際に施されたものと捉えるならば、これらは1号石棺から順に埋葬が終了し



第40図 岩屋遺跡 I 区SK10・11土層断面実 測図 (S=1/60)

「小墳丘」を築いてきて、最後の 3 号石棺に至ると蓋を閉めた後、墳丘を一気に築き上げようとした状況を示すと解釈できよう。なお、墳丘は後に 1 号石棺側が若干掘り返された形跡があるが(第 $36 \boxtimes 3-2$ 層)、盗掘につながるものではなく、これがいつの段階の何の目的によるものかは不明である。

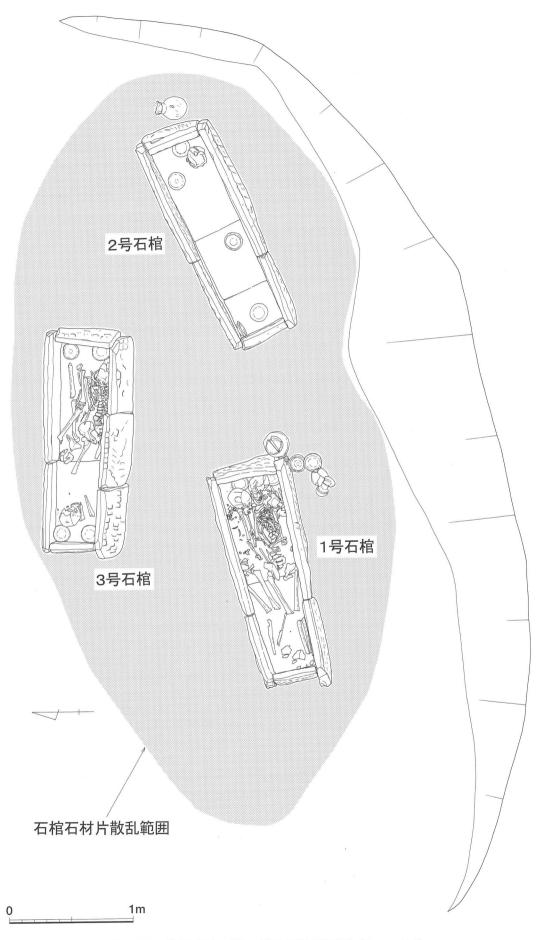
一方、石棺の身の設置についての先後関係は、精査にもかかわらず、それを土層によって明確に示すことができなかった。ただし、3つの石棺の長辺はいずれも東西方向を指向しながら、それらの身がほぼ同時に据えられたと理解できるほど軸が平行に揃っていない。けれども、1号石棺の蓋を覆うために被せられた土が、2号・3号石棺の身を固定する裏込めの土の上に被さっているように(第36図 2-5 層、第38図 $2-12\cdot18\cdot19$ 層)、少なくとも最初に1号石棺用の「小墳丘」が築かれる以前に、他の2つの石棺の身もすでに墳丘上に据えられていたと考えられる。したがって、少なくとも、この3つの石棺の身が墳丘上に全て揃った当初は、土の被せられた石棺は無かったようである。石棺の「小墳丘」を最終埋葬とかかわらせて理解するならば、最終埋葬の終了した棺は無いのに、3つの棺の身だけはすでに墳丘上に準備されていたということになろう。

石棺検出状況(第37図・41図) 3つの石棺のうち1号石棺は墳丘のほぼ中央部に設置され、他の2つはそれよりも東側に置かれている。三者はいずれも相互に $0.7\sim0.8$ m程度しか離されていない。先述のように石棺の身の長軸はどれも東西方向を意識しているが、1号石棺はW-13°-S、2号石棺はW-24°-S、3号石棺はW-3°-Nと、その軸はそれぞれで若干異なっている。

また、1号・2号石棺は地山を掘り窪めた堅い地盤の上に設置されたのに対し、3号石棺は、盛り土で整地された地盤の弱い面の上に置かれたため、検出時すでに石棺が自らの重みと土圧で沈み込み、北側に傾いている状態であった。

なお、石棺の周辺には石棺の設置とかかわると思われる様々な作業痕跡も残されていた。すなわち、石棺を覆う盛り土を除去した段階で墳丘上に浅く小規模なピット6つが出現したが(第37図・39図)、これらの検出面は先の墳丘築成手順の②③段階とかかわるものである。ピットは上屋の存在を示すような規則的配列を持たず、その性格は判然としないが、1号石棺・2号石棺の白粉石製の蓋は厚みのある一枚作りで、非常に重く、調査時にも三脚状に組んだ角材に滑車を取り付けてこれを除去したほどであったから、蓋を被せる時の何らかの工夫の痕跡の可能性が想定される。

さらに、第36図 1-4 層、第38図 $1-12\cdot 1-17\cdot 1-37$ 層において、石棺の石材として使用されている乳白色の石英安山岩質凝灰岩(白粉石)の破片を多く含む層も検出された。これは石棺の



第41図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺配置図(S=1/30)

身の石材がここで調整加工されていたことを示すと考えられる。またそれより高い第38図 1-23・25層においても、同様の状況が認められたが、これはその位置からみて石棺蓋の調整加工時のものと考えてよいだろう。墳丘除去後、それらは $1\cdot 2\cdot 3$ 号石棺を楕円状に包み込む、面的散乱となっていたことが確認された(第41図)。

石棺の身は3つとも数枚の板状切石で小口を挟む同様の構造を持つ。しかし、蓋については、形や石材に統一性がみられない。また石棺内にはいずれも人骨が残されており、これらは全て鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝氏の立ち会い・指導のもと、取り上げ作業を行った。出土遺物も含めた各石棺の詳細については、以下でそれぞれ説明を加えることにする。

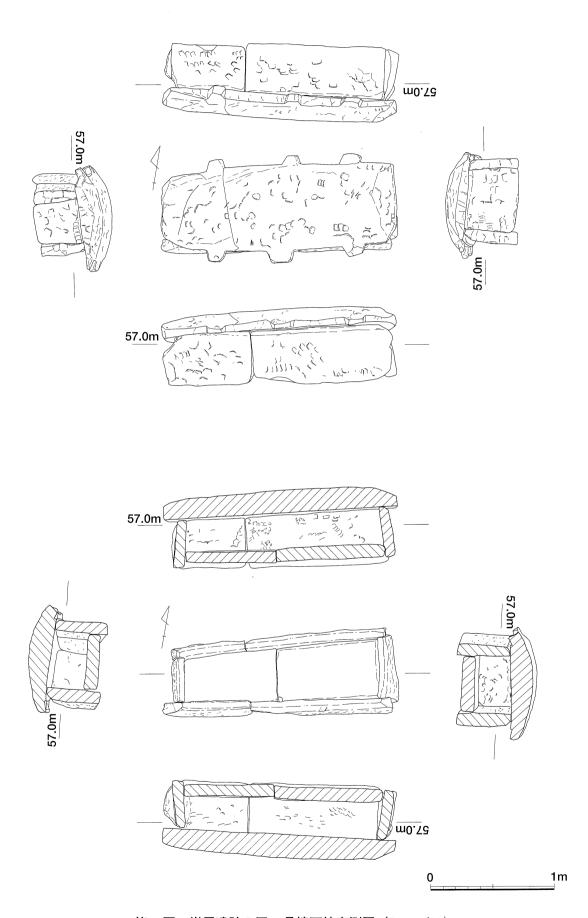
1号石棺(第42図・43図) 棺身の側石・小口の石材は石英安山岩質凝灰岩(白粉石)で、厚さ10cm以内の板状切石を用いる。側石は北側・南側それぞれ2枚の板石を使い、東西の小口を挟み込む。外面・内面ともに不定方向の平刃のノミ痕を残すが、外面の調整は粗い。また、側石・小口とも上端部外面は内側に入り込むように面取りされて蓋石に接す。下端部内面は床石上面に接する部分が稜線上に僅かに削り出され、床石と接する部分はやや削り取られるなど床石にと密着するような工夫がなされていたようだ。なお、片面2枚で構成される側石は、両側面とも東よりのものがやや長めの板石を使用している。長さ1.62mを測る石棺の床は、厚さ10cmの2枚の白粉石で構成され、床の幅は東辺が0.5m、西辺が0.34mと、その差26cmで、頭部の方がかなり幅広い。外側からみた棺身の高さは0.4~0.45mを測り、棺身内面では床面までが0.3mの深さを持つ。棺身の長軸方向はWー13°-Sを向ける。

蓋石は、長さが1.92mで、厚さは中央部で18cm、端部で10cmの、扁平だがやや丸みを帯びた白粉石の切石1枚を使用する。両側面にそれぞれ3つずつ方形の縄掛突起を持つが、それを除いた棺蓋の幅は、西辺が0.44m、東辺が0.64m、中央部が0.7mと、やや胴ぶくれ気味である。また、西辺隅部は丸みを帯び、東辺外面は両隅部を半円状の稜線が結ぶように面取りが施されている。ただしそれらは、平刃のノミで粗く調整した比較的粗雑なものである。なお、ノミ痕は東側から西側に刃を向けて打たれたものが多いが、この部分だけそれとは逆の方向に刃を向ける。

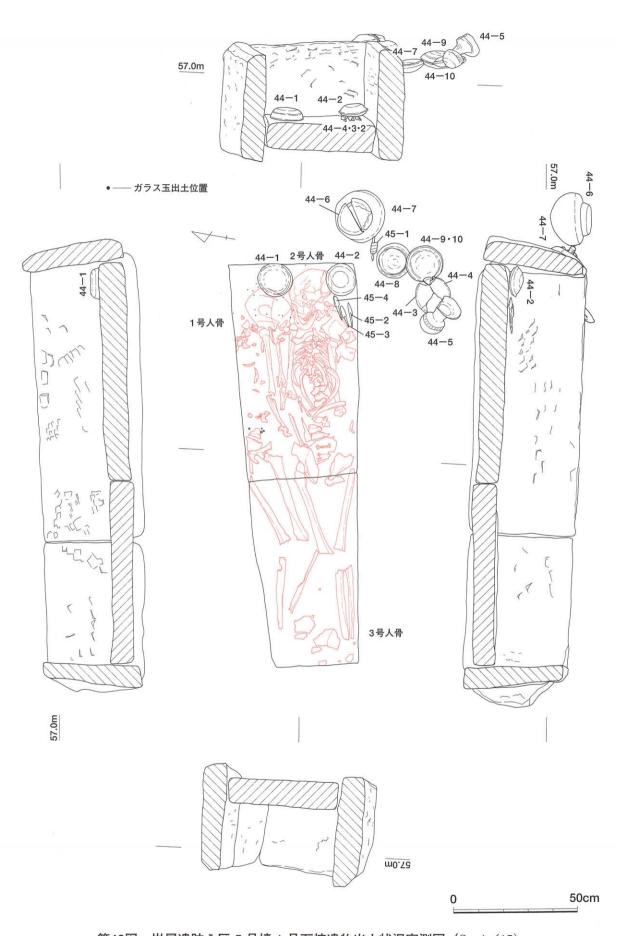
このように横断面が蒲鉾形で平面形も胴ぶくれ気味に丸みを帯びた棺蓋の形態だけ見れば、玉湯町玉造の徳連場古墳、玉造築山古墳などに代表される舟形石棺系のものと類似するともいえるが、蓋内面に刳り抜きが無く、蓋と身の合わせ部に印籠口式を用いていないなど、異なる点は少なくない。

1号石棺遺物出土状況(第43図) 出土遺物は石棺内と石棺外からのものに分けられる。まず、石棺内からは人骨3体と須恵器の蓋坏の蓋・身がそれぞれ1点、鉄鏃3点、多数の玉類などが検出された。人骨の遺存状態は良好で、南側には壮年中期(30歳前後)の男性骨1体(2号人骨)が、北側には壮年中期(30歳前後)の女性骨1体(1号人骨)が、いずれも頭を東に向けて並び、その足もとには6歳前後の子供の頭蓋骨とその歯の一部などが残されていた(3号人骨)。なお、同じく子供の左上肢骨と歯は女性骨の左上肢骨部からも検出され、小児骨が移動していることが窺われる。1号人骨は顔を2号人骨に向けて横向きとなり、2号人骨は腰から上は俯せ、その下は仰向けの状態であった。

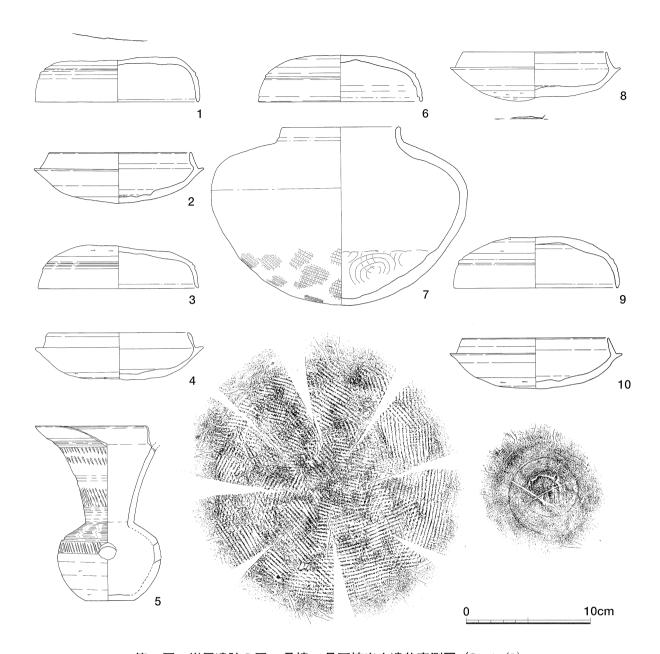
1号人骨の女性には玉類による装飾がなされていたようで、その頭部には頭部装飾とかかわると 思われる小粒のガラス制小玉計23点が散乱し、右手首付近からはガラス制小玉3点(46-24~26)



第42図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳石棺実測図 (S=1/30)



第43図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺遺物出土状況実測図(S=1/15)



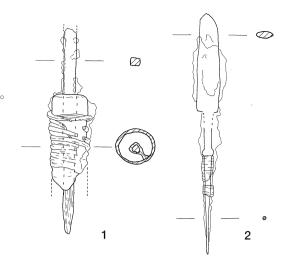
第44図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺出土遺物実測図(S=1/3)

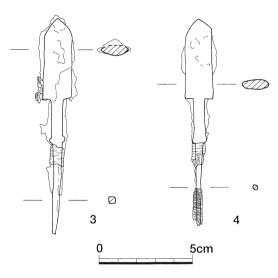
と瑪瑙製の玉 1点(46-25)が検出されている。また、2 号人骨の男性の方からは、その頭部左側に鉄鏃 3点が並べ置かれたような状態で出土した($45-2\sim4$)。棺内の須恵器は、坏蓋が 1 号人骨頭部上方に小口に接するように(44-1)、坏身が 2 号人骨頭部左側の棺南東隅に(44-2)、それぞれ伏せた状態で出土し、これらは枕として使用されたものであろう。

 からのものと推察される。

なお、これら棺外の遺物は、先述の墳丘上で石棺蓋を調整加工した際に生じたと考えられる石棺石材片の散乱する層の上面から検出されている(第41図)。すなわち、これらは石棺の蓋が身の上に置かれた後に副葬されていた可能性が高い。しかし、これら遺物の上には第36図2-5層(第38図では2-12層)と同様の土が被さり、また棺蓋の下に潜り込むように置かれた遺物もあった。こうしたことから、棺が蓋で閉じらた後に棺外に副葬品が置かれ、次に「小墳丘」が築かれたという手順が復元可能である。

1号石棺出土須恵器(第44図) $1 \cdot 3 \cdot 6 \cdot 9$ は坏蓋である。口径は13cm ~ 13.3 cmo間で、器高は9 が4.1cmとなる以外は、3.6cm前後と扁平なものである。肩部の稜線は2条の沈線で挟み作り出し、天井部は浅いが丁寧に回転へラ削りを施す。また、口縁端部は内面上方を僅かに肥厚させて沈線を入れるが明瞭な段とはならず、大谷編年の β 類に近いとみられる。また、1の天井部には横一線の浅いへラ記号がある。 $2 \cdot 4 \cdot 8 \cdot 10$ は坏身である。口径は11.5cm前後、最大径は $13.7\sim 14$ cmで、受部径は13cmだが4のみ12.5cmとやや小さい。受部から口縁端部までは $1.2\sim 1.3$ cmの高さで内傾しながら立ち上がる。底部は浅いが丁寧に回転へラ削りを施す。また、8の底部には先の細い工具による横2条の線書きが、10の底部には





第45図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺 出土鉄器実測図(No.1は棺外) (S=1/2)

「×」印のヘラ書きがなされている。なお、坏身4は坏蓋3と坏身10は坏蓋9とそれぞれセットで出土し、坏身2も坏蓋1とセットであろう。坏身8は、短頸壺7の蓋として利用されていた坏蓋6と、色調や口径・受部径も一致し、セット関係を持つ可能性が高い。

短頸壷7は、口径4.8cm、器高14.3cm、胴部最大径は20.7cmを測る。底面から4.4cmの高さまでは外面に平行タタキ、内面に同心円状のアテ具痕を残すが、その上部は別作りで、内外面とも回転ナデを施す。

5は聴で、先述のように口縁部が一部が欠けるのは、意図的なものと推察される。口径は推定で11.3cm、器高14cm、胴部最大径は8.4cmを測る。底部は回転へラ削りを施した平底で、頸部は逆「八」の字に大きく広がり、口縁部付近には沈線により作り出された突帯を持つ。また、口縁端部内面には沈線で段をつける。体部の2条の沈線で区画した中と頸部には刺突文をまわし、頸部中位には3条の沈線も施す。胴部上方から頸部下方にかけてはカキメが施されている。大谷編年のA4型に該当する。

以上の出土須恵器の時期は、いずれも大谷編年の出雲4期に入る時期のものとみられる。

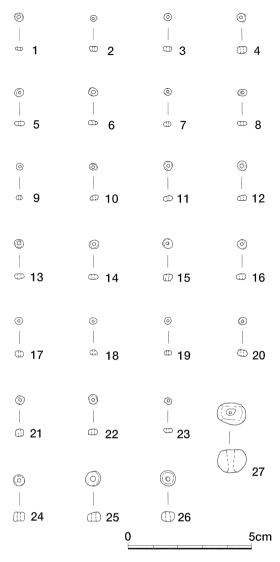
1号石棺出土鉄器(第46図) 1は太い糸状の線を巻いた柄を持つ鉄製棒状工具である。6m×4mの長方形の断面を持つ鉄製の棒は下方で細くなり、柄の木質が付着する。上方は欠損しており、工具先端の形状などは不明である。

2~4は鉄鏃である。いずれも鏃身は柳葉形で直 角の鏃身関である。また刃の片側がややまるみを 帯び、矢柄には樹皮を巻く。関は2・3が棘状関、 4が棘状に突出せず直角関である。

1号石棺出土玉類(第45図) $1 \sim 26$ はガラス製の小玉で、直径 $3 \sim 4$ mmで透明度の高い明るい水色の小さなものと($1 \sim 23$)、直径 $5 \sim 6$ mmの藍色のものがある。前者は女性人骨の(1号人骨)頭部に散乱していたもので、頭部装飾とかかわるもの、後者は女性人骨の右上肢骨左側から出土しているので腕に巻かれていたものか。

27は瑪瑙製玉で、これも女性人骨の右上肢骨左側から出土している。丸玉状だが玉の両側面を平たく整形し、扁平なものである。穿穴時に出口側の孔周囲を欠いている。

2号石棺(第47図・48図) 2号石棺は箱式石棺であるが、身は1号石棺のものと類似する。すなわち、厚さ10cm以内の乳白色の石英安山岩質凝灰岩(白粉石)の板状切石を用い、それぞれ2枚で構成される両側石が、東西の小口を挟み込む構

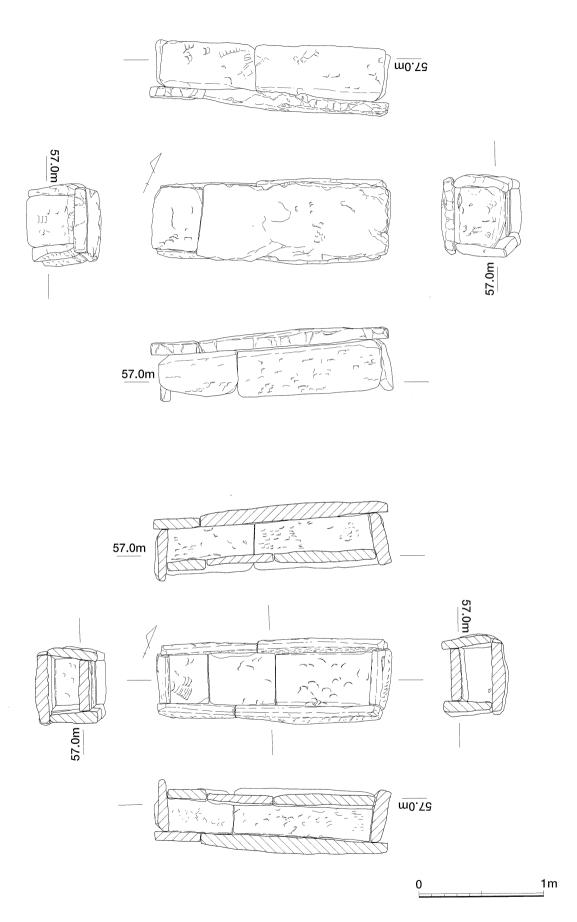


第46図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 1 号石棺内出土 玉類実測図 (S=2/3)

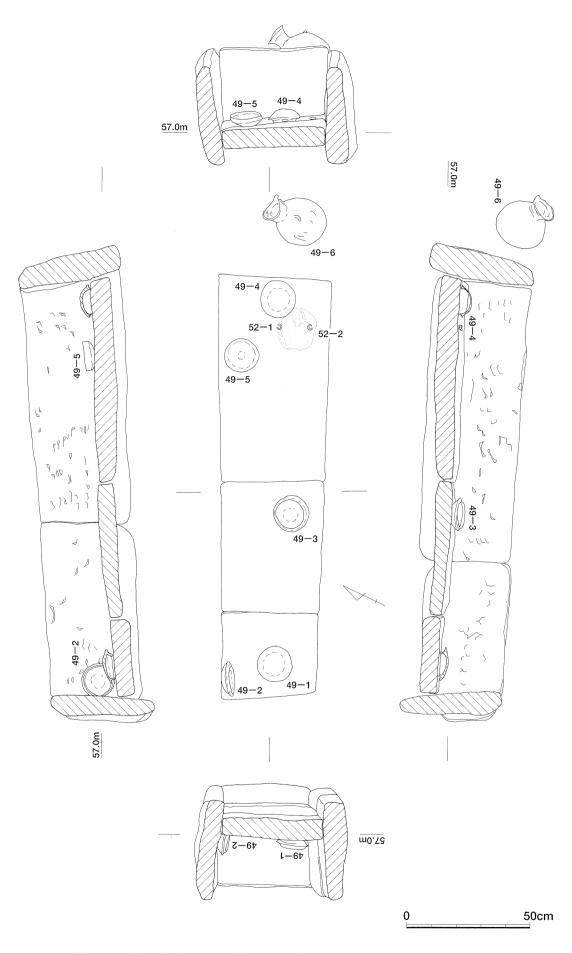
造を持つ。各 2 枚の両側壁は、いずれも東よりのものの方に長めの板石を使用していることや、側石・小口とも上端部外面を内側に入り込むように面取りし、下端部内面に床石と密着するような僅かな削り加工を施している部分が見受けられることも、1号石棺とほぼ同様である。内・外面ともに平刃のノミ痕を残すが、内面に比べれば外面の調整の方が粗い。長さ1.7mを測る石棺の床は、厚さ10cm以内の 3 枚の白粉石の板石が使用され、その幅は東辺が0.45m、西辺が0.4mと、やはり頭部の方がやや幅広ながら、その差は 5 cm程度にとどまり、1号石棺ほどの大きな比率差もない。外側からみた棺身の高さは $0.4\sim0.42$ mを測り、棺身内面では床面までが0.25mの深さを持つ。棺身の長軸方向はW-24° -Sを向ける。

蓋石は、長さ0.4m、幅0.5m、厚さ8cmの白粉石の板状切石と、長さ1.52m、幅0.6m、厚さ10~12cmの来待石(凝灰質砂岩)の板状切石2枚を使用し、全長で1.92mを測る。蓋石として使用された大小二枚の板石は、小さいものが西側(足下側)、大きいものが東側(頭部側)の位置で置かれていた。いずれも平刃のノミ痕が残るが、両板石の接合部分以外は、調整が粗雑である。

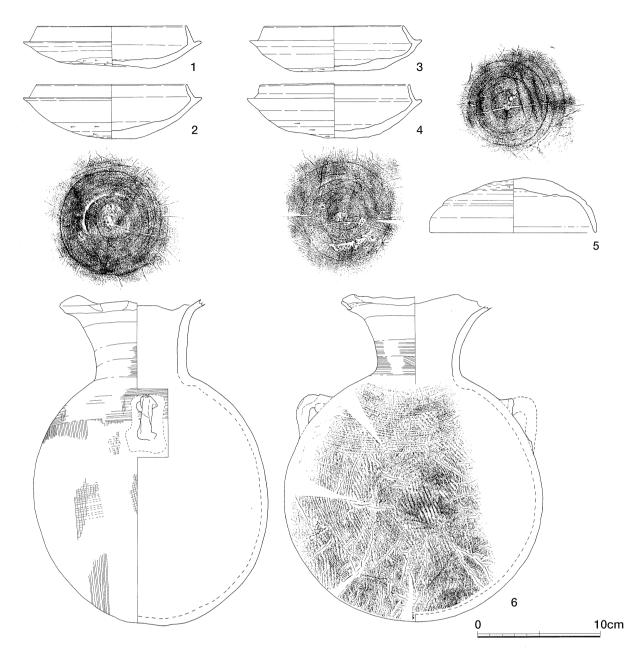
2号石棺遺物出土状況(第48図) 2号石棺も、出土遺物は石棺内と石棺外からのものに分けら



第47図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺実測図(S=1/30)



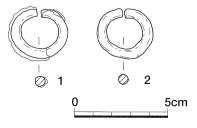
第48図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺遺物出土状況実測図(S=1/15)



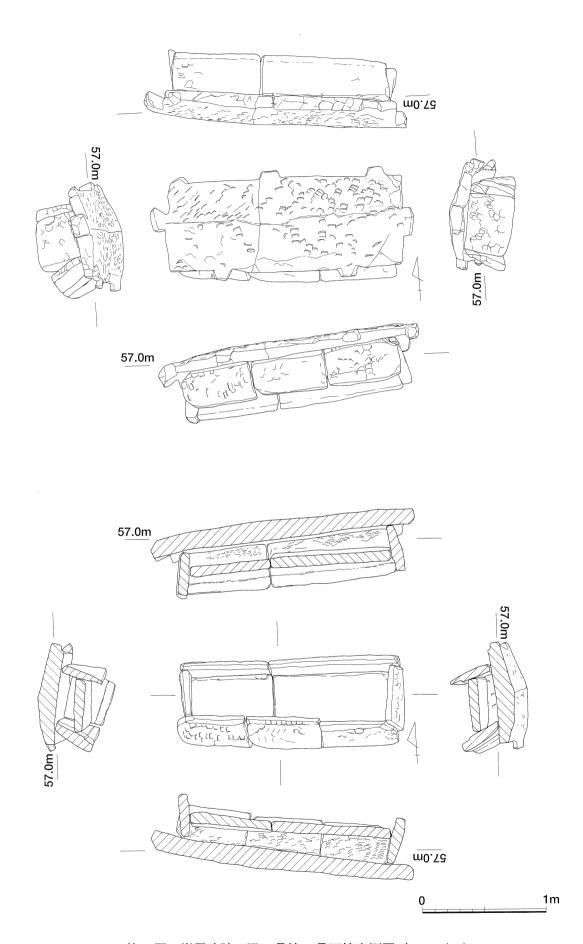
第49図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺出土遺物実測図 (S=1/3)

れる。まず、石棺内からは人骨 1 体と須恵器の蓋坏の蓋が 1 点、身が 4 点、耳環 2 点が出土した。 人骨は頭部上半部のみが遺存しており、30代と推定される女性骨である。また、頭蓋骨両側面下からそれぞれ耳環 1 個が頭蓋骨に付着した状態で検出され($50-1\cdot2$)、耳環をしたまま埋葬され

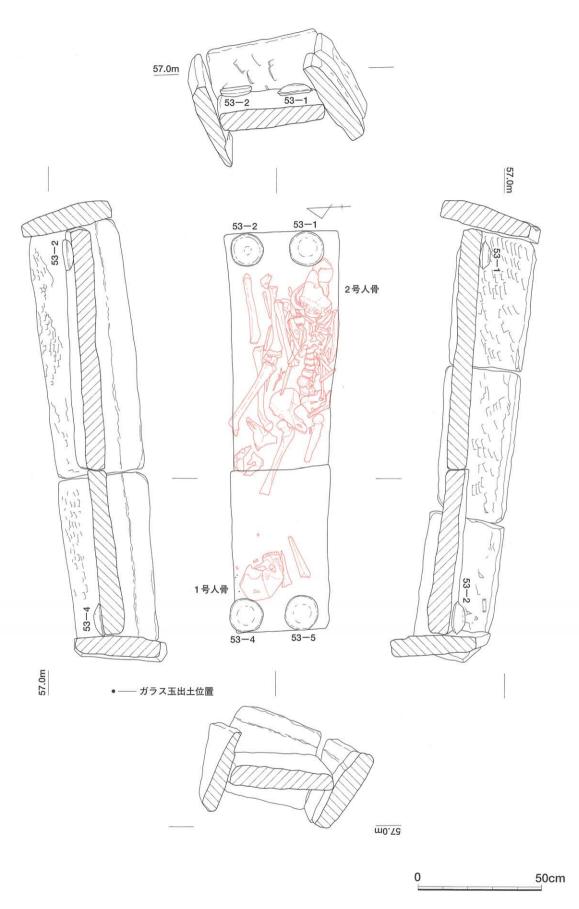
ていた様子が窺われる。棺内の須恵器は、坏身が棺の中軸線上の頭部側・足下側それぞれに、伏せた状態で出土し($49-1\cdot 4$)、さらに足下北側の側石にも坏身が受部を棺内側に向けて立てかけられていた(49-2)。また、腰付近やや南側石寄りには坏身が(49-3)、右肩にあたる付近には坏蓋が(49-5)、いずれも受部や口縁部を上に向けた状態で出土している。ただし、この $49-3\cdot 5$ に



第50図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 2 号石棺 出土耳環実測図 (S=1/2)



第51図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺実測図 (S=1/30)

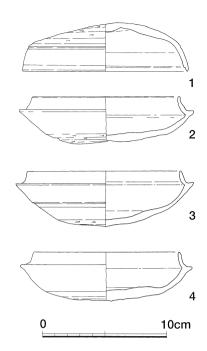


第52図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺遺物出土状況実測図 (S=1/15)

ついては埋葬時と同位置を保っているか疑わしい。49-4を枕と考えると、遺体は棺の中央に埋葬されていたと理解すべきで、そこからずれた頭蓋骨の現出土位置は、後に枕から南側へずり落ちた結果と思われる。したがって、49-3・5を埋葬当時の須恵器の位置として採用すると、坏蓋や坏身が口縁部や受部を上向きにして、右肩や左腰の下側に潜り込ませてあったことになるが、こうしたことを想定するのは不自然である。むしろ、これらの須恵器は遺体の上に置かれていたか、あるいは49-2のように側石に立てかけてあったものが、後にずり落ちたと考えたほうがよいだろう。

棺外では、東側小口付近南寄りから須恵器の堤瓶1点が出土した(49-6)。その出土位置や高さは1号石棺のものと類似し、棺外副葬品の埋葬方法については、1号石棺と同様の手順が想定できよう。

2号石棺出土須恵器(第49図) 1~4 は坏身である。口径は **第53図** 3 だけが11.3cmとやや小さめで、他は12.1~12.2cmだが、それ以外 はいずれも最大径が14.1~14.5cmの間、受部径が13~13.5cmの間



第53図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺出土遺物実測図 (S=1/3)

に収まる。受部から口縁端部までは1.1~1.4cmの高さで内傾しながら立ち上がる。底部は比較的丁 寧に回転へラ削りを施している。また、2と4の底部外面には横一本線のヘラ記号が認められる。

5 は坏蓋で、口径13.6cm、器高4.3cmを測る。天井部は丁寧に回転へラ削りを施し、横一線のヘラ記号を付す。肩部の稜線は沈線1条で表現し、口縁端部内面は浅い沈線を入れるのみである。

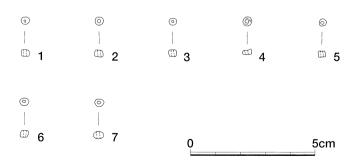
6 は堤瓶で、口径11.5cm、器高28.1cmを測る。口縁部は意図的に打ち欠いたようである。腹面は タタキ整形後カキメを回し、頸部を接合後、さらに頸部下方から胴部上方にかけて横にカキメを回 す。口縁端部は二重口縁状で、把手は環状である。大谷編年のB1型に該当する。

以上の遺物の時期は、回転ヘラケズリがやや丁寧ではあるが、大谷編年の出雲 4 期に併行する時期とみるべきだろう。

2号石棺出土耳環(第50図) $1\cdot 2$ は銅芯鍍金製の耳環で、長径 $3\,\mathrm{cm}$ 、短径 $2.5\,\mathrm{cm}$ 、厚さ直径 $5\,\mathrm{cm}$ とほぼ同じ大きさである。頭蓋骨の両側面にそれぞれ付着していたことから、対をなすものと考えられる。

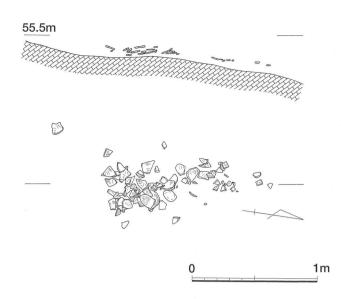
3号石棺(第51図・52図) 身は1号石棺・2号石棺とほぼ同様の構造を持つ。北側石に2枚、

南側石に3枚の厚さ10cm以内の乳白 色の石英安山岩質凝灰岩(白粉石) の板状切石を用い、東西の小口を挟 み込む。側石・小口とも上端部外面 は内側に入り込むように面取され、 下端部内面の床石側面と接する面は、 帯状に削り取られた段状を呈す。た だし、小口や側石はその重みと盛り



第54図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳 3 号石棺出土ガラス玉実測図 (S=1/3)

土の土圧で墳丘内に大きく沈み込み、床石だけが浮いたような状態で検出された。また、内・外面ともに平刃のノミ痕を残すが、内面のものはその痕跡が明瞭に残り、刃の方向は下端部側を向いているものが多い。外面のノミ痕は不定方向で粗い。やはり外面調整の方が比較的粗雑である。床石は厚さ10cm以内の白粉石の板状切石2枚を使用し、その全長は1.64mを測る。床面の幅は東辺が0.48m、西辺が0.38mと10cm程度東辺の幅が広い。外側からみた棺身の高さは0.35~0.37mを測り、棺身内面の床面までの深さは、側面や小口の床石と接する部分

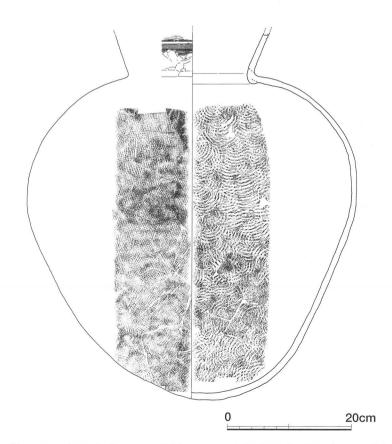


第55図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳SX05遺物出土状況 実測図 (S=1/30)

の加工痕から推定するに、0.23m程度であったと考えられる。棺身の長軸方向はW-3°-Nである。 蓋石は家形を呈し、長さ2.16m(縄掛突起部分を除くと1.92m)、幅0.86m(縄掛突起部分を除くと0.74m)の白粉石の切石1枚を使用している。上面は平刃のノミによって棟の稜線1本を残し、軒部平側に向かって傾斜するように削られている。ノミ痕の刃はほとんどが軒部平側の北側を向き、そちらを下にして横に立てかけるようにして削られたことも想像されるが、その調整は粗雑である。また、蓋石の厚さは棟付近で16cm、軒部平側付近で10cm程度と、扁平なものである。軒部には方形の縄掛突起が、妻側に各1個、

平側に北側3個、南側2個の、計7個設けられている。また、 内面に刳り抜きのような加工 は加えられず平面形を呈す。

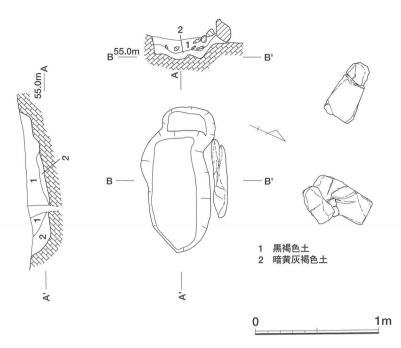
3号石棺遺物出土状況(第 52図) 遺物は石棺内から、 人骨2体、須恵器の坏蓋1点、 坏身3点、小粒のガラスの小 玉7点が出土した。しかし、1 号石棺や2号石棺のような棺 外副葬品の存在は認められな かった。人骨は、頭位を東側 に向ける壮年中期(30才)の 女性骨(2号人骨)が棺の南 寄りに、また西側に向ける10 代後半の女性骨(1号人骨) が棺の北寄りにあって、後者 のものには、頭部付近にガラ



第56図 岩屋遺跡 I 区 5 号墳SX05出土須恵器実測図 (S=1/6)

スの小玉の散乱が認められた。また、それぞれの頭部付近には枕に使用したと思われる須恵器の坏身が伏せられた状態で出土しているが、足下にも、2号人骨の方に坏身が伏せられた状態で、1号人骨に坏蓋が口縁部を上に向けた状態で、それぞれ出土している。

3号石棺出土須恵器(第53図) 坏蓋1は口径13.2cm、器高3.9cmで、 天井部には回転へラ削りを施す が、脂肪と思われる茶褐色の付着 物が厚く、十分観察することがで きない。肩部稜線は沈線1条で表 現する。口縁端部はまるく、口縁



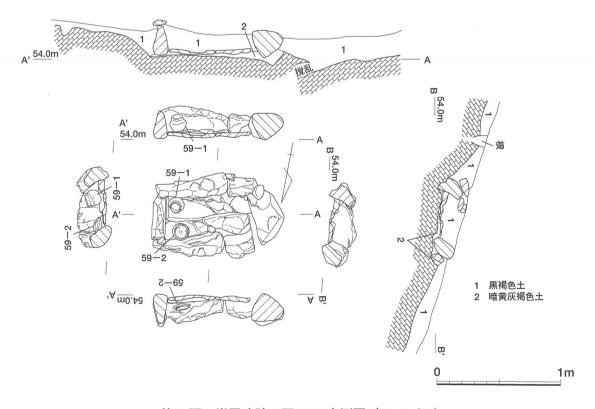
第57図 岩屋遺跡 I 区SK02実測図 (S=1/30)

端部内面に非常に浅く沈線を入れている。

 $2 \sim 4$ の坏身は口径が $11.7 \sim 12.4$ cm、最大径 $14 \sim 14.3$ cm、受部径 $13 \sim 13.4$ cmを測る。底部は丁寧な回転へラ削りを施し、受部から口縁端部までは $1 \sim 1.2$ cmの高さで内傾しながら立ち上がる。

遺物の時期は坏蓋が大谷編年のA4型に該当し、出雲4期に該当する。

3号石棺出土玉類(第54図) 1~7はいずれもガラス製の小玉で、直径3~4 mm、高さ2~3

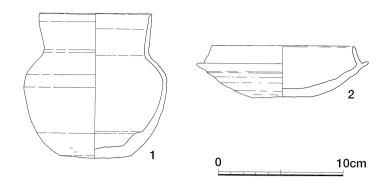


第58図 岩屋遺跡 I 区SK03実測図 (S=1/30)

mmの非常に小粒なものである。透明度の高い明るい水色をし、1号人骨の頭部付近に散乱していたことから、頭部装飾とかかわるものであろう。

8. SX04 (第35図)

5号墳の北西の墳裾付近から、墳裾のラインに平行するように設けられた加工段状の遺構SX04が検出された。遺構は地山を15cmほど掘



第59図 岩屋遺跡 I 区SK03出土遺物実測図 (S=1/3)

り削って、幅1m程度の平坦面を削り出したようなもので、土層の堆積からは(第36図B-B´12層)、5号墳築成時と大きく時期が異なるような状況は想定し難い。したがって、SX04は5号墳にともなって設けられた加工段で、古墳祭祀などで何らかの役割を果たしたものであろうか。

9. SX05 (第35図・55図)

5号墳の東側下方に、須恵器の瓶片が集中的に散乱する地点があった。それらを接合すると一個体分となる。地山には明瞭な加工痕は認められないが、ここだけ斜面がやや平坦になっている。したがって、ここが先のSX04に連なるものである可能性もあろう。また、瓶の破片はさらにその下方にも流れ落ちていたが、その分布はまばらで、この瓶はSX05地点に置かれていたか、あるいはそこで破壊されたと考えられる。その性格は不明だが、ここの平坦部がSX04に連なるものなら5号墳と関連するとみるのが妥当であろう。しかし、後述する土壙墓SK02にも比較的近い位置にあることから、それとの関連を否定することもできない。

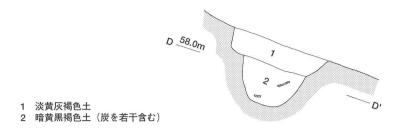
出土須恵器甕(第56図) 土器の接合によって復元される須恵器の瓶は、口縁部を除いてほぼ完形で、現高59cm、胴部最大径48.3cmを測る。頸部に波状文とカキメを施し、胴部の外面には併行タタキ、内面には同心円状のアテ具痕を残す。

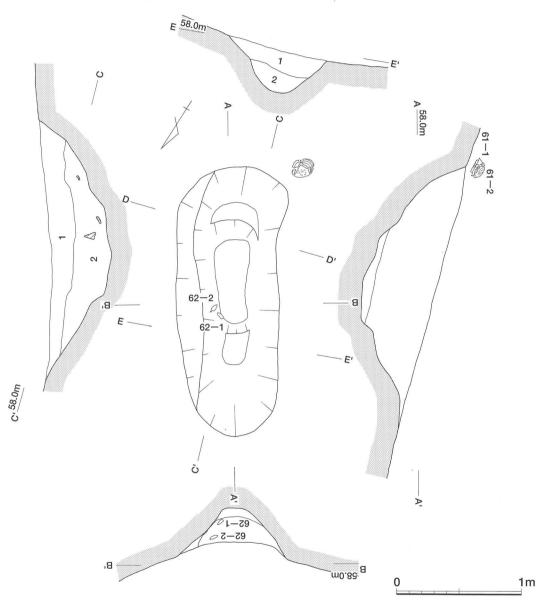
10. SK02 (第35図·57図)

SK02は5号墳と3号墳の間の標高55m付近に位置する土壙である。検出時の土壙の深さは0.18m 以下と極めて浅く、土壙内には表土と同じ黒褐色土が流入していた。また、その周囲には乳白色の石英安山岩質凝灰岩(白粉石)の板状石材が散乱し、土壙内にもその破片が一部入り込んでいた。後述するように、ここから北東方向に7mほど離れた地点には、SK03があるが、ここでは同じ石材を用いた石棺が据えられており、その規模もSK02に近い。したがって、SK02にも本来石棺が設置されていたのが、後に地表に露出して崩壊したと推察される。

土壙の平面は不整形の楕円状を呈し、長径ラインの方向はW-24°-Sを向く。また、残された上面の長径は1.18m、短径は0.5mを測る。底面は、長軸線上北東部から0.3m以内の幅で0.9mの長さの平坦部が続くが、南西部に至り10cmほど高くなって、再び幅0.3m、長さ0.14mの平坦部が取り付く二段状を呈す。SK02に設置されていたと考えられる石棺をSK03と同様のものと仮定するならば、一段高い平坦部は、石棺の小口を構成する比較的大きめの石が置かれた跡と理解することも可能であろう。この場合、石棺の床の長さは0.9m以下となる。

なお、土壙内からは遺物は検出されなかったが、前述の遺構の類似性からSK03と時期が大きく



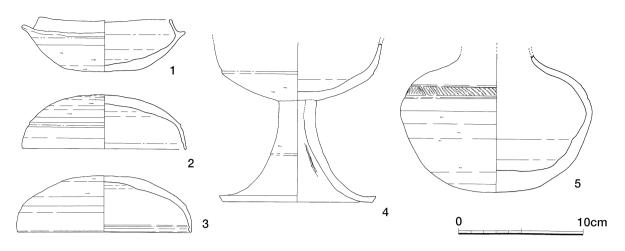


第60図 岩屋遺跡 I 区SK05実測図 (S=1/30)

異ならないと考えられ出雲4期とみられる。なお、付近に周溝などの痕跡も確認できない。

11. SK03 (第35図·58図)

SK03は5号墳の墳裾からは4.7mほど谷側に離れた、標高54m付近に位置する。地山を土壙状に掘り下げ、暗黄灰褐色土を敷いて底面を水平にし、その上に長軸方向をW-11°-Sに向けて石棺を据える。ただし、石棺の蓋はなく、棺身の内外にも表土となる黒褐色土が堆積していた。したがって、石棺はすでに長期間地表に露出し、その周囲もかなり流れ落ちたり、削られたりしていると想定さ



第61図 岩屋遺跡 I 区SK05出土須恵器実測図 (S=1/3)

れる。溝や盛り土などの痕跡なども確認できない。

全長1.06mを測る石棺の身は、厚さ10cm前後の板状割石の石英安山岩質凝灰岩(白粉石)を使用して、各2枚の側石で東の小口石を挟み込むが、西側の小口部分だけは比較的大きな花崗岩の自然石で塞いでいる。また、床面には白粉石の厚さ2~3cmと比較的薄い板状割石を敷き、その長さは0.68m、幅は東辺で0.4m、西辺で0.3mを測る。棺が露出していたため、白粉石の石材に関しては崩壊した部分も少なくないと考えるが、西側の小口用石材として用いられた花崗岩は比較的硬質で、その様態は大きく変化していないと想定される。これを基準とすれば、棺身の高さは0.2m、内側の床面までの深さは0.14mほどとなる。

棺内の東小口付近には、須恵器の坏身と小型の広口壺が、それぞれ両側石に接するように左右に並び、受部、口縁部を上に向けて出土した。

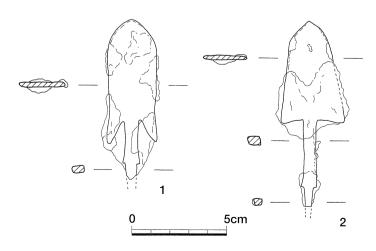
出土須恵器(第59図) 1は直口壺で口径8.9cm、器高10.7cmを測る。底部には回転へラ削りを施し、平底である。肩部のはりや頸部の広がりはゆるやかで、口縁部は直立する。坏身2は口径11.3cm、最大径13.8cm、受部径12.9cmを測る。受部から口縁端部までは内傾しながら1.3cmの高さで立ち上がる。底部は回転へラ削りを施すが、削り残した浅く雑なものである。

これらの遺物の時期は、直口壺1が島田池遺跡2期のものに該当し、それらは出雲4期に相当すること、坏身2の底部の回転へ

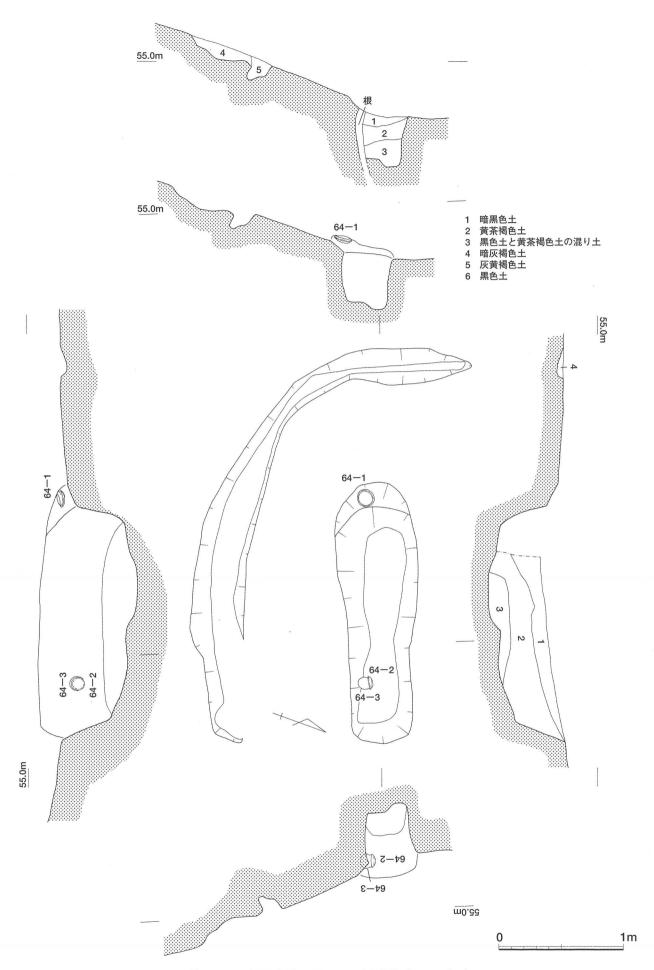
ラ削りが雑なことなどから、出雲 4 期に入るものと考えられる。

12. SK05 (第35図・60図)

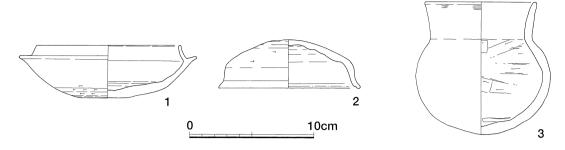
SK05は5号墳墳裾から約6m東に離れた、標高58m付近に位置する土壙墓である。平面は不整形の楕円状を呈し、長径のラインがN-33°-Wと、等高線とほぼ直行する。また、墓壙自体も、底面が斜面の傾斜に沿うよ



第62図 岩屋遺跡 I 区SK05出土鉄器実測図 (S=1/2)



第63図 岩屋遺跡 I 区SK07実測図(S=1/30)



第64図 岩屋遺跡 I 区SK07出土遺物実測図 (S=1/3)

うに13°ほど傾いている。

墓壙は上段上面の長径が2.2m、短径は1.3mで、上段上面から底面までの深さは0.5m前後である。また、上面と底面の間には平坦部が設けられた二段堀りとなっている。下段底面の長さは0.67mで、幅0.3mは山側が0.28m、谷側が0.2mと、山側の方がやや幅広である。中段の平坦部も、山側が0.38mあるのに対し谷側は0.2mほどで、同様の傾向を示す。土層から棺の痕跡を確認することはできなかったが、前述のSK01を参考にすれば、下段底面部分に棺が設けられた可能性が高いであろう。

遺物は須恵器と鉄器が出土している。須恵器は墓壙上面山側から坏蓋が上(62-2)、坏身が下 (62-1) の位置で重なり、いずれも伏せた状態で出土している。また、第1層と第2層の間付近 からは坏蓋・高坏・壺などが出土した。鉄器は墓壙北東部寄りから鏃2点が出土しているが、その 高さは中段平坦部付近のものとと、第1層・第2層の間付近のもので、それぞれ異なっている。

出土須恵器(第61図) 坏蓋 2 は口径14cm、器高4.5cmで、焼成はやや不良、坏蓋 3 は13.3cmで焼成は良好である。いずれも肩部稜線を沈線 1 条で作り出し、天井部は丁寧な回転へラ削りを施す。口縁端部内面には沈線 1 条がめぐるが、 2 のものはその上位をやや肥厚させ、段状を意識している。

坏身 1 はやや焼きゆがみがあり、口径10.6cm、最大径13.1cmで、受部径は12cmを測る。底部は丁寧な回転へラ削りで、受部から口縁端部まで1cmの高さで立ち上がる。坏蓋2とセットで出土しながら、受部径が小さいのは焼き歪みが影響している。

高坏4は焼成不良で表面の劣化が激しく、調整などは十分観察できない。坏部中央に沈線を利用した稜線を表現し、脚部中央にも沈線が1条がめぐる。脚端部は逆「八」字状に拡がる面を持つ。脚スカシはない。

5 は口縁部を欠くが、短頸壺であろう。胴部最大径は15.3cmを測り、底部から胴部中央にかけて 回転へう削りを施す。その上には、沈線2条で区画された部分に刺突文をめぐらしている。

遺物の時期は坏蓋を参考にすれば、大谷編年の出雲4期と併行する時期のものとみられる。

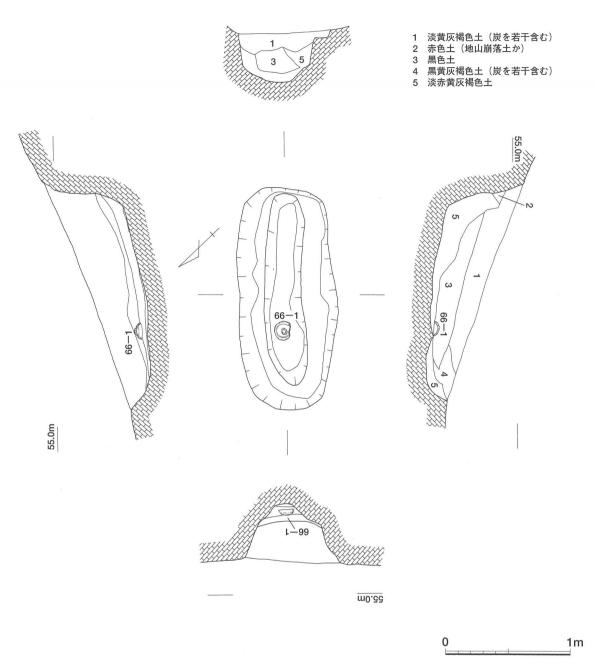
出土鉄器(第62図) 1・2ともに平根式鉄鏃で、棘状に突出せず直角関を持つ。鏃身は1が柳葉形で逆刺を持ち、2が直三角形である。

13. SK07 (第35図・63図)

SK07は5号墳の北側の標高55m付近に位置する土壙墓である。平面は不整形の楕円状を呈し、長径ラインの方向はW-20°-Nと、等高線に対して水平に近い。また、今回調査した土壙墓のなかでは、非常に浅いものであるが、唯一、墓壙の山側に周溝の存在を確認できた。

墓壙は基本的に、地山を細長く垂直状に掘り込んだ一段堀りだが、西側の周縁部だけが浅く削ら





第65図 岩屋遺跡 I 区SK08実測図 (S=1/30)

れていて、そこからは須恵器の坏身が受部を上に向けた状態で出土している。その部分を除くと、 上面の長径は1.9m、短径は0.6m前後、底面の長径は1.56m、短径は0.3m前後を測る。また、底面の 平坦面の調整は凸凹がある粗雑なもので、上面から底面までの深さは0.6m前後ある。

土層は、第3層が水平に堆積するものの西側で途切れ、その上を覆う2層も西側に傾斜して堆積する。ただし、調査初期段階で調査区斜面の土砂堆積状況を観察するために設けた長いベルトにSK07が掛かったため、墓壙西側の堆積土を失い、その詳細は不明となった。棺の設置状況なども確認できなった。なお、墓壙南東寄りの、底面よりも30㎝近く浮いた地点からは須恵器の蓋を持つ土師器の小型広口壺が横になって出土したが、これはちょうど第1層と第2層の間付近に位置する。

出土土器 (第64図) 須恵器の坏身1は口径12.6cm、最大径14.3cm、受部径13cmで、受部から口

縁端部までは1.1cmの高さで立ち上がる。底部は丁寧に回転へラ削りを施すが浅い。大谷編年出雲4期に併行するものであろうか。

1 0 10cm 2

第66図 岩屋遺跡 I 区SK08出土遺物実測図 (S=1/3)

2は3の土師器の直口壺用の須恵器の蓋で、口径11.35

cm、器高3.9cmを測る。口縁端部は大きく外反し、その内側は沈線を用いて段状に仕上げられている。天井部は丁寧な回転へラ削りを施す。

土師器の直口壺3は口径8.8cm、器高10.7cmと小型である。頸部はわずかに広がり、胴部はまるい。 頸部外面にカキメの痕跡が認められる。また、内外面の表面には朱が残り、朱塗りの土器であった ことがわかる。

以上の出土遺物から時期を判断し難いが、受部の立ち上がりは低く、他の古墳との関係からみて も出雲4期とみてよいであろう。

14. SK08 (第5図·63図)

SK08はSK07から北東方向に 6 mほど離れた標高55m付近に位置する土壙墓である。平面は長方形を意識したような楕円状を呈し、墓壙は中段に平坦部がまわる二段堀りとなっている。しかし、この段堀りは平面上で図示しうるものの、極めて浅いもので、SK01やSK05ほど明瞭なものではない。一方、長径ラインはW-43°-Nを向き、等高線とほぼ直行し、底面も斜面の傾斜に沿うように7° ほど傾いているなど、SK05と類似した側面もみせる。

上段上面の長径は1.8m、短径は0.8mで、上段上面から底面までは最も深いところで0.6mほどである。遺物は須恵器のみで、墓壙内に堆積した第1層内からは坏蓋1点が出土し、墓壙床面の若干浮いた位置から脚部を欠いた高坏1点も伏せた状態で出土している(66-1)。

土層は、第5層に包まれて船底状に堆積した第3層の上に第1層がのったような状態で、第3層を木棺などの痕跡と解釈することも可能であろう。とすれば高坏は第5層上面、第3層底部にあたる位置から出土しているから、棺内に副葬されていたものということになる。ただし、3層底面のレヴェルは南東部で急に高くなっているから、この部分はさらに分層されるべきかもしれないが、明確なラインを確認するには至らなかった。

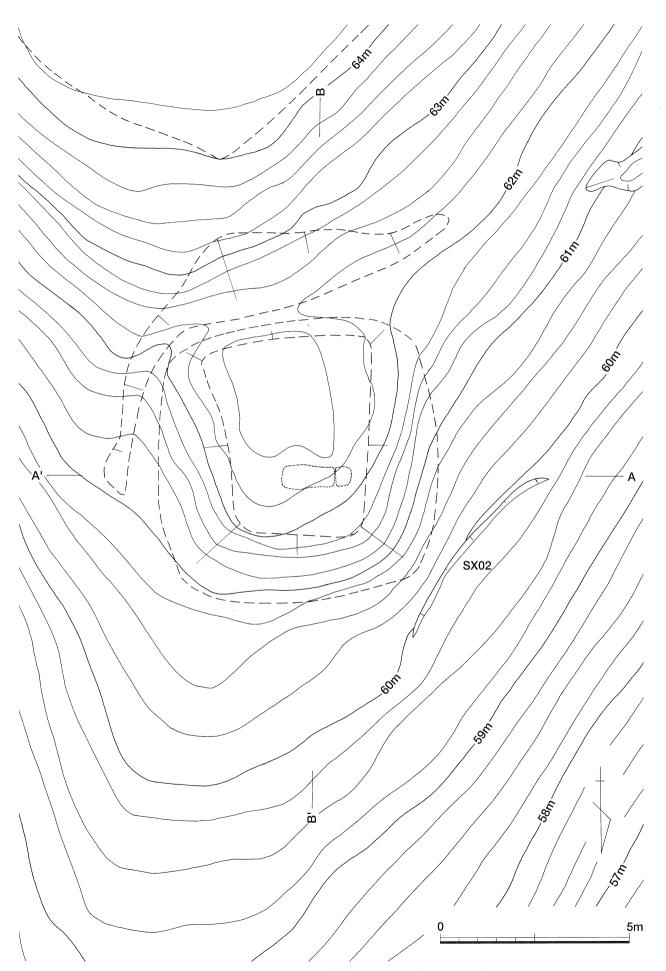
出土須恵器(第66図) 1 は高坏で、脚部は失われているが 2 方にスカシを持つ。焼きが悪く表面が劣化して、調整などはほとんどわからない。坏部の口縁端部が大きく外反し、口径は<math>15.1 cmを測る。

坏蓋2は天井部を欠くが口径は13.7cmと推定され、沈線2条によって肩部稜線を作り出す。口縁端部内面には沈線が入る。出雲4期に属するものだろう。

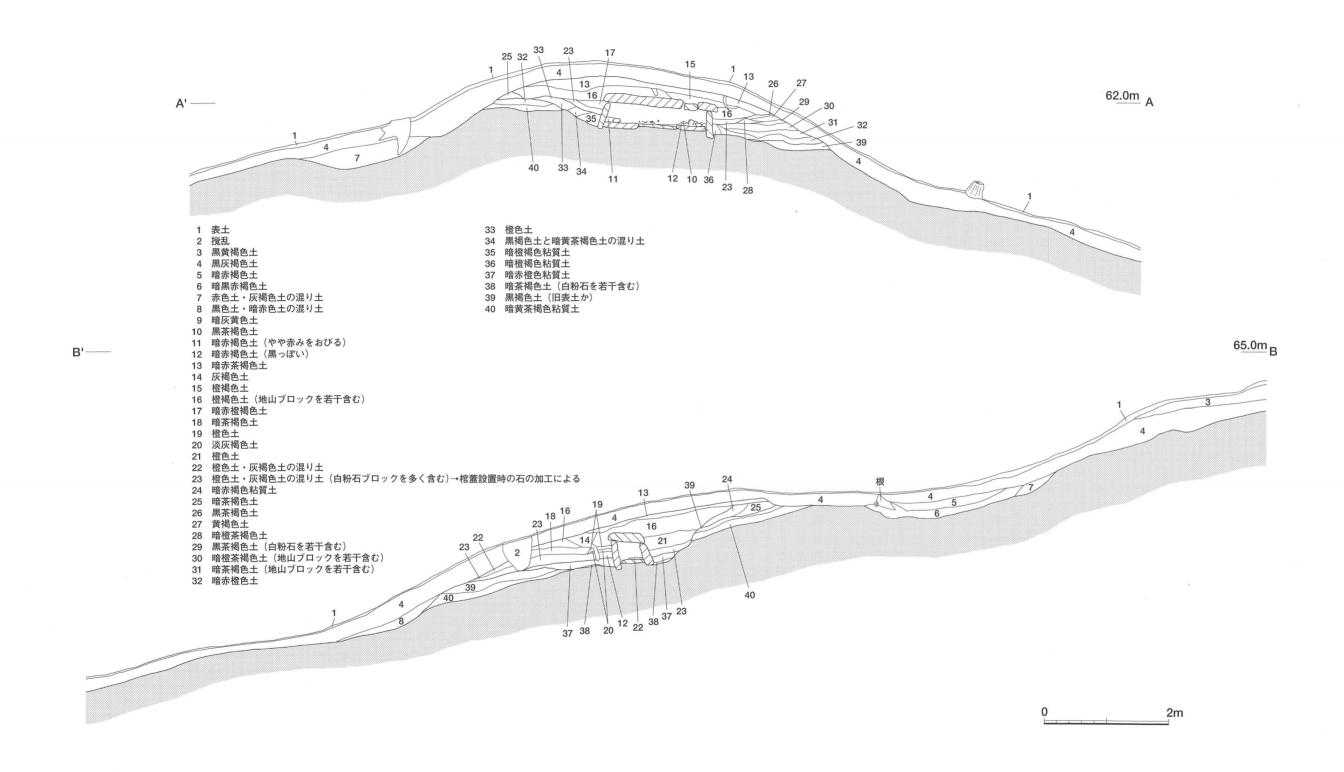
15. 6号墳

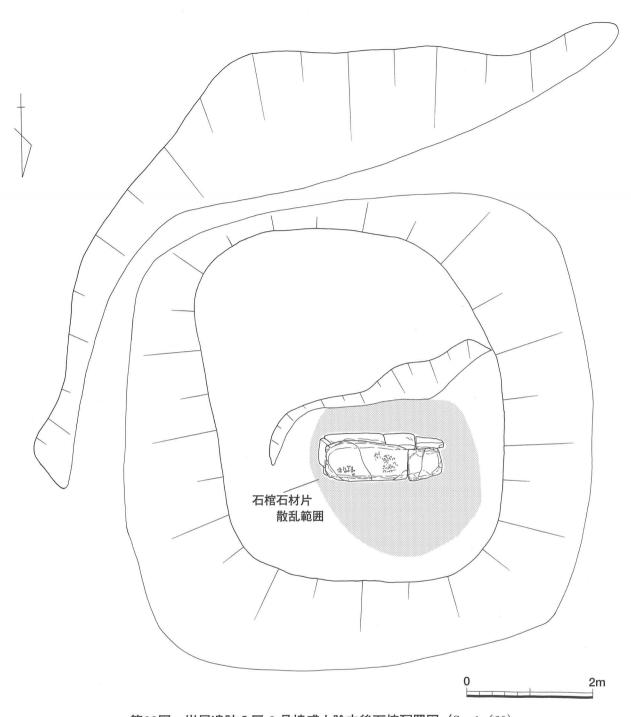
6号墳は1号墳に接するように、そこから北方へのびる尾根上の標高61~62m付近に位置する。 盗掘や破壊を受けた様子はなく、残存状況は良好で、石棺1つが直葬されていた。

墳丘(第67図・68図) 6号墳は一辺6.5mほどの方墳だが、各辺とも中央部がやや外側にふくらみ、それらの対辺距離は最大でいずれも7.5mを測る。また尾根のラインは15°ほど東にふれながら



第67図 岩屋遺跡 I 区 6 号墳墳丘測量図 (S=1/100)

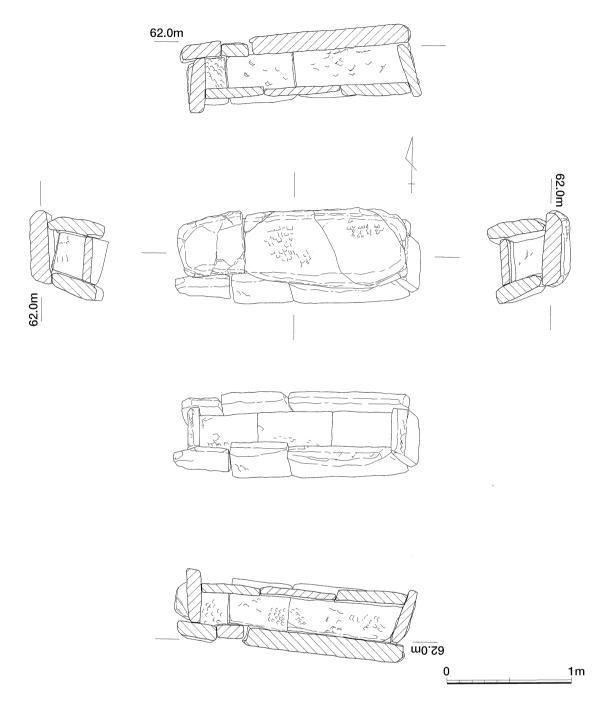




第69図 岩屋遺跡 I 区 6 号墳盛土除去後石棺配置図 (S=1/60)

北へのびるが、四辺のラインはほぼ正確に東西・南北方向を示す。また山側にあたる墳丘南側には 尾根を垂直に切る溝が設けられていた。

墳丘は方形の地山を削り出した上面に加工段状の平坦面を作り、その上に石棺を据えて盛り土を被せて築造されている。また、棺身の底部が接する付近の地山上に堆積する38層に、石棺石材と同じ石英安山岩質凝灰岩(白粉石)のブロックの混入が確認でき、ここで棺身設置時に石材の調整加工が行われたことが窺われる。また棺身中頃の高さで堆積する23層にも白粉石のブロックが混じり、これは棺蓋設置時の石材の調整加工痕であろう。したがって、盛り土は地山上の整地面に石材をたてて裏込めをして棺身を固定した後、蓋をしてその後に土が大きく被せられる手順で築成されたと

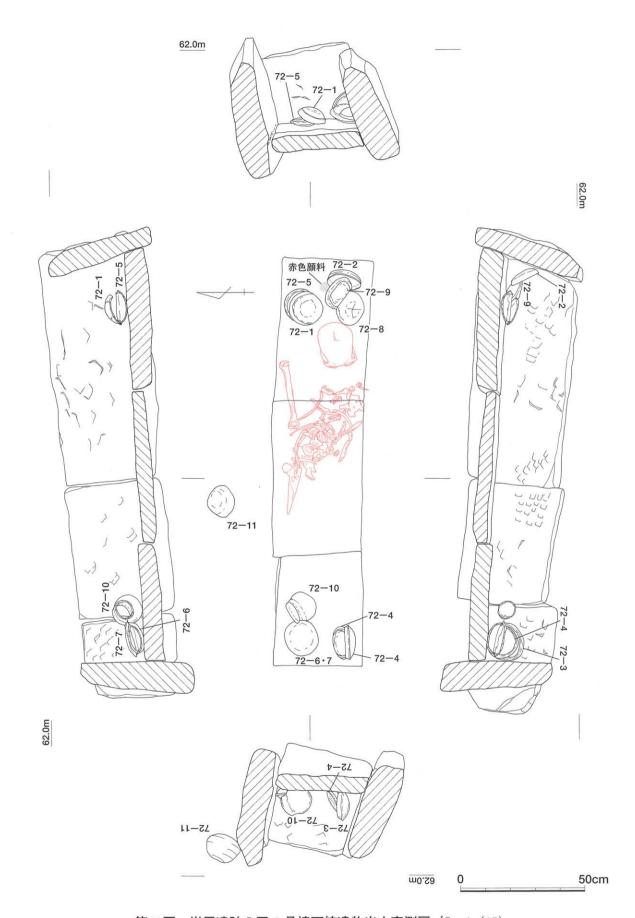


第70図 岩屋遺跡 I 区 6 号墳出土石棺実測図 (S=1/30)

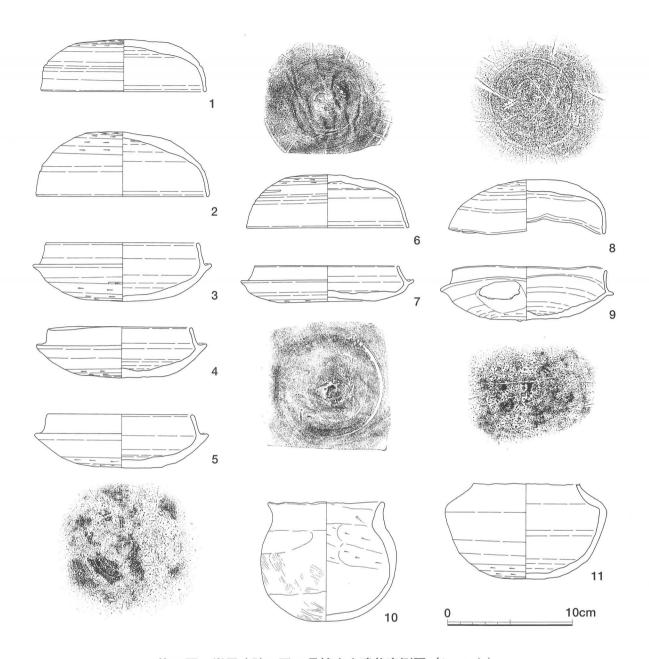
推定できる。

また、石棺東の小口側だけは棺身と棺蓋の境にあたる棺身上面の高さで堆積層がいったん水平を示し(17・23・33層)、あるいは大きく重い棺蓋をこちら側からスライドさせて棺身に乗せた痕跡ではなかろうか。

なお、石棺東の小口裏込めにあたる33~35層の堆積は、17層・23層の堆積によって切られ、西側の小口裏込の26~28層も同様に16・23層によって切られていた。したがって、地中に固定された棺身の周囲は小口側だけ浅く掘り返されたようだが、同様の状況が石棺の南北の側石付近では確認できず、これらを追葬などの痕跡とみることは難しいだろう。また、掘り返し後に堆積した23層が含



第71図 岩屋遺跡 I 区 6 号墳石棺遺物出土実測図 (S=1/15)



第72図 岩屋遺跡 I 区 6 号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

む白粉石のブロックが、先述のように棺蓋調整加工時のものであるとすれば、棺蓋は掘り返しを受けた後に初めて置かれたことになる。すなわち、少なくとも棺が閉じられた後に再び棺が開けられたことをこれらが示すものでない。また、墳丘南側の旧表土と思われる39層上で墳丘盛り土を構成する24・25層が16層以下の堆積層で切られているようにみえるが、これらが地山の土や旧表土下の40層と類似する土であることから、他の堆積土の状況と照らしても、これらをいったん築成された墳丘が掘り返されたことを示すと考えるより、棺身設置前の地山加工時に生じた廃土がここに盛られたものと解釈した方がよいであろう。

ただし、棺蓋の上に被る16層は、二枚で構成された棺蓋の西側の一枚の上だけ15層によって切られたような状況が観察できる。すなわち、埋葬して蓋が閉められ、16層の土が被された後、再び掘り返されて棺蓋の西側の一枚が開けられた可能性は十分考えられるのである。

石棺検出状況(第69図・70図) 石棺は墳丘の中央よりもやや北寄りに設置されていたが、これ

は地形上、6号墳の築かれた尾根が南へ15°の角度で高くなっているため、地山を最大限に利用して墳丘を築成する場合、墳丘北寄りに主体部を設けた方が石棺設置のための地山の掘り込み、あるいは盛り土の量が少なくて済むためであろう。

検出時、石棺は土圧などでやや北側に傾いてはいたが、それでも身の長軸はW-2°-Nと、ほぼ東西を指していた。

なお、盛り土を除去後、墳丘上には石棺を中心に円状に広がる白粉石のブロックが残されたが (第69図)、これは先述のように石棺設置時にその石材の調整加工をここで行った際のものであろう。 棺の内外からは土器が出土し、棺内には人骨も残されていたが、出土遺物も含めた石棺の詳細に ついては、以下で詳述したい。

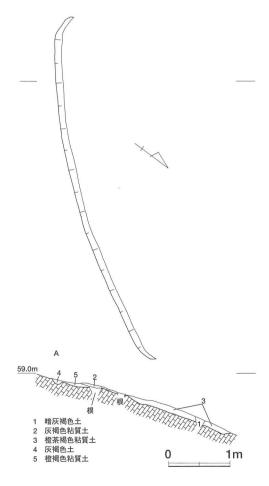
石棺(第70図・71図) 棺身の小口と側石は厚さ10~13㎝の石英安山岩質凝灰岩(白粉石)の板状切石を用いる。これらは基本的に南北それぞれ3枚の板石で構成される側石が東西の小口を挟み込む構造をとるが、南東隅部だけ小口の内側に側石が入り込み、その関係が逆転しているように見える。ただし、これは石棺が土圧などで全体的に北側へ傾いたために生じたものであろう。内・外面ともに不定方向の平刃のノミ痕を残すが、全体的に外面調整の方が粗い。また、側石・小口とも上端部外面は内側に入り込むように面取りがなされて蓋石に接し、下端部内面の床石側面と接する面は、帯状に削り取られた段状を呈すなど、5号墳の石棺と非常に類似した様相を呈している。

長さ1.65mを測る石棺の床は、厚さ10cm以内の 白粉石の板石3枚で構成され、床幅は東辺が 0.37m、西辺が0.36mと、ほぼ変わりがない。外 側からみた棺身の高さは0.45m程度で、棺身内面 では床面までが0.25m~0.3mの深さを持つ。

全長1.84mの蓋石は白粉石の板状切石2枚を用いる。西側の蓋石は厚さ0.1m、長さ0.54m、幅0.44~0.5m、東側の蓋石は厚さ0.14m、長さ1.3m、幅0.5~0.64mを測り、平面形はやや胴ぶくれ気味だが、厚みはほぼ一定したフラットなものである。なお、検出時、西側のものは中央に南北方向の大きな亀裂が入っていた。また、東側蓋石の西側蓋石と接する部分は、上面部分が突帯状に削り出されており、棺が密封される工夫が施されていたようだ。全体に平刃のノミで粗く調整されている。

遺物出土状況(第71図) 出土遺物は石棺内と 石棺外からのものに分けられる。まず、石棺内か らは比較的良好な状態で頭を東部に置く人骨1体 分と須恵器の蓋坏、土師器の壺などが出土した。

当古墳についても人骨は鳥取大学医学部法医学 教室の井上晃孝氏の立ち会い・指導のもと、取り 上げ作業を行った。それによると、人骨は40~50

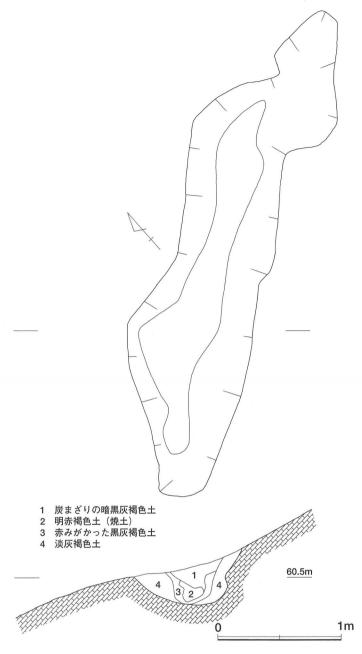


第73図 岩屋遺跡 I 区SX02実測図 (S=1/60)

才位の女性のもので、骨の並びに若干の乱れもあるとの指摘を受けた。また、脛骨などは遺存せず、棺の西側に人骨はほとんど残されていない。したがって、この骨の乱れは、先述の土層観察によって、西側の蓋が埋葬後一度開けられている可能性を傍証するものといえよう。

植内の土器も須恵器が坏蓋4点・坏身5点、土師器が壺1点と、5号墳の石棺と比較すると1体分の副葬品としてはその数が最も多い。西側の棺蓋がいったん開けられた可能性のあることを考慮すると、棺の西側に集中する土器のなかには、その際に埋納・あるいは移動されたものが含まれていることも考えられよう。

棺の東の頭部付近には、坏蓋72-2 が小口側に口縁を棺内に向けて立てかけられている他は、蓋坏2セットが並び置かれていた。蓋坏のセットはいずれも蓋と身がややずらされた状態で出土しているが、これらは枕として使用されたものであろうか。なお、頭部付近に赤色顔料の痕跡が認められ、その一部は坏蓋72-1の口縁端部にも付着していたが、これは分析の結果、ベンガラ質の赤色粘土と判断された。



第74図 岩屋遺跡 I 区SX03実測図 (S=1/30)

棺外からは、石棺北側の側石中央やや西寄りの、棺身上面に近い高さから72-11の須恵器の短頸壺が出土している。検出時、短頸壺は側石外面に接して、口縁を欠いたまま伏せられた状態であった。出土したのは第68図B-B´の土層観察のために設けたトレンチ内からで、出土位置からみて、B-B´の23層の上に側石に接して一段高く盛られた19・20層の上に置かれていたものと理解される。したがって、石棺の蓋が閉められた後、23層上に壇状の盛り土をし、そこに口縁を欠いた短頸壺を伏せて置いたものと推察される。このことは棺全体に盛り土が被せられる前に、祭祀行為が行われていたことを示すものであろう。

出土土器(第72図) 坏蓋 2 は口径が13.7cmと大きめで、器高も5.2cmで高い。天井は丁寧な回転へラ削りで、肩部稜線は上をナデつけ、下に沈線 1 条を入れて作り出す。口縁端部内面は沈線の上位を帯状にやや厚みを持たせ、段状を意識するが、大谷編年の β 類に属するものだろう。焼きはや